

阿武隈東道路遺跡発掘調査報告 1

荻平遺跡（1次調査）

2008年

福島県教育委員会
財團法人福島県文化振興事業団
国土交通省東北地方整備局福島河川国道事務所

阿武隈東道路遺跡発掘調査報告 1

おぎだいら
荻平遺跡(1次調査)



図1 萩平遺跡遠景(南東から)



図2 第1次調査区全景(北西から)

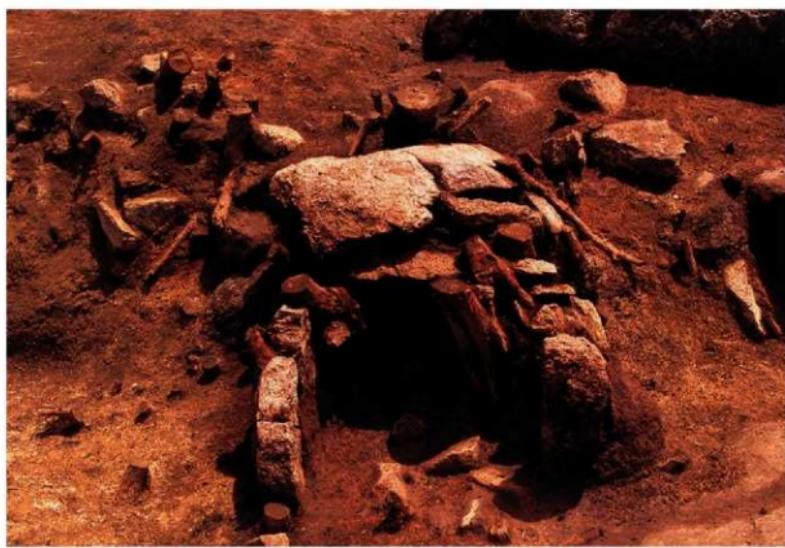


図3 2号竪穴住居跡カマド（北から）



図4 出土石器

序 文

文化財は、それぞれの地域の歴史に根ざした文化遺産であると同時に、我が国の歴史や文化等の正しい理解と、将来の文化の向上発展の基礎をなすものであります。

相馬市山上から東玉野を結ぶ延長10.7kmの高規格幹線道路である阿武隈東道路は、平成19年度から国土交通省の直轄事業として建設工事が着手されました。この計画路線上にも先人が残した貴重な文化遺産が埋蔵されており、福島県教育委員会は、周知の埋蔵文化財包蔵地を含め、多くの遺跡等の所在を確認してきました。福島県教育委員会と国土交通省東北地方整備局福島河川国道事務所はこれら埋蔵文化財保護のための協議を重ね、現状での保存が困難なものについては記録として保存することとして、発掘調査を実施することとしました。

本報告書は、平成19年度に発掘調査を行った、相馬市に所在する萩平遺跡の第1次調査成果をまとめたものです。今回の調査では、縄文時代と平安時代の住居跡が確認されました。縄文時代の住居跡は、前期前葉から中葉にかけてと、中期初頭の時期のもので、両時期とも数件程度の竪穴住居で構成された小規模な集落であったと推定されます。平安時代の竪穴住居跡は沢に面した北向き斜面に立地して作られ、石造りのカマドを構築していました。山間部に作られる平安時代の集落のあり方の研究に一石を投じることができたものと考えます。

今後、この報告書が、県民の皆様の文化財に対する理解を深めるとともに、地域の歴史を解明するための基礎資料として、さらには生涯学習の資料として広く活用していただければ幸いに存じます。

最後に、発掘調査の実施にあたり、御協力いただいた相馬市教育委員会、国土交通省福島河川国道事務所、財團法人福島県文化振興事業団をはじめとする関係機関及び関係各位に対し、深く感謝の意を表します。

平成20年12月

福島県教育委員会

教育長 野 地 陽 一

あ い さ つ

財団法人福島県文化振興事業団では、福島県教育委員会からの委託により、県内の大規模な開発に先立ち、開発対象地内にある埋蔵文化財の調査を実施しています。阿武隈東道路にかかる埋蔵文化財の調査については、平成15年度に表面調査を、平成18年度から試掘調査を実施し、平成19年度からは発掘調査を開始しました。

本報告書は平成19年度に発掘調査を行った相馬市山上地区に所在する荻平遺跡の調査成果をまとめたものです。

荻平遺跡からは、縄文時代早期から晩期までの出土遺物が確認されました。なかでも縄文時代前期前葉から中期初頭頃の竪穴住居跡が見つかり、小規模ながら集落が営まれていたことが確認されました。縄文時代でも比較的長期間にわたって当地を利用していたことが分かりました。

その他に平安時代の竪穴住居跡が発見されました。石造りのカマドは、当時の姿を保った良好な状態で遺存していました。相馬地区の山間部地域に営まれた小規模集落と考えられます。

今後、この報告書を郷土の歴史研究の基礎資料として、広く活用していただければ幸いに存じます。

終わりに、この調査に御協力いただきました相馬市並びに地域住民の皆様に、深く感謝申しあげますとともに、当事業団の事業の推進につきまして、今後とも一層のご理解とご協力を賜りますようお願い申し上げます。

平成20年12月

財團法人 福島県文化振興事業団
理事長 富田孝志

緒 言

- 1 本書は、平成19年度に実施した阿武隈東道路関連の遺跡発掘調査報告書である。
- 2 本書は、福島県相馬市山上字萩平に所在する萩平遺跡（1次調査）の調査成果を収録した。
- 3 本発掘調査事業は、福島県教育委員会が国土交通省東北地方整備局福島河川国道事務所の委託を受け、発掘調査を財団法人福島県文化振興事業団に委託したものである。
- 4 財団法人福島県文化振興事業団では、遺跡調査部遺跡調査グループの下記の職員を配置して調査にあたった。

文化財副主査 福田秀生
なお、臨時に次の職員の参加・協力を得た。
文化財主査 井憲治 嘴託 浅間陽
- 5 本書は、発掘調査を担当した職員が執筆した。
- 6 本書に使用した地図は、国土交通省国土地理院発行の5万分の1地形図を複製したものを使用した。
- 7 本書に収録した遺跡の調査記録および出土資料は、福島県教育委員会が保管している。
- 8 発掘調査および報告書作成にあたり、次の諸氏・諸機関から御助言・御協力をいただいた。

斎藤 博 佐藤一郎 相馬市教育委員会 (順不同・敬称略)

用 例

1 本書における遺構図の用例は、以下のとおりである。

- (1) 方 位 遺構図・地形図の方位は国土座標に基づく座標北を示す。
方位記号のないものは、本書の天を北とする。
- (2) 傾 斜 表 示 原則として遺構内の傾斜面はケバで表現した。
- (3) 土 層 基本土層はアルファベット大文字Lとローマ数字を組み合わせ、遺構内の堆積土はアルファベット小文字ℓと算用数字を組み合わせて表記した。
土色の観察には「新版標準土色帖」2000年版を使用した。
- (4) 標 高 海拔標高を示す。
- (5) 縮 尺 各挿図中に縮尺を示した。
- (6) 網 点 遺構図で使用した網点については、挿図中に示した。
- (7) 破 線 遺構平面図では、短破線「-」は推定線・挟り込み線を表している。それ以外の破線は、各層図中に用例を示した。

2 本書における遺物実測図の用例は、以下のとおりである。

- (1) 土 器 断 面 繩文土器・土師器は断面を白スキで表示し、須恵器は断面を黒く塗りつぶした。特に縄文土器の胎土中に纖維混和痕が確認できたものは、土器断面図中に▲で表した。粘土紐の積み上げ痕は一点鎖線で表記した。
- (2) 網 点 遺物実測図で使用した網点については、各挿図中に用例を示した。
- (3) 遺 物 番 号 遺物は挿図ごとに通し番号を付した。遺物番号の次のアルファベット・数字は出土位置・層位を示した。

3 本書における写真図版中の番号は、挿図番号と対照できるように、遺物写真図版中に「図」を略して記した。 (例) 図1-1→1-1

4 本書で使用した略号は、次のとおりである。

相馬市…SM 萩平遺跡…OGD 遺構外堆積土…L 遺構内堆積土…ℓ グリッド…G
竪穴住居跡…SI 土 坑…SK トレンチ…T 小 穴…P

5 参考・引用文献は執筆者の敬称を省略し、各章末にまとめて収めた。

目 次

第1章 遺跡の環境と調査経過	1		
第1節 調査に至る経緯	1		
1 阿武隈東道路建設事業の概要	1		
2 平成19年度までの調査経過	1		
第2節 遺跡の位置と自然環境	2		
第3節 歴史的環境	4		
第4節 調査経過	7		
第5節 調査の方法	8		
第2章 遺構と遺物	11		
第1節 遺跡の概要と基本土層	11		
1 遺跡の概要	11		
2 基本土層	11		
第2節 壺穴住居跡	14		
1号壺穴住居跡 (14)	2号壺穴住居跡 (17)	3号壺穴住居跡 (20)	
4号壺穴住居跡 (23)	5号壺穴住居跡 (26)	6号壺穴住居跡 (28)	
7号壺穴住居跡 (29)	8号壺穴住居跡 (30)	9号壺穴住居跡 (31)	
10号壺穴住居跡 (32)	11号壺穴住居跡 (33)		
第3節 土坑	35		
1号土坑 (35)	2号土坑 (35)	3号土坑 (36)	4号土坑 (36)
5号土坑 (36)	6号土坑 (37)	7号土坑 (37)	8号土坑 (37)
9号土坑 (38)	10号土坑 (38)	11号土坑 (38)	12号土坑 (39)
第4節 遺構外出土遺物	43		
第3章 まとめ	63		
1 繩文時代の壺穴住居跡について	63		
2 平安時代の壺穴住居跡について	64		
3 まとめ	66		

挿図・表目次

[挿 図]

図1 阿武隈東道路位置図.....	1	図21 10号竪穴住居跡.....	33
図2 道路周辺の表層地質図.....	3	図22 11号竪穴住居跡・出土遺物.....	34
図3 萩平遺跡と周辺の遺跡.....	6	図23 1~6号土坑.....	40
図4 調査範囲とグリッド配置図.....	9	図24 7~12号土坑.....	41
図5 道構配置図と基本上層柱状図.....	12	図25 土坑出土遺物.....	42
図6 基本上層図.....	13	図26 道構外出土遺物(1).....	43
図7 1号竪穴住居跡.....	15	図27 道構外出土遺物(2).....	45
図8 1号竪穴住居跡出土遺物.....	16	図28 道構外出土遺物(3).....	46
図9 2号竪穴住居跡.....	17	図29 道構外出土遺物(4).....	48
図10 2号竪穴住居跡カマド.....	18	図30 道構外出土遺物(5).....	49
図11 2号竪穴住居跡出土遺物.....	19	図31 道構外出土遺物(6).....	54
図12 3号竪穴住居跡.....	21	図32 道構外出土遺物(7).....	55
図13 3号竪穴住居跡出土遺物.....	22	図33 道構外出土遺物(8).....	56
図14 4号竪穴住居跡.....	24	図34 道構外出土遺物(9).....	57
図15 4号竪穴住居跡出土遺物.....	25	図35 道構外出土遺物(10).....	58
図16 5号竪穴住居跡・出土遺物.....	27	図36 道構外出土遺物(11).....	59
図17 6号竪穴住居跡.....	28	図37 道構外出土遺物(12).....	60
図18 7号竪穴住居跡・出土遺物.....	30	図38 道構外出土遺物(13).....	61
図19 8号竪穴住居跡.....	31	図39 道構外出土遺物(14).....	62
図20 9号竪穴住居跡.....	32		

[表]

表1 周辺遺跡一覧.....	7	表3 出土遺物点数表.....	43
表2 土坑一覧.....	39	表4 グリッド別出土遺物点数表.....	44

写真図版目次

1 萩平遺跡遠景.....	69	24 5~7号土坑.....	80
2 第1次調査区全景.....	69	25 8~10号土坑.....	81
3 第1次調査区遠景.....	70	26 11~12号土坑.....	81
4 調査区北端部全景.....	70	27 1号竪穴住居跡出土遺物.....	82
5 基本上層.....	71	28 2号竪穴住居跡出土遺物.....	82
6 調査区近景・作業風景.....	71	29 3・5・11号竪穴住居跡出土遺物.....	83
7 1号竪穴住居跡全景.....	72	30 4号竪穴住居跡出土遺物.....	83
8 1号竪穴住居跡細部.....	72	31 土坑出土遺物.....	84
9 2号竪穴住居跡全景.....	73	32 道構外出土遺物(1).....	84
10 2号竪穴住居跡細部.....	73	33 道構外出土遺物(2).....	85
11 3号竪穴住居跡全景.....	74	34 道構外出土遺物(3).....	85
12 3号竪穴住居跡細部.....	74	35 道構外出土遺物(4).....	86
13 4号竪穴住居跡全景.....	75	36 道構外出土遺物(5).....	86
14 4号竪穴住居跡細部.....	75	37 道構外出土遺物(6).....	87
15 5号竪穴住居跡全景.....	76	38 道構外出土遺物(7).....	87
16 6号竪穴住居跡全景.....	76	39 道構外出土遺物(8).....	88
17 7号竪穴住居跡全景.....	77	40 道構外出土遺物(9).....	88
18 8号竪穴住居跡全景.....	77	41 道構外出土遺物(10).....	89
19 9号竪穴住居跡全景.....	78	42 道構外出土遺物(11).....	89
20 10号竪穴住居跡全景.....	78	43 道構外出土遺物(12).....	90
21 11号竪穴住居跡全景.....	79	44 道構外出土遺物(13).....	90
22 11号竪穴住居跡細部.....	79	45 道構外出土遺物(14).....	91
23 1~4号土坑.....	80	46 道構外出土遺物(15).....	92

第1章 遺跡の環境と調査経過

第1節 調査に至る経緯

1 阿武隈東道路建設事業の概要

阿武隈東道路は、広域交流の促進を図るとともに、一般国道115号の交通隘路区間の解消、緊急時や災害時の輸送路の確保を目的とした高規格幹線道路（自動車専用道路）である。その路線は、福島県相馬市山上地区を基点とし、途中宮城県伊具郡丸森町を通過し、相馬市東玉野地区を結ぶ総延長10.7kmの2車線道路として計画されている。

阿武隈東道路は、福島県と山形県を結ぶ東北中央道建設に関連して、福島県内の高規格道路整備事業のひとつに位置づけられている。将来的には、福島県伊達市に建設が計画されている金山道路とともに、東北自動車道福島JCと常磐自動車道相馬ICを結ぶ道路となる計画である。

2 平成19年度までの調査経過

阿武隈東道路建設予定地内の埋蔵文化財については、福島県教育委員会の委託を受けた財團法人福島県文化振興事業団によって平成15年度に表面調査が実施されている。この表面調査では、計画路線の大部分が急峻な山間部を通過するトンネル区間となることから、確認できた遺跡・遺跡推定地は少なく、わずかに宇多川や玉野川に面した河岸段丘上に立地する周知の遺跡2箇所、遺跡推定地5箇所を確認した（『福島県内遺跡分布調査報告9』）。

試掘調査は平成18年度から実施された。同年10~11月に用地等の条件が整ったSM-B⑤（荻平

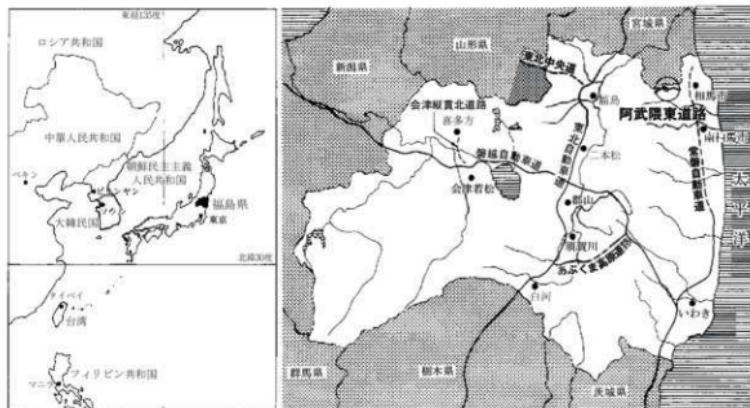


図1 阿武隈東道路位置図

遺跡）の試掘調査（第1次調査）を実施した。調査の結果、縄文時代早期から晩期にかけての遺構・遺物が確認でき、荻平遺跡として埋蔵文化財包蔵地台帳に登録した。第1次調査の保存範囲は5,000m²である。さらに遺跡範囲が北側に広がることが確認されたことから、国土交通省東北地方整備局福島河川国道事務所と福島県教育委員会、財團法人福島県文化振興事業団の3者で協議し、試掘対象範囲として15,000m²を追加し、平成19年度に試掘調査を実施することが決められた（『福島県内遺跡分布調査報告13』）。

平成19年度は、前年度に引き続き荻平遺跡の試掘調査及び発掘調査が実施されることとなった。また用地等の条件が整った小田原地区のSM-B①（小豆畑遺跡）の試掘調査に着手することが決められた。荻平遺跡の第2次試掘調査では、これまで確認されていた縄文時代の遺構・遺物に加えて、平安時代の堅穴住居跡を確認するなどの所見も得られた。さらに遺跡南側では、厚さ2mに及ぶ土砂崩落土を間層として、縄文時代早期末葉～前期初頭と縄文時代後晩期の大きく2時期の文化面を確認できた。10月に実施した第3次試掘調査では、未調査であった宅地部分の調査を実施し、荻平遺跡の試掘調査はすべて完了した。第3次までの試掘調査の結果、保存範囲は総計27,900m²である（『福島県内遺跡分布調査報告14』）。

平成19年度の発掘調査は、試掘調査の結果と工事用道路等の工事計画の優先順位から、遺跡の最北端部3,300m²の発掘調査を実施することとなった。

第2節 遺跡の位置と自然環境

福島県は東北地方の南端に位置する。南北に走る阿武隈高地・奥羽山脈・越後山脈に隔てられた浜通り地方・中通り地方・会津地方の3地域に区分される。荻平遺跡が所在する相馬市は、浜通り地方の北部に位置する。北は相馬郡新地町・宮城県伊具郡丸森町、西は伊達市靈山町、南は相馬郡飯館村・南相馬市鹿島区に接し、東は太平洋に面している。

相馬市の地形を概観すると、市域の西部を南北に継ぐ双葉断層を境に、阿武隈山地東縁部と低地帯、海岸部の大きく3つに分けられる。阿武隈山地東縁部は靈山（標高804m）、古靈山（標高783m）、手倉山（標高672m）、彦四郎山（標高635m）、天明山（標高488m）の山々が連なり、標高500m前後のなだらかな地形を形成している。低地帯は山麓丘陵部と沖積平野部に分けられる。丘陵地は、東流する宇多川・小泉川・地蔵川・日下石川などの影響で東西方向に発達し、海岸部に向い標高200～20mと標高を減じながら段丘面を形成している。これらの段丘面は、I～V面に相当する高位段丘から最低位段丘までが確認されている。沖積平野は丘陵間を流れる河川流域に面して河岸段丘・扇状地が形成される。海岸部は松川浦・新沼浦などの潟湖がみられる。

相馬市の地質については、双葉断層とほぼ一致して分布する割山地帯・相馬中生層群を境にして大きく東西に分かれている。西が新生代第三紀中新統起源の丘陵、東を新第三紀鮮新統起源の丘陵地に分けられる。双葉断層以西の地質構造は、玄武岩質集塊岩・カンラン石玄部溶岩からなる天明山

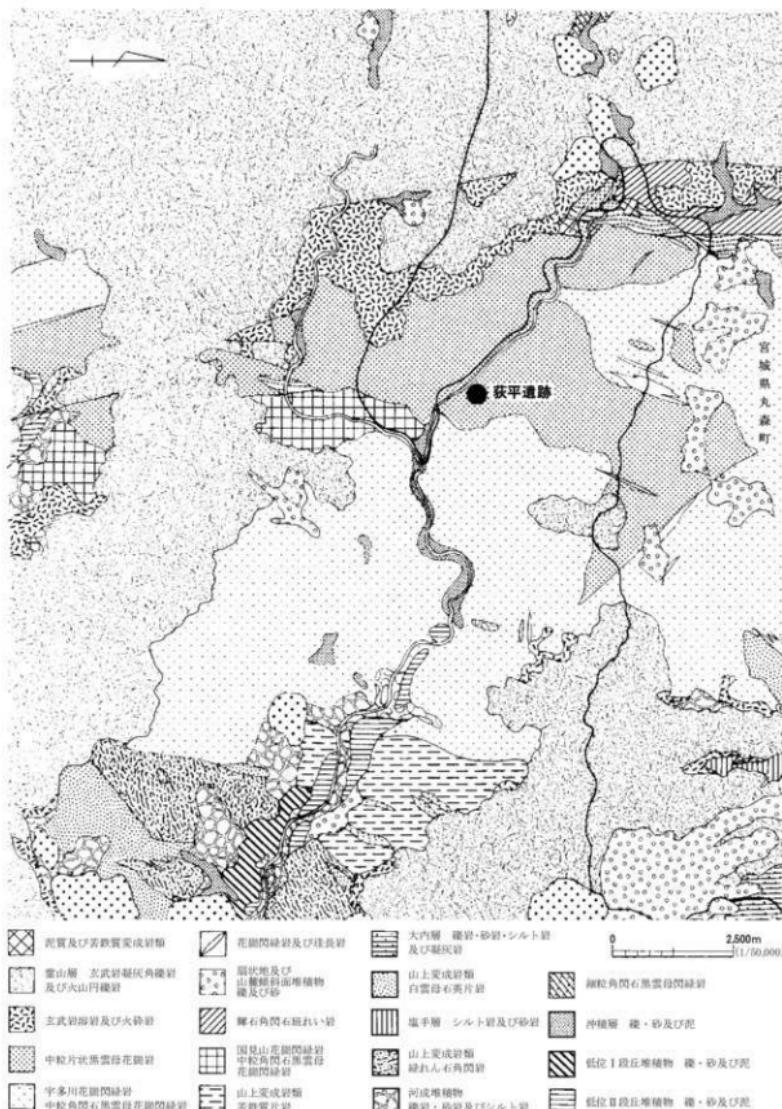


図2 遺跡周辺の表層地質図（1990「相馬中村」より作図）

集塊岩（靈山層）が大部分を占め、河川流域付近に礫岩・凝灰岩を特徴とする塩手層・富沢層・山上変成岩などが分布している。双葉断層以東は、砂岩・頁岩などからなる北沢層・栗津層・山上層・柄窪層・中ノ沢層が不整合に分布する。丘陵地は第三紀鮮新世の半固結堆積物からなる久保間層・山下層で構成される。低地は海岸平野堆積物・段丘堆積物などの未固結堆積物が広く分布している。

相馬市は太平洋岸気候区に属し、「夏は涼しく冬が暖かい」浜通り地方特有の気候である。年間を通して晴天の日が多く、降水量が少ない。年間の平均気温12℃、平均降水量が1,300mmと観測されている。一方、梅雨時期には「やませ」と呼ばれる北東風が吹き込むことがあり、日照不足・低温気候が続き農作物に影響することもある。

荻平遺跡は相馬市山上字荻平に所在し、相馬市の北西端に位置している。遺跡西側を流れる宇多川を挟んだ対岸は宮城県伊具郡丸森町筆甫となる。荻平遺跡の位置は、阿武隈山地と山麓丘陵部の境に相当し、手倉山の南側を東流する宇多川上流部の中では最も広い河岸段丘上に立地している。遺跡の標高は265m～320mを測る。

遺跡周辺の地質は、花崗岩を基盤とする地域で、宇多川の段丘上は山地の土砂崩れを起源とする堆積物で広く覆われている。現況でも土砂崩れ等で崖面に花崗岩が露出する箇所が数多く見られる。試掘調査の結果からも、特に遺跡中央から南部にかけての範囲は、宇多川に向かって開口する谷を起源とする崩落土が厚く堆積する地形となる。試掘の20号トレンチなどに見られるように、花崗岩の巨石を含む土砂崩落土層と表土化した黒色土層が縞状に重なった状態で、地表下数mにわたり堆積している状況が観察できた。

第3節 歴史的環境

阿武隈東道路建設予定地となる相馬市山上地区から同市東玉野地区にかけては、相馬市の西部に位置する。そのほとんどが険しい山地で、宇多川・玉野川流域以外に平坦地は少ない。図3に示す通り、遺跡の数は極端に少ない。相馬市を含む浜通り地方の北部では、相馬地域開発に伴う発掘調査、常磐自動車道、一般国道6号バイパス、113号バイパス建設工事などの道路工事に伴う発掘調査などが実施されている。これら開発行為が相馬市中心部から海岸部にかけての地域を中心で、相馬市西部の山間部の開発行為が少なく、埋蔵文化財についても詳細な調査が実施された遺跡は極めて少ないことも、その要因の一つになっている。荻平遺跡の周辺地域で実施された発掘調査例は、松ヶ原ダム建設に伴い宮城県教育委員会が発掘調査を実施した下南山遺跡（図3-5）、福島県文化センター（現福島県文化振興事業団）を調査機関として、県営かんがい排水事業相馬第二地区の発掘調査が行われた小田原遺跡（図3-4）がある。また平成19年度の阿武隈東道路に関わる試掘調査において、新たに小豆畑遺跡（図3-2）が確認されただけである。現在までのところ、相馬市西部の歴史的環境について不明な点が多い。本節では相馬郡域の遺跡を中心として、本遺跡の主体となる繩文時代から平安時代にかけての歴史的環境を概観する。

相馬郡域で旧石器時代を代表する遺跡として、新地町に所在する三貫地遺跡が挙げられる。ナイフ形石器など約1万点に及ぶ石器が出土している。石核と石片が接合する資料があり、石器製作の痕跡が確認された。年代は後期旧石器時代（約2万年前）と推定されている。その他に相馬市北原遺跡・段ノ原A遺跡・段ノ原B遺跡が知られている。北原遺跡と段ノ原遺跡ではナイフ形石器、段ノ原B遺跡では細石刃核が出土している。本遺跡では旧石器時代の遺物は確認していない。

縄文時代の遺跡は、阿武隈山地から延びる丘陵地や段丘上に立地する遺跡が増加する。調査事例も多く、相馬開発に伴う段ノ原B遺跡・山田B遺跡・猪倉B遺跡の調査では、縄文時代早期末葉から前期前葉にかけての大集落が確認されている。その他代表的な遺跡として、大森A遺跡や双子遺跡は低湿地に立地する縄文時代後期・晚期の遺跡で、丸木舟・丸木弓など木質遺物が豊富に出土している。また新地町には三貫地貝塚、新地貝塚など学史的に著名な遺跡が所在している。本遺跡の主体となる縄文時代前期前葉から中期初頭の時期では、飯館村羽白C遺跡・上ノ台B遺跡など真野ダム建設に伴い発掘調査が実施された遺跡群、新地町山中B遺跡などの調査事例がある。本遺跡周辺の調査事例では、小田原遺跡から縄文時代早期中葉・中期末葉から後期初頭の遺物が出土している。明神遺跡では縄文時代前期後半・中期末葉～後期後葉の土器が出土している。下南山遺跡からは、縄文時代前期前葉・前期後葉から中期初頭の遺構群が検出されている。その他に縄文時代早期中葉・末葉の縄文土器、弥生土器、土師器がわずかに出土している。

弥生時代の遺物が出土した遺跡は多いが、明確な遺構を伴う調査事例は少ない。藤堂塚遺跡では弥生時代前期の再葬墓が確認されている。集落跡については、相馬市榮迫古墳群、新地町武井地区遺跡群において弥生時代中期の小規模集落跡が知られている。本遺跡周辺では下南山遺跡でわずかに弥生土器が出土し、山間部での生活痕跡が確認されている。

古墳時代の遺跡では、山中遺跡で古墳時代前期の土師器が確認されるなど、早い時期からの生活痕跡が確認されている。古墳の調査事例では、丸塚古墳から人物や馬の埴輪、円筒埴輪が出土し、高松1号墳からは人物埴輪や円筒埴輪の他に馬具・金銅製承盤付鏡・金銅製雲珠が出土している。さらに当該地区は横穴墓も多数確認されている。なかでも福追横穴墓群では金銅製双龍環頭大刀柄頭が出土している。近年、本笑和田横穴墓群の発掘調査が実施されている。一方、墳墓の調査事例に対し、集落跡の調査事例は知られていない。大森A遺跡では該期の水田跡が確認され、木製農具などが出土している。水田跡の発見により、水路の開削や用水の管理などある程度の人員を要する作業が伴うことは想像に難くない。古墳の分布状況と併せて、大規模な集落跡の存在が想定される。本遺跡周辺を含む相馬市西部では、古墳時代の遺構・遺物は確認されていない。

奈良・平安時代の代表的な遺跡として、古代宇多郡の郡家または寺院に比定される黒木田遺跡が挙げられる。生産遺跡では、黒木田遺跡から出土した瓦の供給源となった善光寺窯跡や山崎窯跡などで須恵器生産が開始される。製鉄関連遺跡では新地町武井地区遺跡群の山田A遺跡・猪倉B遺跡が挙げられ、製鉄炉だけでなく鋳造に関わる鋳型も出土している。本遺跡が所在する山上地区では、近年調査された明神遺跡からL字形に並ぶ掘立柱建物群で構成された集落跡が見つかっている。ま

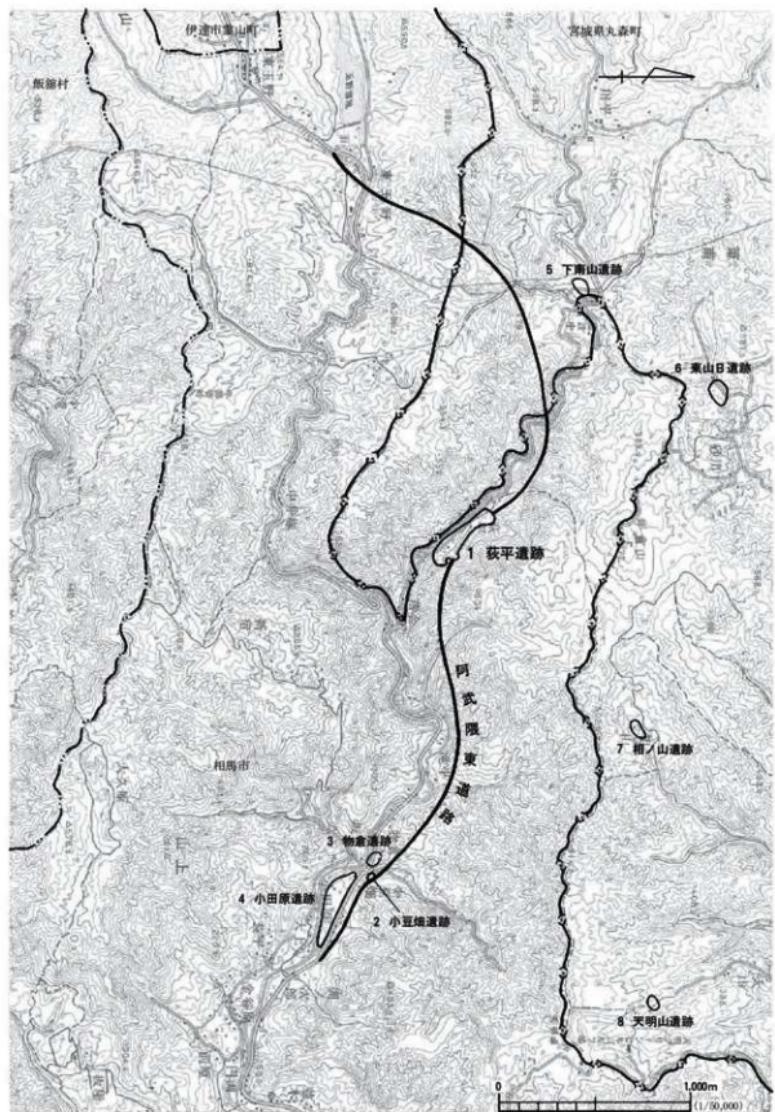


図3 萩平遺跡と周辺の遺跡

表1 周辺遺跡一覧

番号	遺跡名	所在地	種別	時代	遺跡番号	備考
1	荻平遺跡	福島県相馬市山上字荻平	集落跡	縄文・平安	20900202	『県分布13・14』
2	小豆畠遺跡	福島県相馬市山上字小豆畠	散布地	縄文・平安	20900203	『県分布14』
3	物倉遺跡	福島県相馬市山上字物倉	散布地	縄文	20900170	
4	小田原遺跡	福島県相馬市山上字小田原	散布地	縄文	20900132	『相馬第II地区1』
5	下南山遺跡	宮城県丸森町筆甫字下南山	集落跡	縄文・平安	10152	『宮城144・155集』
6	東山B遺跡	宮城県丸森町筆甫字東山	散布地	縄文	10112	
7	相ノ山遺跡	宮城県丸森町大内字青葉南	散布地	縄文・平安	10100	
8	天明山遺跡	宮城県丸森町大内字青葉南	散布地	縄文・古代	10099	

*『県分布』:福島県内遺跡分布調査報告　『宮城』:宮城県文化財調査報告書

*『相馬第二地区』:県営かんがい排水事業相馬第二地区遺跡発掘調査報告

た鉄滓が採取できる遺跡が散見でき、山上地区においても製鉄関連遺跡の存在が窺われる。平安時代になると、それまで人々の生活区域として利用されていなかった相馬市西部の山間部開発が開始される時期になるのであろう。本遺跡の2号竪穴住居跡の発見から、平安時代の小規模集落が山間部に存在することが分かる。2号竪穴住居跡の調査成果からは、具体的な生業までは明らかにできなかったが、狩猟や木材の調達を始めとする様々な山間部開発に携わる集落と考えられる。

中世から近世にかけては、源頼朝の奥州征伐を契機に、下総国から入部したと伝えられる千葉氏(相馬氏)の支配に入る。相馬氏の支配は、南北朝から戦国時代までは不安定であったようで、数多くの城館が造られている。南北朝期の南朝方の拠点である靈山城に対して黒木城跡や熊野堂館跡などが築城された。近世になると相馬氏は、宇多郡の支配を確立したことから中村城に居を移し、明治2年の藩籍奉還までその支配が続く。その他に近世の遺跡として、古川尻B遺跡や山中B遺跡の調査事例において、新沼浦で入浜式製塩技法を用いた製塩業が盛んであったことが判明している。さらに山上地区では、相馬藩の火薬庫である山岸硝庫跡の調査が実施された。

第4節 調査経過

荻平遺跡は、平成15年度に実施した阿武隈東道路建設に伴う表面調査によって確認された遺跡推定地(SM-B⑤)である。平成18年・19年に試掘調査が実施され、縄文時代早期～晩期、平安時代にかけての複合遺跡として埋蔵文化財包蔵地台帳に登録された(遺跡番号20900202)。遺跡の面積は、69,000m²である。

平成19年度は、発掘調査に先立ち国土交通省東北地方整備局福島河川国道事務所と福島県教育委員会及び財團法人福島県文化振興事業団の3者で協議を行った。この時、工事用道路の建設が最優先とする工事計画であるため、4月当初は試掘調査に着手し、荻平遺跡の保存範囲を確定後に改めて発掘調査範囲を協議することが決められた。そのため財團法人福島県文化振興事業団では4～5月に試掘調査を実施し、27,900m²の保存範囲を確認した。同年5月には試掘調査の結果を受け、前述の3者で協議を重ね、工事用道路の敷設で優先度が高い範囲、遺跡の最北端部3,300m²の発掘調

査を実施することが決められた。

萩平遺跡の発掘調査（1次調査）は、調査員1名を配置して開始された。調査期間は平成19年5月21日～同年11月22日まで延べ136日間である。5月下旬は表土除去を開始するとともに、調査事務所・作業員休憩所の設置、駐車場の用地造成など発掘調査の準備作業が中心となる。

6月は表土除去作業を継続する。遺跡の基盤土に混入する巨大な花崗岩が数多く露頭するため、重機による表土除去作業が難航する。また表土除去と同時に、人力による遺構確認作業にも着手する。調査区のほぼ全域において花崗岩が露頭するため、安全な作業用通路を確保しながら掘削作業や排土運搬作業に着手する。さらに6月下旬は雨天も続き、堆土や巨石の崩落防止など安全面に配慮した措置を施す。

7～8月は調査区北部の遺構確認作業を中心的に行う。縄文時代前期前葉～中期初頭頃の堅穴住居跡が4軒重複して分布していることが判明する。土器・石器なども相当量出土し始める。また平安時代の堅穴住居跡を1軒検出し、石造りのカマドを持つことが確認された。7月21日には、遺跡の案内人（ボランティア）事業の現地公開を実施した。あいにくの雨天であったが、約30名の来訪者があった。また8月1日～3日には、本遺跡を会場として福島県文化財センター白河館による教職員を対象とした発掘調査体験研修を実施した。

8月下旬からは調査区南半部の遺構確認作業に着手する。花崗岩巨石が最も多く露頭する範囲で、掘削作業に困難を極める。調査区中央部は、比較的緩やかな南向き斜面となるが、調査区北部の丘陵頂部に比べ遺構・遺物は極端に希薄となることが確認された。

9～10月は好天に恵まれ順調に作業が進む。10月下旬には調査区南端部で11号堅穴住居跡を検出した。遺物は石匙1点だけと年代を特定できる遺物が少ないが、住居跡の床面中央部で焼跡が確認された。

11月は順調に調査終盤を迎える。ラジコンヘリコプターによる空中写真撮影、地形測量などを行う。遺跡の基盤層を深く掘り下げるなど、基本土層の観察とともに遺構・遺物の最終的な確認作業を行い、11月22日までには現地調査を終了した。国土交通省東北地方整備局福島河川国道事務所と福島県教育委員会及び財團法人福島県文化振興事業団の3者が現地の調査終了を確認し、11月28日付で引き渡した。

第5節 調査の方法

萩平遺跡の調査にあたり、遺構の位置や遺物の出土位置を示すために世界測地系に基づく国土地標を用いた方眼を設定し、これをグリッドと称した。グリッドは、X:198,900, Y:84,200を原点とし、100m四方の方眼（大グリッド）を設定した。大グリッドの呼称は、原点からX座標の南に向かって1・2・3…、Y座標の東に向かってA・B・C…とし、これらを組み合せてA1・B1…とした。さらに大グリッドを10m四方の方眼に細分した小グリッドを設定した。小グリッドの呼称は、大グ

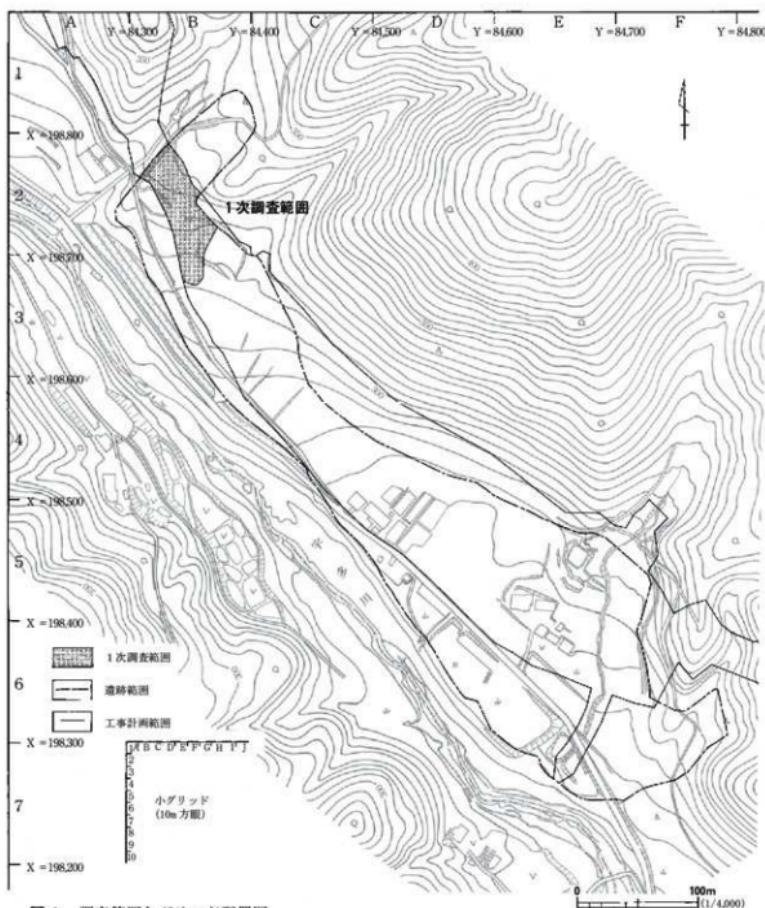


図4 調査範囲とグリッド配置図

リットと同様な方法で表記し、大グリッド・小グリッドを組み合せて、B 2 - E 4などと表記した。遺跡内の標高は、遺跡に近接する三角点から移動して計測の基準とした。

調査区内の表土層は、重機を用いて除去作業を行った。表土層より下層の堆積土は、原則的に人力で掘り下げた。堆積土層ごとに遺物の出土状態などに留意しながら掘り下げた。

遺構の調査にあたっては、その特性や遺存状態に応じて土層観察用の畦を設け、堆積状況や遺物の出土状態などに留意して精査を進めた。堆積土の表記については、基本土層など遺構外の堆積土はLとローマ数字I・IIを組み合わせ、L I・L II・・とした。遺構内の堆積土は、ℓとアラビア

数字を組み合わせ、 $\ell 1 \cdot \ell 2 \cdots$ と表記した。なお堆積土の観察には、「新版標準土色帖（2000年版）」を参考にした。

遺構などの図化記録については、小グリッドを1m四方の方眼にし、その交点を計測の基準とした。遺構の位置表示は、計測の基準となった交点の座標値をそのまま使用した。遺構の平面図・断面図などの図化は、縮尺1/20で記録した。なお、遺構の特徴にあわせて、1/10の縮尺で記録したものもある。調査区の地形図は1/200の縮尺で作成した。

写真記録は、調査の過程にあわせて随時撮影している。35mm判のモノクロ・カラーリバーサルフィルムを使用し、両者同一カットで撮影した。またラジコンヘリコプターを用いた空中写真撮影も実施した。

発掘調査で得られた各種記録や出土遺物は、財團法人福島県文化振興事業団遺跡調査部において整理作業を行った。報告書刊行後は各種台帳を作成し、閲覧可能な状態で福島県文化財センター白河館に収蔵・保管する。

参考文献

- 鈴木敬治ほか 1987 「土地分類基本調査」「保原」 福島県農地林務部農地計画課
- 鈴木敬治ほか 1989 「土地分類基本調査」「相馬中村」 福島県農地林務部農地計画課
- 真山 悟ほか 1991 「館南園道路ほか」宮城県文化財調査報告書第144集 宮城県教育委員会
- 宮城県教育委員会 1993 「宮城県道路図」 宮城県文化財調査報告書第152集
- 須田良平・天野順陽 1993 「下南山道路」宮城県文化財調査報告書第155集 宮城県教育委員会
- 柳沢幸夫ほか 1996 「地域地質研究報告」「相馬中村地域の地質」 通商産業省工業技術院地質調査所
- 福島県教育委員会 1996 「福島県道路地図 浜通り地方」 福島県文化財調査報告書第321-3集
- 小暮伸之 1998 「小田原遺跡」「郡営かんがい排水事業 相馬第二地区遺跡発掘調査報告」 福島県文化財調査報告書第340集 福島県教育委員会
- 農林水産省農林水産 2000 「新版標準土色帖」2000年版 印日本色彩研究所
技術会議事務局
- 西 徹雄 監修 2000 「図説 相馬・双葉の歴史」郷土出版社
- 輔村圭一ほか 2002 「柴塚古墳群」「一般国道6号相馬バイパス遺跡発掘調査報告Ⅳ」 福島県文化財調査報告書第403集 福島県教育委員会・財福島県文化振興事業団
- 佐藤 啓・青山博樹 2006 「明神遺跡」「常磐自動車道遺跡調査布告42」 福島県文化財調査報告書第432集 福島県教育委員会・財福島県文化振興事業団
- 香川慎一・今野 健 2007 「山中B遺跡」「一般国道6号相馬バイパス遺跡発掘調査報告Ⅰ」 福島県文化財調査報告書第437集 福島県教育委員会・財福島県文化振興事業団
- 山岸英夫・三浦武司 2007 「山岸硝薬跡」「常磐自動車道遺跡調査布告48」 福島県文化財調査報告書第443集 福島県教育委員会・財福島県文化振興事業団

第2章 遺構と遺物

第1節 遺跡の概要と基本土層

1 遺跡の概要（図5、写真1～4）

荻平遺跡は相馬市北西端、手倉山の南側を東流する宇多川上流域の河岸段丘上に立地している。遺跡は宇多川北岸の段丘平坦面とそれを望む南北向斜面からなる。段丘面の広さは南北約250m、東西約100mと、宇多川上流域では最も広い段丘面である。遺跡面積は69,000m²である。

平成19年度の1次調査範囲は、荻平遺跡の最北端部にあたる。地形的には、南北を沢に開析され、東西方向に延びる尾根の頂部平坦面から南北向斜面となる。現況は山林である。

1次調査では、竪穴住居跡を11軒、土坑を12基確認した。2号竪穴住居跡は平安時代に属し、7号竪穴住居跡は遺存状態が悪いが、平安時代に属する可能性がある。それ以外の竪穴住居跡は、縄文時代前期前葉～中葉、中期初頭の時期に属する。土坑は出土遺物が少なく、性格や年代を特定できたものは少ないが、概ね縄文時代に属する。竪穴住居跡の分布は、調査区北側の尾根頂部に集中している。また巨石を避けて竪穴住居を構築するためか、調査区内でも花崗岩の露頭が少ない場所で、重複して構築される傾向が見られる。縄文時代の竪穴住居跡の3～6・9号竪穴住居跡、平安時代の2号竪穴住居跡など、時期を異にしても同様な傾向がある。斜面部では1・11号竪穴住居跡があり、頂部平坦面に比べれば遺構は希薄である。

出土遺物は、表3に示すとおり縄文土器・石器・土師器・須恵器がある。遺物の年代は、縄文時代早期中葉～後・晚期、平安時代まで見られる。出土遺物の約9割が縄文土器で、その中で主体となる時期は、縄文時代前期前葉～中期初頭である。遺物の分布については、遺構の分布と同様に尾根頂部に集中する傾向が見られ、調査区西側の花崗岩が密集する部分では極めて少ない。また調査区東側の谷部に遺物の分布が見られるが、LⅡ層の堆積状況などから、斜面上位となる尾根の頂部からの流れ込みと考えている。

遺構・遺物の分布から、縄文時代でも比較的長期にわたる生活痕跡が見られた。各時期ともに遺物の出土量は少ないとから、集落の規模は極めて小さいことが分かる。さらに尾根の頂部付近でも花崗岩巨石を避けて竪穴住居を造るなどの土地利用を伺うことができる。

2 基本土層（図5・6、写真5）

遺跡内の基本土層は、土質や含有物などからLⅠ層～LⅣ層の大きく4層に分けた。さらに各層でも、地形ごとの堆積層の形成要因や含有物の違いなどから、a・b・c用いて細分している。

LⅠ層は、遺跡全体を覆う現表土層である。層厚は10～30cmである。

LⅡ層は、黒色を基調とする堆積土で、縄文時代早期中葉から縄文時代後・晚期までの遺物を包

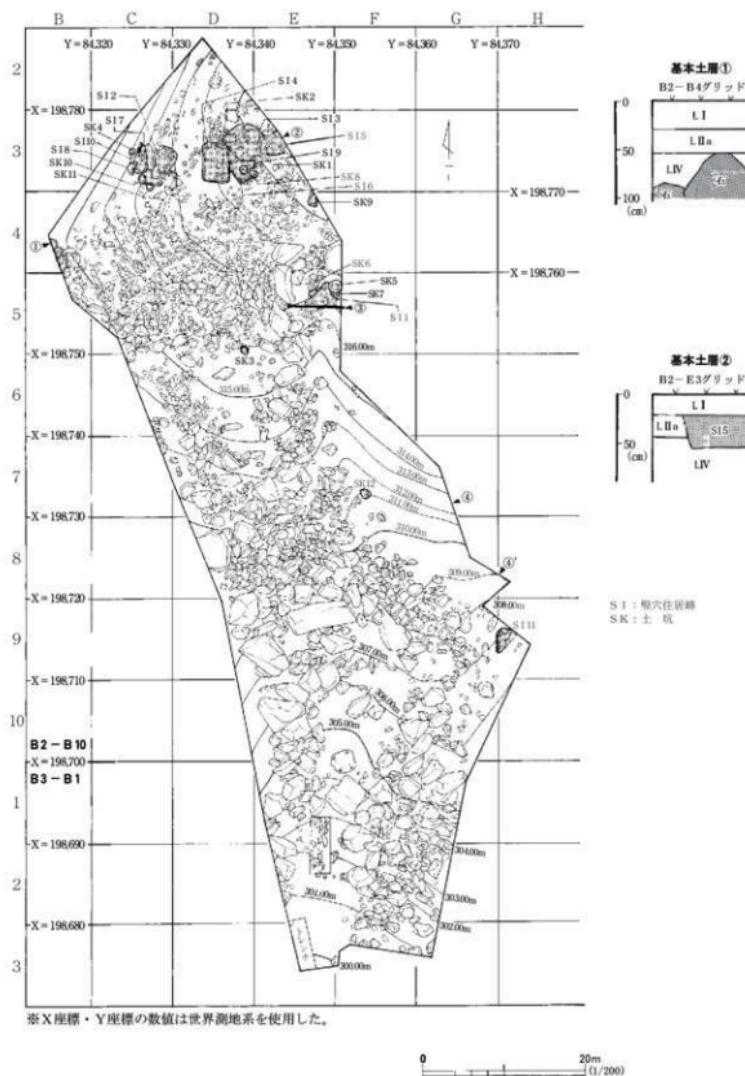


図5 遺構配置図と基本土層柱状図

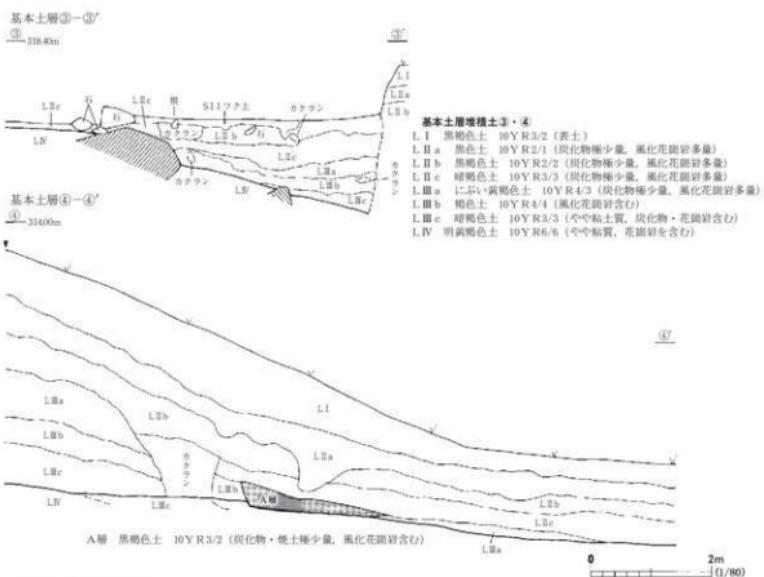


図6 基本土層図

含する堆積土を一括した。また地形的な分布や含有物などの特徴から、L II a～L II c に分けた。L II aは表土直下の黒色土層で、調査区全域で確認できる遺物包含層である。調査区北側の頂部平坦面付近はL II aの層厚が薄く、L II b層は遺存せず、L II a層の直下はL IV層となる。包含する遺物は、縄文時代前期前葉～中葉、中期初頭の遺物を主体とし、それらが混在している。L II bは頂部平坦面から下った斜面部に分布している。L II aと比べ遺物の包含量は極端に少ないが、遺物の所属時期などは、L II aと違いはない。L II cは調査区東側の谷部にのみ確認できた堆積層で、遺物は包含していない。

L III層は調査区東側、平坦地と丘陵斜面が接して谷地形となる場所で確認した。急斜面の崩落に起因する再堆積層である。L III a～L III cは、いずれも褐色を基調とするやや明るい土色で、風化した花崗岩粒を多量に含む特徴がある。またL III層には遺物は混入していない。

L IV層は、明黄褐色を基調とする堆積土で、遺跡の基盤層である。L IV層には一辺が数mに及ぶ巨大な花崗岩が含まれ、土砂崩落を起因とする再堆積層と考えられる。L IV層より下層は花崗岩巨石が多く、重機を用いても掘削が困難であり、調査区南側では、L IV層の厚さは3m以上に及ぶことを確認した。なお図6に示すA層は、竪穴住居跡の可能性がある。調査過程で完全に破壊し、遺構か否かを含めた検証作業ができないため、竪穴住居跡として扱わなかった。土層の断面観察では、A層下部とL II c層上面に弱い被熱範囲が確認できた。周辺の出土遺物は図30-4・14・15など縄文時代前期中葉頃の土器が比較的まとまって出土した。

第2節 壇穴住居跡

1次調査で確認した壇穴住居跡は11軒である。調査区北側の尾根頂部平坦面に集中して分布する傾向が認められる。所属時期は縄文時代前期前葉～中葉頃、縄文時代中期初頭頃、平安時代の3時期に大別できる。また、壇穴住居跡は花崗岩を避けるように占地しているため、3・6・9号壇穴住居跡、2・7・8・10号壇穴住居跡がそれぞれ重複している。

1号壇穴住居跡 S I 1

遺構（図7、写真7・8）

1号壇穴住居跡は調査区北側、B 2 - E 5 グリッドに位置する。尾根頂部から下がった南向き斜面の最上部にあたり、調査区の東側へ続く浅い谷に面した場所に立地する。標高は317.3～318.0mである。本遺構は5～7号土坑と重複し、6号土坑よりは新しく、5・7号土坑よりは古い。遺構はL II a層を掘り下げる過程で確認し、遺構の平面形をL II b層上面で検出した。

本遺構は谷底付近に位置し、降雨等による土砂流失のためか、斜面下位側の周壁や床面が遺存していない。遺存する部分から判断すると、その平面形は隅丸長方形と推定される。規模は、比較的良好に遺存する北壁で4.1mを測る。検出面から床面までの深さは30cmである。遺構内堆積土は3層に分けた。堆積状況から自然堆積と判断した。1・2層は床面を覆う黒褐色土で、白色粘土粒を含む。3層は西壁付近のみ見られた褐色土で、壁面崩落土に起因する堆積土であろう。周壁は急峻に立ち上がるが、斜面上位側は崩落によりやや緩い傾斜となる。床面はほぼ平坦であるが、周囲の地形に合わせて南に低く傾斜する。床面には花崗岩が露出するが、貼床等の痕跡は確認できない。

床面を掘り込む住居内施設として小穴を3基確認した。P 1・P 2は円筒形に掘り込まれた小穴で、その規模は直径が35～40cm、深さが30cmである。北壁と並行するように配されていることから、上屋を支える柱穴と推定している。P 1 - P 2間の距離は2.1mを測る。P 3は梢円形を呈する浅い窪みである。焼け面や焼土は見られることから炉跡の可能性は低く、その機能は不明である。

遺物（図8、写真27）

1号壇穴住居跡からは、縄文土器218点、石器7点が出土した。遺物の多くは堆積土の上層部の1層から出土した。住居跡の床面上で使用痕跡を残す出土状況は確認できなかった。これら遺物の内、形状や文様が特徴的なものを図8に示した。

1～14は縄文時代中期初頭の土器である。1は「く」の字に屈曲する頸部から口縁部が直線的に開く器形で、波状口縁となる深鉢形土器である。縦位の隆帯で区画された口縁部文様帶に「ハ」の字状の短沈線を充填している。頸部には横位の隆帯がめぐり、隆帯上面には棒状施文具によるキザミが施される。2・3は無文地の深鉢形土器である。3・4は口縁部内側が肥大した複合口縁となる。4は口唇部にキザミが施される。5は丸みを帯びて立ち上がる体部で、「く」の字に屈曲した頸部

から口縁部が内湾気味に聞く器形である。口縁部と頸部の内面が肥大し、受け口状のかえりが付く。口縁部文様帶は棒状施文具を用いた彫りの浅いキザミによって構成され、沈線により描かれた渦巻き文の間に充填される。渦巻き文の隙間に三角形をなす刺突文が配される。体部の文様は、沈線とキザミ、三角形状刺突文で構成される。瘤状に粘土粒が貼り付けられる。8~11は無文地の体部に縱位の結節回転文が施される。

15~20は縄文時代前期前葉頃の土器である。15は口縁部直下にキザミを施した隆帯がめぐる。口縁部には半截竹管状の二本同時施文具を用いて斜位の短沈線が描かれる。16~20は体部破片で、ややはつれたS字状より糸文が施される。21・22は底部破片である。胎土の観察から縄文時代前期の所産と判断した。

23はやや丸みを帯びた三角形をなす石鏃で、基部のえぐりは認められない。24は二次加工のある剥片石器である。側辺に細かい剥離調整をまばらに施している。25は球形をなす磨石である。表面には敲打による小さな窪みが見られるが、全体的に摩滅して滑らかになる。P1とした柱穴から出土したもので、本来の使用目的を終えて、柱材を支える根石として再利用されたものと考えられる。

まとめ

1号壁穴住居跡は遺存状態が悪く、平面形や規模などの詳細な特徴は不明である。平面形が長方形を基調とすること、床面中央部に明確な軌跡を伴わないなど4号壁穴住居跡と共通する特徴も散見できる。年代については、堆積土中から複数時期の出土遺物があり、本住居跡に伴うような出土状況でもない。出土遺物の中で最も新しい時期で、比較的まとまった出土量を持つことから、縄文時代中期初頭頃に属すると考えている。

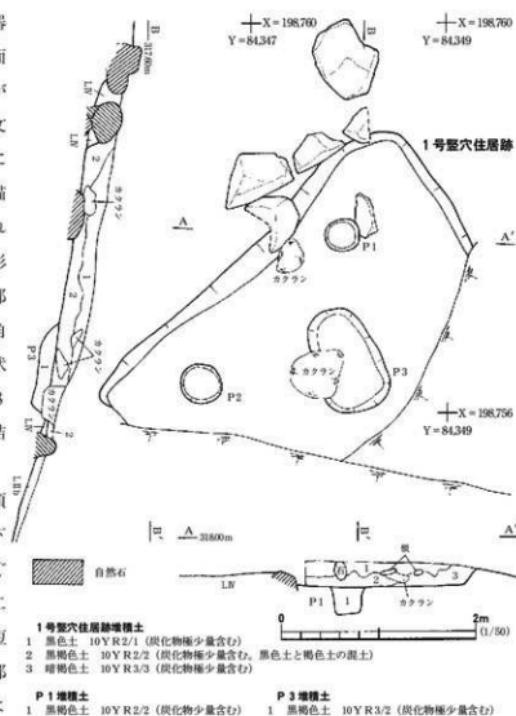


図7 1号壁穴住居跡

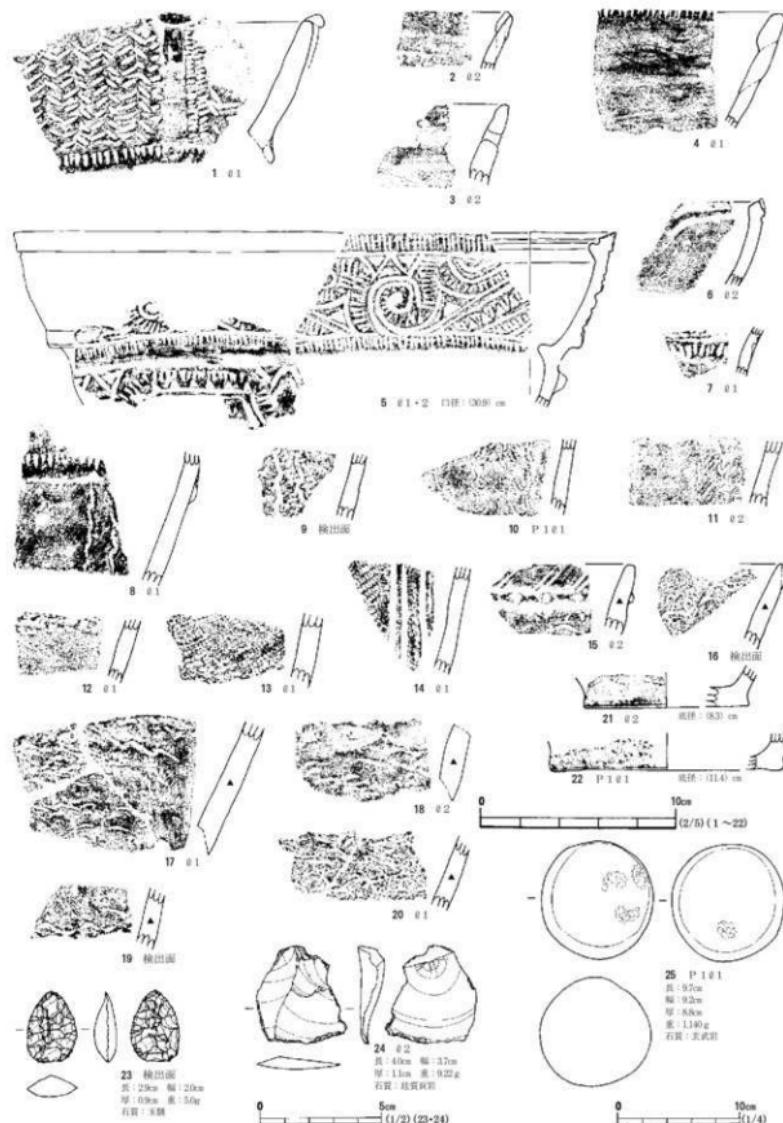


図8 1号竖穴住居跡出土遺物

2号壁穴住居跡 S I 2

遺構 (図9・10、写真9・10)

本遺構は、石造りのカマドを伴う平安時代の壁穴住居跡である。調査区北端のB2-C3・D3グリッドに位置し、調査区北側を開析する沢に面した北向き斜面に立地する。7・8・10号壁穴住居跡、4・10・11号土坑と重複し、そのいずれよりも新しい。2号壁穴住居跡の周囲からは、該期の遺物は少量出土しているが、本遺構と同時に存在する平安時代の遺構は確認していない。標高は

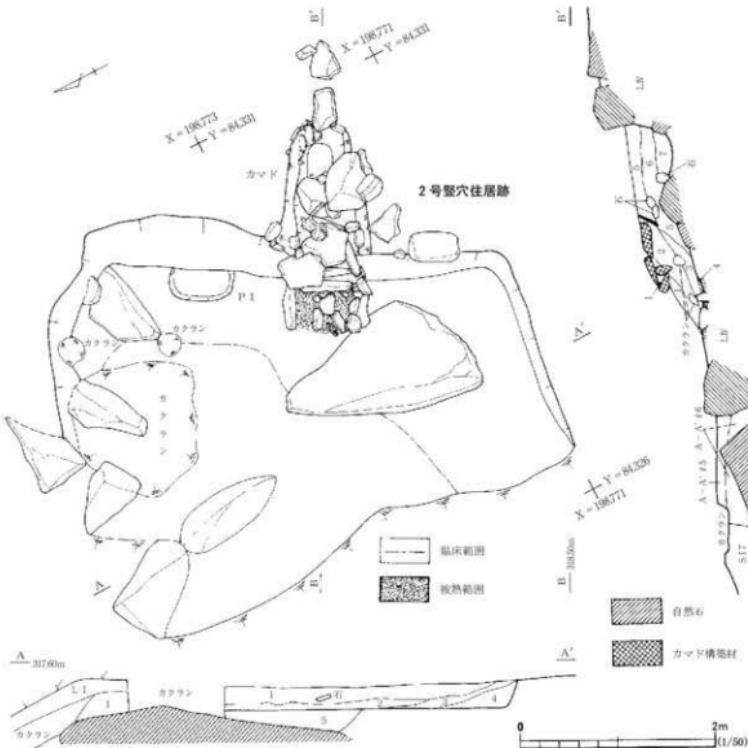


図9 2号壁穴住居跡

- 2号壁穴住居跡堆積土 (A-A')**
- 1 黒色土 10Y R2/1 (炭化物・後土粒含む)
 - 2 黑褐色土 10Y R3/2 (炭化物・後土粒。L.IV種少量含む)
 - 3 褐色土 10Y R4/4 (後土塊・炭化物極多量含む)
 - 4 にぶい黄褐色土 10Y R4/3 (炭化物少含む)
 - 5 黑褐色土 10Y R2/2 (炭化物少量、L.IV現含む)
 - 6 黑褐色土 10Y R2/2 (炭化物少含。L.IV現含む)
- カマド堆積土 (B-B')**
- 1 赤褐色土 7.5Y R4/4 (後土多量、炭化物含む)
 - 2 緑褐色土 10Y R3/3 (後土・炭化物含む)
 - 3 赤褐色土 7.5Y R4/4 (後土・炭化物多量含む)
 - 4 緑褐色土 10Y R3/3 (後土・炭化物含む)
 - 5 黑褐色土 10Y R2/2 (褐色土塊、炭化物極少量含む)
 - 6 黑色土 10Y R2/1 (炭化物極少含む)
 - 7 黑褐色土 10Y R2/2 (褐色土塊、炭化物極少量含む)

317.0m～318.0mである。遺構検出面はLⅣ層の上面であるが、LⅣ層を覆うLⅡaに含まれる遺物の年代観からすれば、本来はLⅡa層を掘り込んで構築されたと推察している。

平面形は斜面下位側が遺存していないが、概ね長方形をなす。規模は比較的良好に遺存する東壁で計測すると、長さは4.5m、高さが0.85mである。遺構内堆積土は6層に分けた。1～4層は床面を覆う堆積土で、自然流入土と判断した。5・6層は貼床土で、5層上面が床面となる。東壁以外の周壁は遺存状態が悪いが、床面から急峻な立ち上がりとなる。東壁では検出面と接する上端部が崩落して緩い傾斜となる。床面はLⅣ層を掘り込んでそのまま床面とする部分と貼床を施す部分が確認できた。貼床はカマド前面に露出する石から住居の北西隅に向かう部分に施され、平坦な床面を造る。住居跡の掘形と貼床の土層観察から、住居構築時に花崗岩を撤去した部分を埋めて床面としたのであろう。

カマドは斜面上位側、東壁の中央部に造られる。カマドの構造は、その構築材として板石を多用

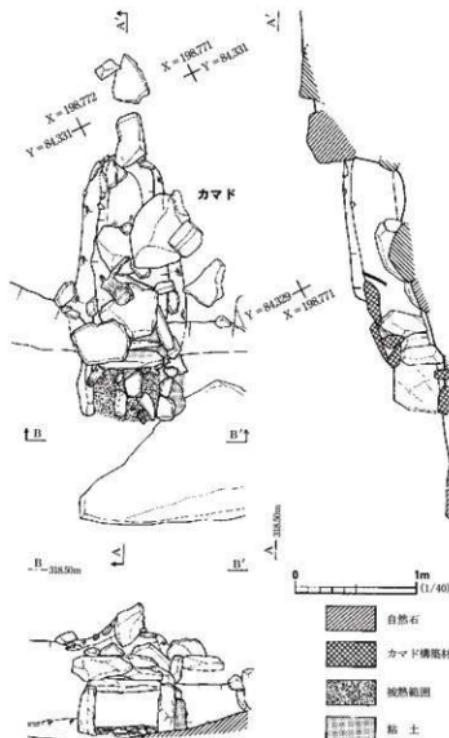


図10 2号竪穴住居跡カマド

する特徴があり、燃焼部では袖部や天井を板石で組み上げ、カマド外面を粘土で被覆している。煙道部の石組みは、カマドを覆っていた木根を除去する際に誤って石を撤去してしまったが、煙道部を開放した状態で掘り込み、板石を並べて蓋としていた可能性が高い。

住居内の施設としてP1を確認した。P1はカマドの北隣に位置し、楕円形を呈する浅い窪みである。規模は長径65cm、短径34cm、床面からの深さは3cmを測る。P1は極めて浅い窪みであるため、意図的に掘り込んだ施設とは考えにくく、住居の機能當時、何らかの器物を當時据え置いていた痕跡であろうか。なお柱穴は確認していないため、その上屋構造を復元できない。

遺 物 (図11、写真28)

2号竪穴住居跡の出土遺物は、縄文土器134点、石器7点、土師器179点、須恵器4点である。遺物の出土状況は、床面を覆う1・2層から出土したものが多い。またカマドの内部や前面から

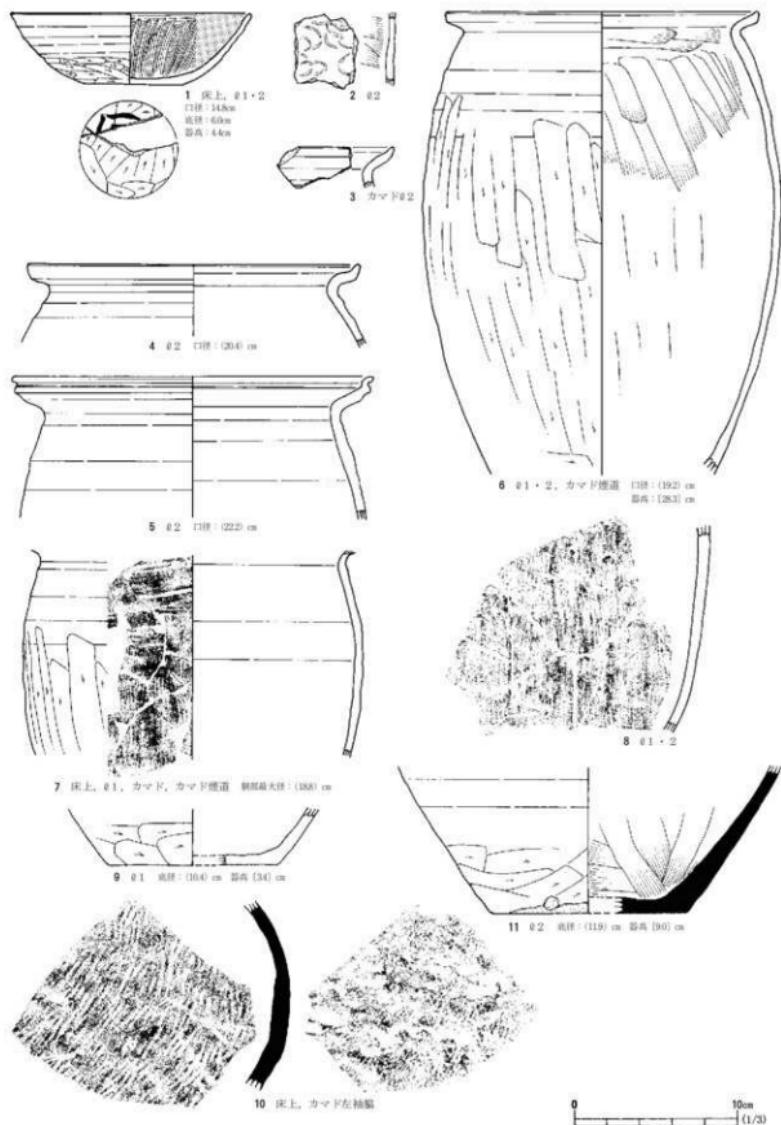


図11 2号壁穴住居跡出土遺物

土師器甕の破片がまとまって出土しているが、それらの使用状態を保った出土状況は確認できない。これら出土遺物の内、形状が把握できたものを図11に示した。

1はロクロ整形の土師器杯で、約半分が遺存していた。接合した破片の中に、二次的な被熱により内面の黒色処理が消えているものがある。器形は体部下半が丸みをおびて直線的に口縁部へ立ち上がる。体部下半から底面にかけては、ケズリ調整が施される。内面は横位のミガキを施した後に、放射状にミガキを加えている。底面には墨書きが観察できるが判読できない。2は筒型土器の破片である。器面は粗く摩滅するが、外面に指頭圧痕、内面には指ナデが観察できる。3～9はロクロ整形の土師器甕である。口縁部の形状から4・5個体分の存在が伺える。「く」の字に屈曲する頸部から大きく外反して開く口縁部となる。体部はやや丸みを帯びた器形で、体部上半に最大径を持つ。外面の整形痕は、体部上半はロクロ整形痕を残し、下半は縱位にケズリを加えている。内面はロクロを利用した整形痕を残すものと、指ナデの痕跡を残すものがある。10・11は須恵器甕の破片で、同一個体である。11は底部破片である。底部側縁に人为的に打ち欠いた痕跡が観察できる。底部に貼り付いた焼台を除去した時の痕跡であろうか。10は体部上半部の破片で、外面には平行タタキメ、内面にはアテ具痕が観察される。

ま と め

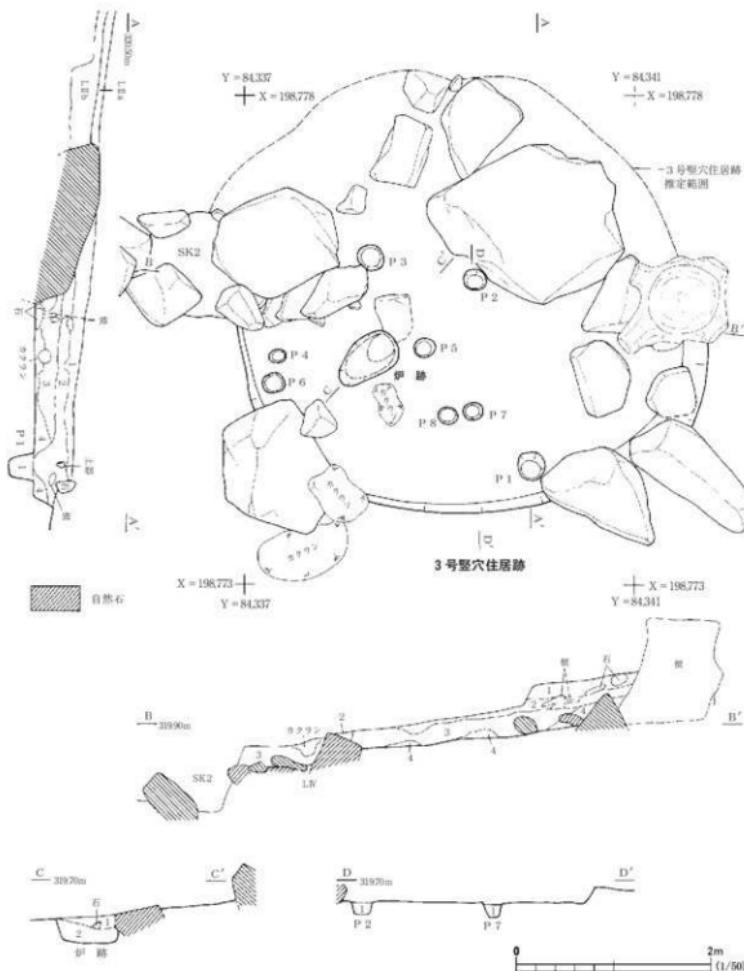
本遺構は、沢に面する北向き斜面に造られた堅穴住居跡で、石造りのカマドを作り、住居の構造は、斜面上位側を掘り込み、その残土を斜面下位側に出して床面の広さを確保している。床面上に柱穴を確認できないことから、上屋構造については検討課題を残す。年代は出土した遺物の特徴から、9世紀中葉頃と考えている。

3号堅穴住居跡 S I 3

遺 構 (図12、写真11・12)

3号堅穴住居跡は調査区の北側、B 2-D 3-E 3グリッドに位置する。尾根頂部の比較的平坦地に立地する。標高は319.6m～320.0mである。本遺構は5・6・9号堅穴住居跡と重複し、そのいずれよりも新しい。周囲には4号堅穴住居跡、1・2・8号土坑が接続する。遺構はL II a層の掘り下げ時に確認し、L IV層上面でその平面形を検出した。

本遺構は周辺に露出する花崗岩巨石を避けるように構築されているため、その平面形は不整な梢円形を呈する。また本住居跡はL IV層を掘り込んだ周壁が遺存しない部分があり、露出した花崗岩を壁面として利用し、床面で確認したP 3付近が住居跡の北端となるのである。規模は東西の長さが4.8m、南北の長さが3.1mと推定される。検出面からの深さは、東側で50cm、南側で20cmである。遺構内堆積土は4層に分けた。1・2層は黒褐色を基調とする覆土の上層を占める堆積土で、堆積状況や含有物の状態から自然流入土と判断した。3・4層は褐色を基調とするやや明るい色調の堆積土である。黒色土がブロック状に混入することから、人为的に埋め戻されたものと判断している。床面は部分的に花崗岩が露出するが、平坦で西側に向かって低くなる。貼床や踏み締まりなどの痕

**3号竖穴住居跡堆土**

- 1 黑褐色土 10YR2/2 (炭化物極少量。土器多量含む)
- 2 暗褐色土 10YR3/3 (炭化物極少量。LIV混乱土)
- 3 褐色土 10YR4/4 (炭化物極少量。黑色土塊少量含む)
- 4 黄褐色土 10YR6/6 (炭化物極少量含む)

伊勢堆積土

- 1 黑褐色土 10YR2/2 (鐵土・炭化物、LIV混少量含む)
- 2 黑褐色土 10YR2/2 (鐵土・炭化物極少量含む。黑色土と暗褐色土の混土)

P1堆積土

- 1 黑褐色土 10YR2/1 (炭化物極少量含む)

P2堆積土

- 1 暗褐色土 10YR3/3 (炭化物極少量含む)

P7堆積土

- 1 黑褐色土 10YR2/1 (炭化物極少量含む)

図12 3号竖穴住居跡

跡は確認していない。

住居内の施設として、炉跡を1基、柱穴と推定されるP1～P8を確認した。炉跡は床面の中央からやや西寄りの位置で確認した。炉跡の構造は土坑状の掘形を埋めて、浅い窪みとなる炉の燃焼面を造っている。炉跡掘形の平面形は梢円形を呈する。規模は長径が70cm、短径40cmを測る。床面から掘形底面までの深さは30cmを測る。掘形は垂直気味に掘り込まれる。底面は平坦で、ほぼ水平になる。燃焼面は弱い酸化面として確認できた。炉跡の長軸方向に沿って西端部から東に向かって徐々に深くなるように傾斜し、底面は東端部の石に接するように小さな平坦面を造っている。床面から燃焼面までの深さは最大で12cmである。炉跡掘形内堆積土の1層は焼土・炭化物を含む黒褐色土である。2層は黒色土と暗褐色土の混土で、掘形の埋土である。1層下端と2層上面で弱い酸化面が観察できた。

P1～P8は上屋を支える柱穴である。いずれも円筒形に掘り込まれた小穴で、直径が16～30cm、床面からの深さが12～20cmを測る。P5・P7・P8が床面の中央付近、周壁に沿ってP1～P4・P6が配される。平面形が不整形であるため、柱穴の配置は不規則である。上屋構造として、P5やP7を支柱とした円錐形の上屋が復元できる。

遺 物 (図13, 写真29)

3号堅穴住居跡からは縄文土器85点、石器2点が出土した。そのうち形状が把握できたものを図13に示した。遺物の出土状況は、堆積土中から出土した小片がほとんどで、直接的に住居跡に伴

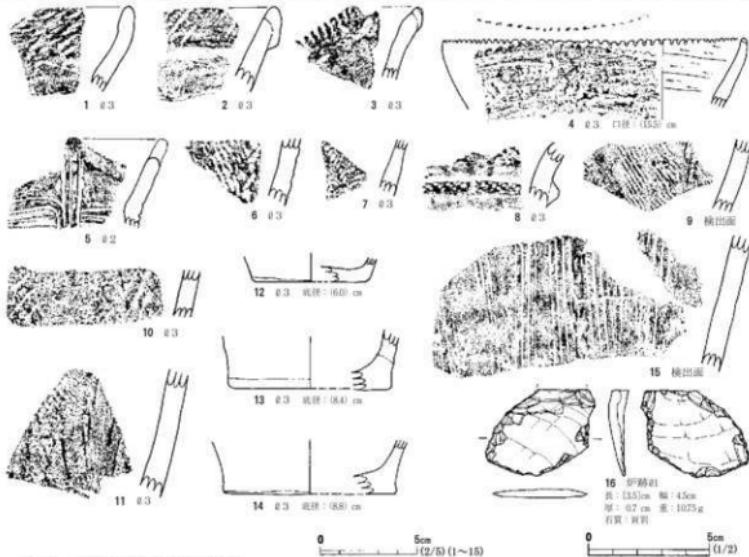


図13 3号堅穴住居跡出土遺物

う遺物は少ない。図示した遺物の他に、縄文時代前期前葉～中葉頃の土器も混在している。

1は内湾気味に開く口縁部破片で、器面は摩滅が著しい。2は外面が肥大する複合口縁となる深鉢形土器である。3は波状口縁となる破片である。口唇部にキザミが施される。4は口縁部が外傾して開く器形である。口縁部は無文で、口唇部にキザミが施される。5は波状口縁の頂部破片である。外面には、断面がV字状をなす施文具を用いて沈線文が描かれる。6～11は深鉢形土器の体部破片である。8は横位隆帯の上端部に縄文が施される。9は無文地の体部に縦位の回転結節文が施される。12～14は底部破片で、12は小型の深鉢形土器である。15は体部下半の破片で、四本一組の櫛齒状施文具を用いて縦位に施文される。16は炉跡の1層から出土した剥片石器である。側縁に細かい剥離調整を施している。

ま と め

本遺構は不整な楕円形を呈する壺穴住居跡である。床面中央に掘形を伴う炉跡が確認できた。年代については、重複関係や出土遺物から検討して、縄文時代中期初頭頃に属すると考えている。

4号壺穴住居跡 S I 4

遺 構 (図14、写真13・14)

本遺構は調査区の北側、B 2-D 3グリッドに位置する。尾根頂部の平坦地に立地する。標高は318.8m～319.3mである。2号土坑と重複し、本遺構のほうが古い。周囲は調査区内で最も遺構や遺物が密集して分布する範囲で、東側には3・5・6・9号壺穴住居跡が近接している。遺構はL II a層の掘り下げ過程で確認し、L IV上面でその平面形を検出した。

本遺構の平面形は、北壁と西壁の一部が遺存していないが、全体的には整った長方形を呈する。本住居跡の長軸方向は、周囲の等高線と平行して、ほぼ真北を指す。規模は長軸が4.80m、短軸が3.30mを測る。検出面から床面までの深さが、最も良好に遺存する東壁が30cm、南壁が10cmである。西壁の高さはわずかで、北半部では明瞭な壁の立ち上がりは確認できない。

遺構内堆積土は3層に分けた。1層は堆積土の上層部分を覆う黒褐色土である。2層は黒色土塊を含むにぶい黄褐色土で、床面全体を広く覆っている。3層は床面の東半部から東壁際にかけての範囲で確認した。L IV層を起源とする壁面崩落土であろう。堆積状況から、3層は本遺構の廃絶直後の壁面崩落土で、その後ほとんど時間差なく2層で埋め戻された可能性が高い。3層は埋め戻されて窪みとなった部分に、風雨など自然的な要因で流入した土と考えている。

遺存する周壁は垂直気味に立ち上がる。また北壁や東壁では花崗岩が露出している。これら花崗岩はL IV層に含まれるもので、崩落等で動いた痕跡や花崗岩を破碎して除去したような痕跡がないことから、花崗岩を掘り残して、そのまま壁の一部として利用していたのであろう。床面は平坦に整えられ、西側に向かってわずかに低く傾斜している。床面に花崗岩が露出しているが、周壁と同様に二次的に動いた痕跡がないことから、花崗岩が露出した状態で床面としていたと推察している。貼床等の痕跡はない。

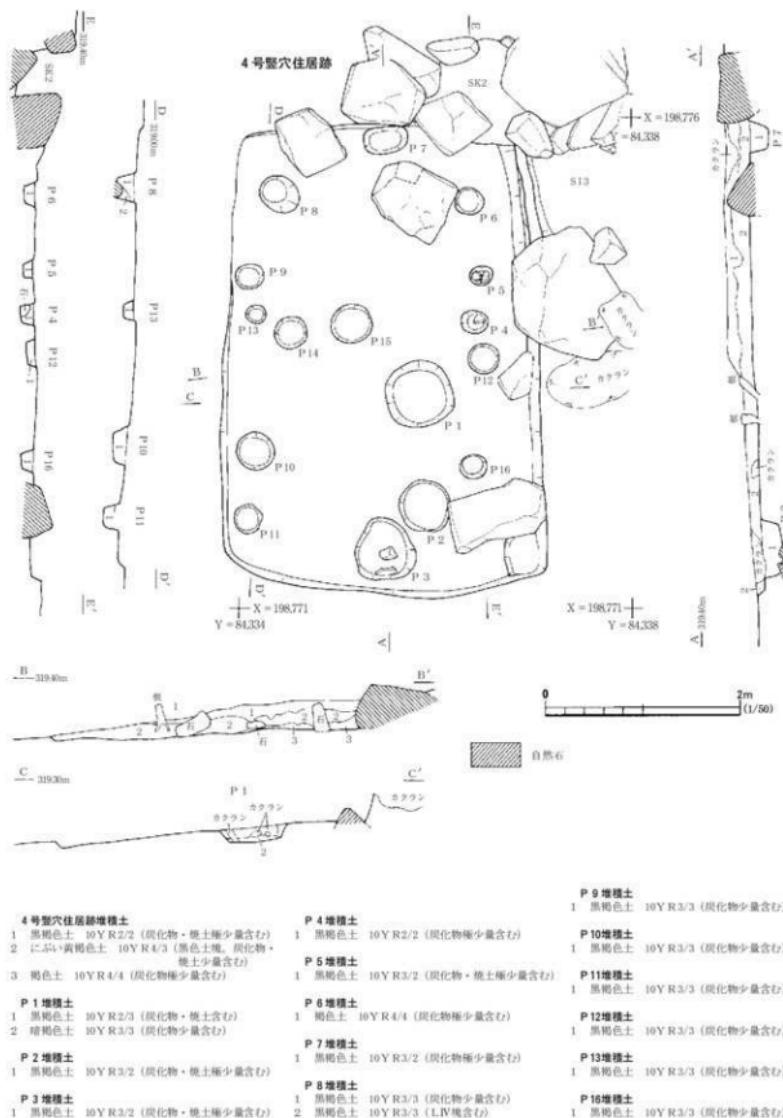


図14 4号竪穴住居跡

住居内の施設としてP 1～P 16を確認した。P 4～P 16は周壁に沿って配された小穴である。平面形は円形を基調とする。規模は直径が20～40cm、深さが12～28cmを測る。その形状から上屋を支える柱穴と判断した。P 1～P 3は直径の規模が大きく、床面からの深さが浅い特徴がある。平面形は円形を基調とし、直径が50～70cm、深さが20～25cmである。堆積土の観察から、住居が機能していた時期には開口していたことが分かるが、明確な性格は不明である。P 3は壌際に位置することから、出入口に関連する施設の可能性がある。

遺物 (図15、写真30)

4号壌穴住居跡からは、縄文土器128点、石器10点が出土した。そのうち形状が把握できたものを図15に示した。遺物の出土状況は、1層から出土したものがほとんどで、床面の上や住居内施設から出土したものは極めて少ない。さらに縄文時代前期前葉頃から中期初頭頃の土器が混在して出土し、遺物の使用状態を残すような本遺構に直接伴う遺物は少ない。

図15-1～10は縄文時代中期初頭頃の土器である。1は直線的に立ち上がる口縁部である。口縁部直下に縱位の短沈線を充填させる。下部の文様は、横位に巡る平行沈線や波状沈線に沿って細かい刺突が施される。2～4は外面が肥大する複合口縁の深鉢形土器である。外面の文様は、口縁部にキザミ、縄文が施される。6は無文地の口縁部破片で、内面が肥大する。7は内面が肥大する口縁部破片である。外面には粘土紐を貼り付けた立体的な加飾が施される。8は口縁部直下に半裁竹

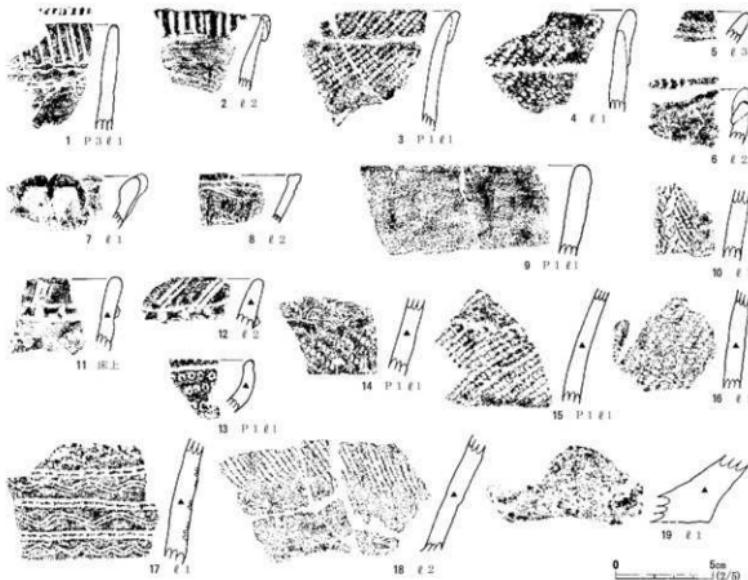


図15 4号壌穴住居跡出土遺物

管状施工具を用いた平行沈線が巡る。

11~19は縄文時代前期前葉～中葉頃の遺物である。胎土中に纖維混和痕が観察できる。11・12は口縁部直下に指頭によるキザミが施された横位隆帯が巡る。隆帯上部は半裁竹管状施工具により斜位の短沈線が描かれる。13は内湾する口縁部で、口唇部にキザミ、外面に円形竹管による刺突が施される。17は半裁竹管状の二本同時施工具を用いて文様が描かれる。横位の押し引き文状の連続刺突文を数条巡らし、その間に同一施工具により波状の連続刺突文を描いている。

ま と め

4号堅穴住居跡は長方形を基調とする平面形で、柱穴が周壁に沿って配される特徴を持つ。柱穴の位置と間隔は不規則で、住居の上屋構造について不明瞭であるが、南壁中央に出入口を持つと推察される。また住居内に焼跡は確認できない。年代については、出土遺物の内、最も新しい時期で、比較的まとまった出土量を持つことから、縄文時代中期初頭頃に属すると考えている。

5号堅穴住居跡 S I 5

遺 構 (図16、写真15)

本遺構は調査区北部、B 2 - E 3 グリッドに位置する。尾根頂部の平坦面に立地する。標高は319.5m付近である。本遺構は調査区内で堅穴住居跡が最も密集する範囲に位置し、3号堅穴住居跡と重複し、本遺構の方が古いと判断した。また西側には4・6・9号堅穴住居跡などが分布している。遺構検出面はL IV上面であるが、土層断面の観察からは、L II a層を掘り込んで構築されていることが確認できた。

本遺構は西半部が3号堅穴住居跡に壊されており、東半部は調査区外へ続くため、その全容を確認できなかった。遺存する部分から判断すると、その平面形は楕円形または長方形をなすものと推察している。遺存する規模は、東西方向で2.85m、南北方向で2.2mを測る。床面までの深さは、L II a層上面からは40cmである。

遺構内堆積土は2層に分けた。1層は黒色土塊を含む暗褐色土で、2層はやや赤みがかった褐色土である。堆積状況や含有物などの特徴から、自然堆積と判断した。周壁の上端部は、表土化して不鮮明であるが、その立ち上がりは垂直気味になる。床面は部分的に花崗岩が露出しているが、ほぼ平坦となる。

床面の施設としてP 1～P 4を検出した。床面中央付近にP 1～P 3、南側の壁際にP 4が位置する。P 1・2・4は円筒形に掘り込まれた小穴で、上屋を支える柱穴と考えている。規模は、直径20~30cm、床面からの深さは7~10cmと極めて浅い。P 3は円形を基調とする深い窪みである。直径が40cm、深さは7cmである。底面や周壁などに焼けた痕跡などはないため、その性格は不明である。その他に焼跡などは確認できなかった。

遺 物 (図16、写真29)

5号堅穴住居跡からは、縄文土器43点、石器1点、土師器片2点出土している。そのうち形状が

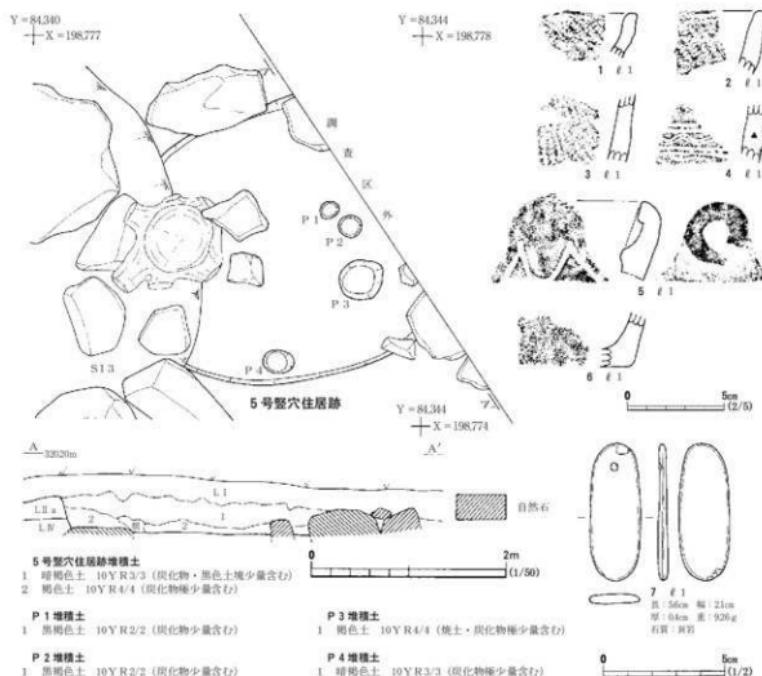


図16 5号壁穴住居跡・出土遺物

把握できるものを図16に示した。遺物の出土状況は、堆積土の上層部分となる1層から出土したものがほとんどで、縄文前期前葉～中葉と中期初頭頃の土器が混在した状態で出土することから、遺構外からの流れ込んだ遺物が多く、その中でも縄文時代中期初頭頃と考えられる縄文土器が大半を占める。

図16-1・2は口縁部文様帯に縄压痕文と斜行する縄文を施す。4は半裁竹管状の二本同時施工用いて文様が施される。平行する連続刺突を数条めぐらし、その間に波状沈線を描いている。5は深鉢形土器の口縁部突起部の破片である。外面は鋸歯状の沈線文が施される。内面は粘土紐を貼り付けて、立体的な渦巻きを表現している。7は装飾品の未完成であろうか、上端部に盲孔が認められる。

まとめ

本遺構は調査区際に位置するため、その全容を把握することができず、住居の詳細な特徴について不明である。重複関係や出土遺物の特徴から、3号壁穴住居跡よりは古く、縄文時代中期初頭頃を中心とする時期と考えている。

6号竪穴住居跡 S I 6

遺構 (図17、写真16)

本遺構は調査区の北側、B 2 - D 3 グリッドに位置する。尾根頂部の比較的平坦地に立地する。標高は319.6m付近である。調査区内で最も遺構が密集する範囲に位置する。本遺構との重複関係を整理すると、9号竪穴住居跡より新しく、3号竪穴住居跡、1・8号土坑より古い。また西側には4号竪穴住居跡が接している。遺構はL II a層を掘り下げる過程で確認し、明確な平面形はL IV 層の上面で検出した。

本遺構の北側は、重複する3号竪穴住居跡に壊されている。西側では明瞭な壁面の立ち上がりは確認できない。平面形は長方形または楕円形をなすと推定できる。遺存する部分の規模は、長径が3.50m、短径が2.80mと推定される。検出面から床面までの深さは、最大で18cmを測る。遺構内堆積土は1層で、炭化物や焼土を極少量含む黒色土と褐色土の混土である。堆積土中の含有物の状態から、人為的に埋め戻されたと判断している。周壁は南側でわずかに遺存していた。遺構自体が浅く詳細な特徴は不明であるが、他の住居跡と同様に、本来的には垂直気味に掘り込まれていたものと推察している。床面は平坦になるが、西側に向かってわずかに低く傾斜している。また部分的に花崗岩が露出しているが、貼床などの痕跡は確認できない。

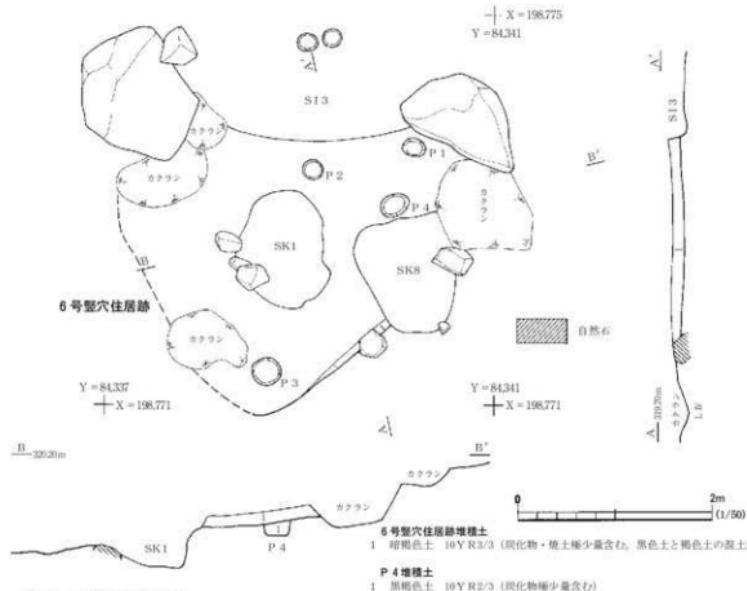


図17 6号竪穴住居跡

住居内施設として、P 1～P 4を確認した。P 2は床面のほぼ中央に位置し、P 1・3・4は周壁に沿って配されていることから、上屋を支える柱穴と考えている。柱穴の平面形は、円形を基調とした小穴で、P 4がやや楕円形となる。規模は、いずれも直径が20～32cmである。深さは15～30cmで、P 2が最も深い。また炕跡などの施設は確認していない。

遺 物

6号壇穴住居跡からは、縄文土器が14点出土している。いずれも摩滅した小破片のため図示していないが、縄文時代前期前葉～中葉頃の土器が多い。遺物の出土状況は、1層中とした自然流入土中に小破片となって混入するもので、本住居跡に直接伴う状態で出土したものはない。

ま と め

6号壇穴住居跡は1次調査で最も遺構が密集する場所に位置し、重複関係から9号壇穴住居跡と3号壇穴住居跡の間の時期に營まれたと判断している。遺存状態が極めて悪く、住居内において炕跡は確認していないが、上屋構造を支える柱穴を数基検出した。柱穴は住居跡の平面形に沿って配されるものと推定できるが、その柱穴の位置や間隔などに明確な規格性は見出すことができない。本遺構の年代は、出土遺物や重複する遺構との関連で、縄文時代前期前葉から中期初頭にかけての時期と考えている。

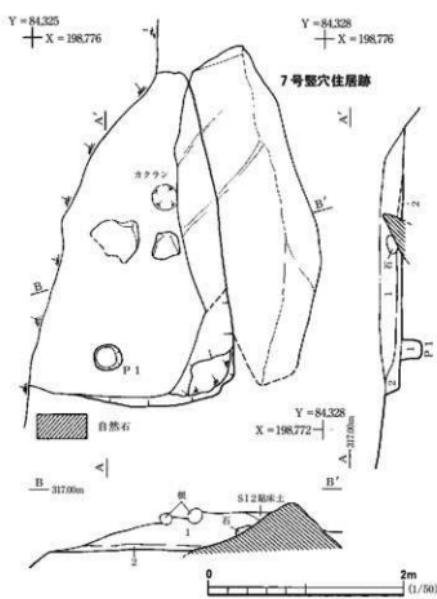
7号壇穴住居跡 S I 7

遺 構 (図18、写真17)

本遺構は調査区北端、B 2-C 3グリッドに位置する。調査区の北側を流れる沢に面した北向き斜面に立地する。本遺構は、2号壇穴住居跡の貼床土を除去した後で、その平面形を検出した。標高は317.0m付近である。

本遺構は、近年の伐採用道路などにより削平され、斜面下位側の壁面や床面は遺存していない。詳細な特徴は不明であるが、平面形は長方形と推察される。遺存する東壁の長さは3.4m、床面までの深さは0.4mを測る。遺構内堆積土は2層に分けた。1層は黄褐色土と黒色土の混土で、炭化物と焼土を多量に含んでいる。堆積状況と含有物から人為的に埋め戻された堆積土と判断した。重複する2号壇穴住居跡の構築残土と推定している。2層は床面上を薄く覆う黒色土で、本遺構の廃絶直後に堆積したものであろう。堆積土の観察から、本住居跡の廃絶時期と2号壇穴住居跡の構築時期との間にそれほど時間差は認めらない。周壁は東壁と南壁の一部が遺存している。南壁は垂直に立ち上がるが、東壁は露出した花崗岩の巨石をそのまま壁としている。床面は部分的に花崗岩が露出するが、ほぼ水平である。貼床は確認できない。

住居内の施設としてP 1を確認した。P 1は遺存する南壁の中央部に位置し、壁際から約20cm離れた場所に配される。直径30cmほどの円筒形に掘り込まれた小穴で、床面からの深さは23cmを測る。P 1の形状から、上屋を支える柱穴と考えているが、土層観察からは柱材などの痕跡は確認できない。



- 7号堅穴住居跡堆積土**
- 黒褐色土 10YR3/2 (炭化物多量、焼土少量含む。LIV塊と黒色土の混入)
 - 黒色土 10YR2/1 (焼土・炭化物極少含む)

- P1堆積土**
- 黒褐色土 10YR2/2 (炭化物・LIV含む)

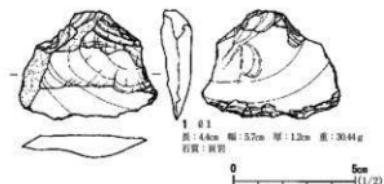


図18 7号堅穴住居跡・出土遺物

8号堅穴住居跡 S I 8

遺構 (図19、写真18)

8号堅穴住居跡は調査区北端、B 2 - C 3 グリッドに位置する。2・7・10号堅穴住居跡、4号土坑と重複し、10号堅穴住居跡と4号土坑よりは新しい。本遺構は7号堅穴住居跡の完掘後に検出された住居跡で、斜面上位側に残る東壁を確認した程度である。遺存する東壁の状態から、平面形は方形となる可能性が高い。東壁の長さは4.25m、床面までの深さは0.38mを測る。東壁は急傾斜で

遺物 (図18)

7号堅穴住居跡の出土遺物は、縄文土器30点、土師器1点、石器1点ある。土器類は摩滅した小破片のため図示していないが、縄文土器は縄文前期前葉～中葉、縄文中期初頭頃の土器である。また土師器は杯の小破片で、内面は黒色処理が施されている。遺物はいずれも1層とした2号堅穴住居跡の構築残土に混入したもので、本住居跡に直接的に伴わない。図18-1は二次加工のある片である。搔器として用いたのであろうか、側縁に細かい剥離調整を施される。

まとめ

本堅穴住居跡は大部分が削平されて遺存状態がきわめて悪い。住居内の施設として、柱穴を1基確認しただけで、カマドなどの痕跡は確認していない。また堆積土の観察から、2号堅穴住居跡の構築残土によって埋められていることから、2号堅穴住居跡とそれほど時間差はないと考えている。出土遺物が少なく、詳細な年代を把握することが困難であるが、2号堅穴住居跡に先行する住居跡で、9世紀前半に属する可能性が高い。

立ち上がる。底面は平坦で、わずかに北側に向かって低く傾斜している。床面の南東隅でP1を確認した。円筒形に掘り込まれた形状から、柱穴と考えている。遺構内堆積土は3層に分けた。いずれも自然流入土と判断した。また7号壁穴住居跡の1層で見られる人が堆積土の特徴もなく、本遺構と7号壁穴住居跡との連続性を伺うことができない。

遺物

8号壁穴住居跡からは縄文土器18点、石器1点が出土したが、摩滅した小片のため図示していない。出土遺物はいずれも1層から出土したもので、縄文時代前期前葉頃から中期初頭頃の土器が混在している。

まとめ

本遺構は削平により大部分が遺存していないため、住居跡の詳細な特徴は不明である。年代は出土した縄文土器の特徴から、縄文時代前期前葉から中期初頭頃と考えている。

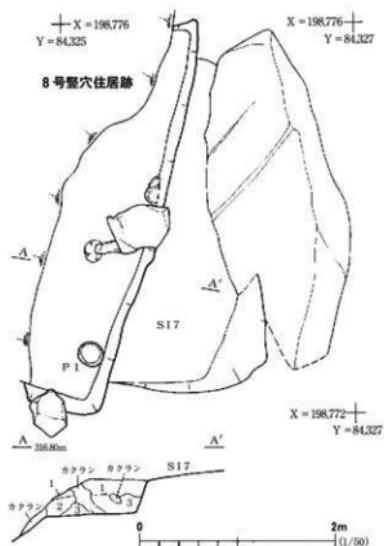


図19 8号壁穴住居跡

9号壁穴住居跡 S I 9

遺構 (図20、写真19)

本遺構は調査区北側、B2-D3グリッドに位置する。尾根頂部の比較的平坦地に立地している。標高は319.1m～319.5mである。3・6号壁穴住居跡、1・8号土坑と重複し、そのいずれよりも古い。6号壁穴住居跡の完掘後に、楕円形を呈する遺構の平面形を確認した。

本遺構の平面形は楕円形を呈する。規模は、長径が3.3m、短径が2.8mを測る。深さは0.16mと極めて浅い。遺構内堆積土は炭化物と黒色土塊を多く少量含み、やや赤みがかった暗褐色土である。堆積状況と含有物などの特徴が3号壁穴住居跡の3層に類似していることから、人為的に埋め戻された可能性がある。周壁は東側がかろうじて遺存していたが、遺構自体が浅く、周壁の立ち上がりはわずかである。壁面と床面の明瞭な境がなく、やや丸みを帯びて接する。床面はLIVを掘り込んでいたため、花崗岩が多数露出している。床面は西側に向かって低く傾斜し、北西隅が深い窪みとなる。

床面上でP1～P5とした小穴を確認した。P1は床面の北東隅に位置する。平面形は不整な円形で、直径60cm、深さが20cmを測る。堆積土の観察から、本住居が機能時には開口していたこと

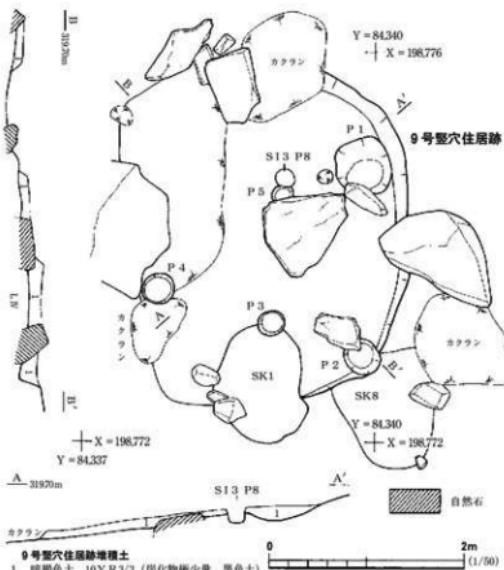


図20 9号竖穴住居跡

10号竖穴住居跡 S I 10

遺構 (図21、写真20)

本遺構は調査区の北端部、B 2 - C 3 グリッドに位置する。調査区の北側を流れる沢に面した北向き斜面に立地している。本遺構との重複関係を整理すると、2・7・8号竖穴住居跡より古く、4号土坑より新しい。標高は316.2m付近である。遺構検出面はL IV上面であるが、8号竖穴住居跡の完掘後に、本遺構の平面形を検出した。

本遺構は斜面下位側を削平により失い、わずかに東壁と床面の一部を確認したに止まる。遺存する部分から判断すれば、その平面形は方形を基調とする可能性が高い。東壁の長さは2.2m、床面までの高さは0.15mを測る。東壁は垂直気味に立ち上がり、底面は平坦で、わずかに北側に向かって低く傾斜する。また床面の南東隅でP 1を確認した。円筒形に掘り込まれた小穴で、その規模は直径が22cmで、床面からの深さは15cmを測る。土層観察では明瞭な柱材の痕跡は認められないが、上屋を支える柱穴と考えている。

遺構内堆積土は単層で、L IV塊を含む黒褐色土である。遺構自体が浅いこともあり、堆積状況は不明であるが、土質や含有物が均質になることから、自然堆積と推察している。また重複する竖穴住居跡の堆積土との比較からは、7号竖穴住居跡1層にみられる人為に埋め戻された堆積土とは明

が分かる。住居内の貯蔵施設であろうか。P 2 ~ P 5は円筒形に掘り込まれた小穴で、その直径は25~35cm、深さは12~20cmを測る。P 2 ~ P 5はやや不均等な配置であるが、周壁際に配される特徴から上屋を支える柱穴と判断した。また柱穴内の土層観察では、柱材などの痕跡は認められない。

本遺構の出土遺物はない。

まとめ

本遺構は、重複関係から最も古い時期の竖穴住居跡である。出土遺物がないため詳細な年代は不明であるが、周辺から出土する遺物の特徴から、縄文時代前期前葉頃と考えている。

らかに異なる。堆積土の含有物などの特徴は、8号壁穴住居跡の3層に近似している。

遺物

10号壁穴住居跡からは、縄文土器が4点出土したが、いずれも摩滅した小破片のため図示していない。遺物は堆積土中に浮いた状態で出土したもので、直接的に本遺構に伴うような出土状況ではない。縄文土器の文様や胎土などの特徴から、縄文時代前期前葉から中期初頭頃に属する。

まとめ

本遺構は遺存状態が極めて悪く、周壁や床面の大部分を失っているため、住居跡の上屋構造などの特徴については検討課題が残る。また床面上で確認したP1は、住居の南東隅に位置する。重複する8号壁穴住居跡の柱穴の配置と共通する特徴が認められる。本住居跡の年代は、出土遺物が少なく詳細な年代を特定できないが、縄文時代前期前葉から中期初頭頃に属する可能性が高い。

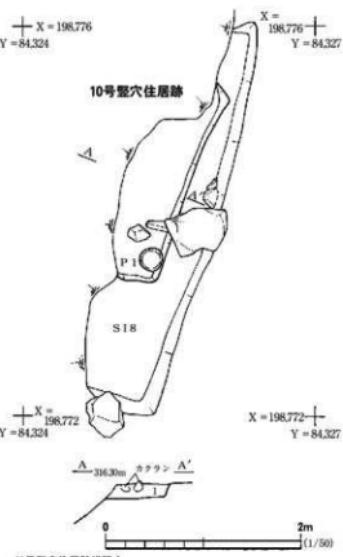


図21 10号壁穴住居跡

11号壁穴住居跡 S I 11

遺構 (図22, 写真21・22)

本遺構は調査区南東端、B2-G9・H9グリッドに位置する。南向き緩斜面の中腹部に立地している。標高は306.7m～307.0mである。遺構検出面はLIV上面である。

本遺構は斜面部に位置し、土砂流失などの影響を受けているため、斜面下位側の周壁や床面は遺存していない。平面形は、東壁の中央部が「く」の字に屈曲することから、楕円形または六角形をなすと推定できる。規模は、北壁の長さが2.95m、深さが0.36mを測る。遺構内堆積土は4層に分けた。1層は床面を広く覆う黒褐色土で、炭化物や焼土を含んでいる。3層は周壁際で確認された褐色土で、壁面の崩落土を含んでいる。2層は炉跡内堆積土で、その下層部分は被熱により酸化面となる。4層は炉跡の掘形内に充填された埋土である。

本住居跡の周壁は、遺存する北壁と東壁の状態から、垂直気味に立ち上がる。床面は北東側の約半分が遺存している。床面はほぼ水平に整えられ、貼床などは確認できない。住居内施設として炉跡、P1～P6を確認した。炉跡は床面の中央付近に位置する。掘形を伴う構造である。P5は東壁の中央に位置する。平面形は楕円形を呈し、東壁を抉るように掘り込まれている。堆積土の観察から、住居が機能時期には開口していたことから、住居内の貯蔵施設であろうか。P1～P4・P

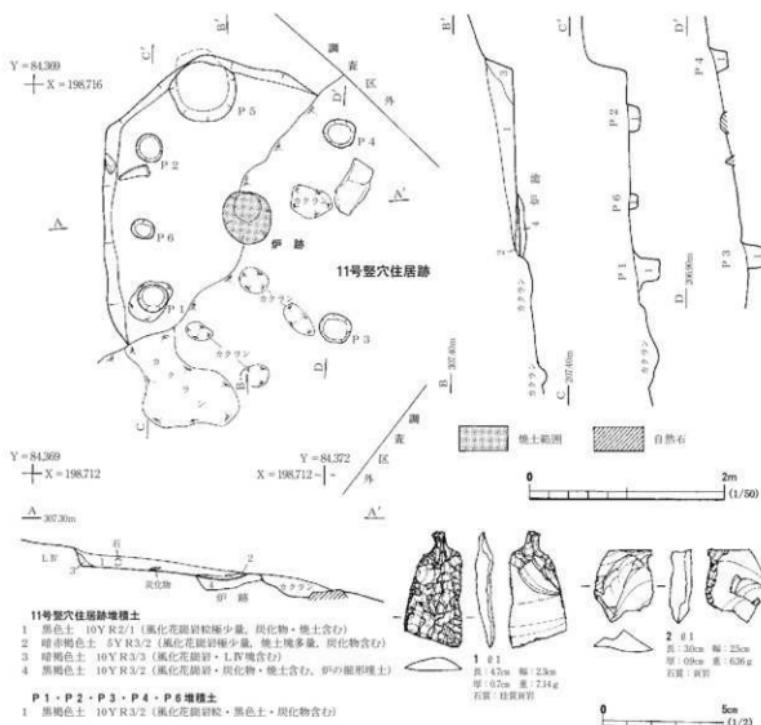


図22 11号縫穴住居跡・出土遺物

6は円筒形に掘り込まれた小穴で、その形状から柱穴と判断した。

遺 物 (図22, 写真29)

11号縫穴住居跡からは縄文土器4点、石器3点が出土している。縄文土器は摩滅した小破片のため図示していない。石器は石匙1点と二次加工ある剥片石器を図22に示した。遺物は1層中から出土したもので、本遺構に直接的に伴うものではない。1は刃部が台形をなす縦長の石匙である。縦長の素材剥片を利用し、その側縁に連続する調整剥離を加えて刃部を作る。背面からの調整剥離は少ない。2は二次加工のある剥片石器である。側縁に両面から剥離調整を加えて刃部を作る。

ま と め

11号縫穴住居跡は南向き斜面の中腹に立地している。遺存状態は悪いが、床面上では焼跡や柱穴などが確認できた。年代を把握できる出土遺物がなく詳細な所属時期は不明である。周辺から出土する縄文土器は、縄文時代前期中葉頃のものが多い。本遺構の年代についても、これら縄文土器の年代に近い時期の可能性を指摘しておく。

第3節 土 坑

今回の調査で確認した土坑は12基である。これら土坑の多くは、調査区北側の尾根頂部付近から南向き斜面上位にかけて分布している。これらの土坑は出土遺物が少ないこともあり、詳細な性格や年代を特定できたものは少ない。なお、土坑の規模等は表2にまとめた。

1号土坑 SK1 (図23・25、写真23・31)

本土坑は調査区北側のB2-D3グリッドに位置する。標高319.5m付近で、尾根頂部の平坦面に立地している。6・9号竪穴住居跡と重複し、そのいずれよりも新しい。

土坑の平面形は楕円形をなす。規模は長径が120cm、短径が87cmを測り、検出面から底面までの深さは最大で52cmである。本土坑の周壁と底面は、花崗岩が露出しているため、その形状は整っていない。土坑内堆積土は3層に分けた。1・2層は炭化物をわずかに含む黒色を基調とする堆積土で、3層はLIVを起源とする壁面の崩落土を含む暗褐色土である。いずれの堆積土も自然流入土と判断した。本土坑の1層からは、縄文土器6点、石器1点が出土した。そのうち形状が把握できたものを図25に示した。図25-1は、口縁部下端にキザミが充填された隆帯がめぐり、その隆帯の上部は半裁竹管状の施文具を用いて、斜めの短沈線が描かれる。隆帯の下部はやや粗いS字状より糸文が施される。縄文時代前期前葉頃の所産と考えている。2は複合口縁となる深鉢の破片であろう。口唇部にキザミが施される他は無文である。縄文時代中期初頭頃の土器と判断した。

本土坑の詳細な年代は不明であるが、重複関係や出土遺物などの特徴から、縄文時代中期初頭以降と推定している。また本土坑の性格を特定できる所見は得られていない。

2号土坑 SK2 (図23・25、写真23・31)

本土坑は調査区北側のB2-D3グリッドに位置する。標高319.0m付近の尾根頂部の平坦面に立地する。重複する遺構はないが、南側に3・4号竪穴住居跡が近接している。

本遺構は円筒形に掘り込まれた土坑であるが、周間に露頭する花崗岩の隙間に構築されたため不整形になる。規模は長径が125cm、短径が110cmを測る。底面までの深さは48cmである。遺構内堆積土は2層に分けた。1層は炭化物をごく少量含む黒褐色土で、自然流入土と判断した。2層はLIVと黒色土を含み、人為的に埋め戻された堆積状況が確認できる。本土坑の1層からは縄文土器と石器が出土した。図25-4は体部上半にくびれを持つ器形で、口縁部には4~6個の対をなす突起が配される。文様は半裁竹管状施文具を用いて、口縁部直下とくびれ部に平行する沈線をめぐらし、体部には不均整な波状沈線が描かれる。3は二次加工のある剥片で、側縁に細かい調整剥離を施す。

本土坑は円筒形をなす形状と堆積状況などの特徴から、貯蔵穴と推定される。年代は出土した縄文土器の特徴から縄文時代後期後葉頃と考えている。

3号土坑 SK3 (図23、写真23)

本土坑は調査区北部のB2-D5グリッドに位置する。尾根頂部からやや下がった南向き斜面の上位に立地している。標高は315.8mである。遺構検出面はLIVである。

本土坑の平面形は円形をなす。規模は直径85cmを測り、深さは15cmと浅い。周壁はほぼ垂直で、底面は平坦になる。遺構内堆積土は炭化物を含む黒褐色土の単層である。堆積土が均質になることから、自然堆積と判断した。

本土坑は出土遺物がないため、詳細な性格や年代は不明である。

4号土坑 SK4 (図23、写真23)

本土坑は調査区北端のB2-C3グリッドに位置する。調査区北側を流れる沢に面する北向き斜面に立地する。8・10号竪穴住居跡と重複し、そのいずれよりも古い。標高は316.0mである。

本土坑は、近年の伐採用道路によって削平されて遺存状態が極めて悪い。遺存する部分から判断すれば、周壁は急峻に掘り込まれ、底面は平坦になる。遺構内堆積土は2層に分けた。1層は炭化物を含む黒色土である。2層は黒色土と褐色土の混土で、人為堆積と判断した。

本土坑は遺存状態が極めて悪いが、周壁や底面の状態が8・10号竪穴住居跡と類似するため、本来は竪穴住居跡の一部である可能性がある。年代は出土遺物がなく不明であるが、重複関係を整理すると縄文時代前期頃と推察される。

5号土坑 SK5 (図23・25、写真24・31)

5号土坑は調査区の北側、B2-E5・F5グリッドに位置する。調査区東側に接する急斜面の裾をめぐる谷の最上部に立地している。標高は318.0mである。1号竪穴住居跡・7号土坑と重複し、そのいずれよりも新しい。遺構検出面はLIIaとした黒褐色土の上面である。

本土坑の平面形は、検出面では梢円形をなす。規模は長径が150cm、短径が140cmを測る。検出面から底面までの深さは60cmである。北壁は崩落のため、やや傾斜が緩い立ち上がりとなるが、その他の壁は急峻になる。底面は隅丸長方形をなし、LIV層まで掘り込まれる。周壁から底面にかけての断面形は逆台形となる。遺構内堆積土は3層に分けた。1層は比較的含有物が少ない褐色土で、2・3層は炭化物や褐色土塊を含む黒色を基調とする堆積土である。土層観察から自然堆積と判断した。本土坑からは縄文土器31点、石器3点が出土した。これらの多くは2層から出土している。図25-5～8は縄文時代中期初頭に属する土器である。5は口縁部がやや受口状に内済して開く器形で、口唇部にキザミが充填される。口縁部には横位に回転する結節縄文が施される。6は隆帶部の破片である。隆帶の上部には浅いキザミが施され、その隆帶下端に三角形の刺突を施している。7・8は無文地に縱の結節回転文が施される。9は縄文時代前期前葉頃の深鉢形土器の体部破片で、ややほつれたS字状より糸文が施される。

本土坑の年代は、重複関係や出土遺物などの特徴から、縄文時代中期初頭以降と考えている。性格や機能については、それを特定する所見が得られていないため不明である。

6号土坑 SK 6 (図23、写真24)

6号土坑は調査区北側、B 2 - E 5 グリッドに位置する。東側に接する急斜面の裾をめぐる谷の最上部に立地している。本土坑は1号竪穴住居跡によって南端部が壊されている。周囲には5・7号土坑が近接している。

本土坑の平面形は楕円形をなすと推定される。規模は長径が110cmを測る。短径は遺存値で、70cmである。深さは16cmと浅い。周壁はほぼ垂直に立ち上がる。底面は平坦であるが、南に向かって低くなる。遺構内堆積土は暗褐色土の単層であるため、堆積状況は不明である。本土坑からは縄文土器片が2点出土したが、摩滅した小破片のため図示していない。

本土坑の性格を特定できる所見は得られていない。年代についても、1号竪穴住居跡より古いことは確認できたが、その詳細な時期までは不明である。

7号土坑 SK 7 (図24、写真24)

本土坑は調査区北側のB 2 - E 5・F 5 グリッドに位置する。1号竪穴住居跡と5号土坑と重複し、1号竪穴住居跡よりは新しく、5号土坑よりは古い。遺構検出面はL II a 上面である。

本土坑の遺存する南半部から判断して、平面形は楕円形と推定される。周壁は比較的急峻な立ち上がりで、特に南側は垂直直角となる。底面は平坦であるが、南端部が深く抉れる。遺構内堆積土は3層に分けた。1層は白色粘土粒を含む黒色土、2・3層は黒色土と褐色土が混ざった黒褐色を基調とする堆積土である。堆積状況から自然堆積と判断している。本土坑の1層からは縄文時代中期初頭と考えられる土器片、石器剥片が出土したが、摩滅した小破片のため図示していない。

本土坑の性格や年代を特定できる所見は得られていないため、その詳細は不明である。重複関係や出土遺物から、縄文時代中期初頭以降に属すると考えている。

8号土坑 SK 8 (図24、写真25)

本土坑は調査区北側のB 2 - D 3・E 3 グリッドに位置する。標高319.5m付近で、尾根頂部の平坦面に立地している。6・9号竪穴住居跡と重複し、そのいずれよりも新しい。1m程西には1号土坑が近接している。

本土坑の平面形は楕円形をなす。規模は長径122cm、短径85cmを測る。検出面から底面までの深さは34cmである。周壁と底面に花崗岩が露出し、その形状は整っていない。底面から周壁にかけての断面形は鍋底状を呈される。遺構内堆積土は、炭化物を含む黒褐色を基調とする堆積土で、自然堆積と判断した。本土坑からは縄文土器・石器剥片が出土したが、いずれも摩滅した小破片のため図示していない。

本土坑の詳細な年代は不明であるが、重複関係や出土遺物などの特徴から、縄文時代中期初頭以降と推定している。また本土坑の性格を特定できる所見は得られていない。

9号土坑 SK9 (図24・25、写真25・31)

本土坑は調査区の北側、B2-E4グリッドに位置する。標高320.3m付近で、尾根頂部の平坦面に立地している。遺構検出面はLIV上面である。

本土坑の北端部が調査区外となるため、平面形や規模は不明である。遺存する周壁は、いずれも急峻に立ち上がる。底面は平坦で、南に向かってわずかに低くなる。遺構内堆積土は炭化物や焼土を含み、やや赤みを帯びた暗褐色土である。堆積状況とその性状から自然堆積と判断した。本土坑からは縄文土器片が17点出土した。図25-10~12・14は同一個体で、口縁部直下にキザミを施した隆起がめぐる。口縁部と隆起の間には、半裁竹管状の施文具を用いて、斜位の短沈線が施される。体部は、ほつれたより糸文が施される。縄文時代前期前葉頃の所産と判断した。15は底部で、体部下端に浅い沈線が数条めぐる。13は複合口縁となる破片で、肥大した口縁に竹管状施文具によってキザミが充填される。縄文時代中期初頭ごろに属する。

本土坑の性格や詳細な年代は不明であるが、縄文時代中期初頭以降に属すると推定している。

10号土坑 SK10 (図24、写真25)

本土坑は調査区北端、B2-C3グリッドに位置する。調査区北側を流れる沢に面する北向き斜面に立地する。2号竪穴住居跡と重複し、本土坑のほうが古い。周囲に7・8・10号竪穴住居跡、11号土坑などが近接している。遺構検出面はLIV上面である。

本土坑の平面形は不整な円形を呈する。規模は長径が100cm、短径が93cmを測り、深さは48cmである。周壁と底面の境は不明瞭で、周壁から底面にかけての断面形は鍋底状をなす。遺構内堆積土は、炭化物をごく少量含む黒褐色を基調とする堆積土で、その堆積状況から自然堆積と判断した。本土坑の1層からは土師器片が4点出土したが、摩滅した小破片のため図示していない。

本土坑の性格を特定する所見は得られていない。また年代は出土遺物から、平安時代の所産と判断した。

11号土坑 SK11 (図24・25、写真26・31)

本土坑は調査区北端、B2-C3グリッドに位置する。調査区北側の沢に面する北向き斜面に立地する。2号竪穴住居跡と重複し、本土坑の方が古い。遺構検出面はLIV上面である。

本土坑の平面形は梢円形をなす。規模は長径95cm、短径93cmを測り、深さが25cmである。周壁や底面は露頭する花崗岩により不整形となるが、本来は円筒形に掘り込まれたものと推定される。本土坑の1層から縄文土器17点が出土した。図25-16は複合口縁となる深鉢形土器の破片で、縄文時代中期初頭頃に属する。17は半裁竹管状の二本同時施文具を用いて、押し引き沈線によって文様

を描いている。数条の横位沈線をめぐらし、その間に波状沈線を充填する。体部下半はS字状より糸文を施す。縄文時代中期前葉頃の所産である。

本土坑の性格を特定する所見は得られていない。年代は出土遺物から、縄文時代中期初頭以降の所産と考えている。

12号土坑 SK12 (図24・25、写真26・31)

12号土坑は調査区中央部、B2-F7グリッドに位置する。調査区東側に接する急斜面の裾部にあたり、標高311.7mほどの谷底地形に立地する。遺構はLIIb層を掘り下げる過程で土器片や焼土塊が検出され、LIII上面で遺構の平面形を確認した。

本土坑の平面形は、西半部が遺存していないが、楕円形と推定される。規模は長径が118cmを測り、短径は遺存値で92cmである。検出面であるLIII上面から底面までの深さは48cmである。周壁は北壁が垂直気味に立ち上がるが、その他の壁は崩落のため、やや緩い傾斜で立ち上がる。底面は平坦であるが、わずかに中央部が深く窪んでいる。また底面の北側はLIV層に達している。遺構内堆積土は5層に分けた。2層は赤褐色土で、その上面は強く焼けている。3層は被熱が及び暗赤褐色に変色している。1層は2層を覆う黒褐色土で、遺物を含んでいる。4・5層は炭化物をわずかに含む黒褐色を基調とする堆積土である。いずれの堆積土も土質が均質であることから、自然堆積と判断した。本土坑の1層からは、縄文土器片が8点出土した。図25-18は深鉢形土器の体部破片である。地文として単節斜縄文が施される。

本土坑の性格として、焼土面が確認されたことから、火を使用する施設の可能性が高い。さらに土坑の周囲に竪穴住居跡の掘り込みや上屋に関連する柱穴など施設がないことから、屋外に造られた炉跡で、半ば埋まりきらない窪んだ状態の土坑を利用していると推察される。年代については、出土遺物の特徴から、縄文時代前期中葉頃と考えている。

表2 土坑一覧

土坑番号	位置	平面形	規模(cm)			年代	遺物	備考
			長径	短径	深さ			
SK1	B2-D3	楕円形	120	87	52	縄文中期	縄文土器6・石器1	SI6より新
SK2	B2-D3	不整円形	125	110	48	縄文後期	縄文土器18・石器3	SI4より新
SK3	B2-D5	円形	85	83	15	—	—	—
SK4	B2-C3	—	(80)	(55)	28	縄文前期	—	SI10より古
SK5	B2-E5・F5	楕円形	150	140	60	縄文中期	縄文土器31・石器3	SK7より新
SK6	B2-E5	楕円形	110	(70)	16	縄文前期	縄文土器2	SI1より古
SK7	B2-E5・F5	楕円形	145	(90)	55	縄文中期	縄文土器7・石器1	SK5より古
SK8	B2-D3・E3	楕円形	122	85	34	縄文中期	縄文土器2・石器1	SI6より新
SK9	B2-E4	—	(160)	(112)	28	縄文中期	縄文土器17	—
SK10	B2-C3	不整円形	100	93	48	平安	土師器4	—
SK11	B2-C3	楕円形	95	93	25	縄文中期	縄文土器17	—
SK12	B2-F7	楕円形	118	(92)	48	縄文前期	縄文土器8	—

* () 内の数値は遺存値を表す

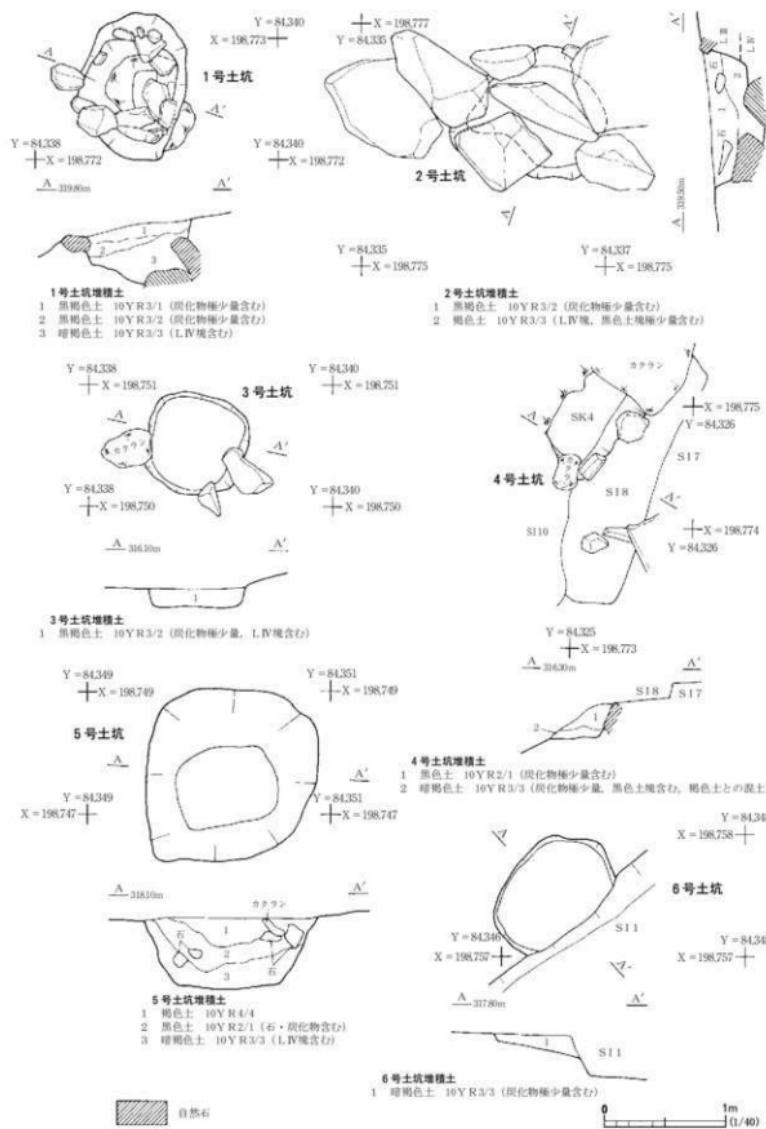


図23 1～6号土坑

第3節 土 坑

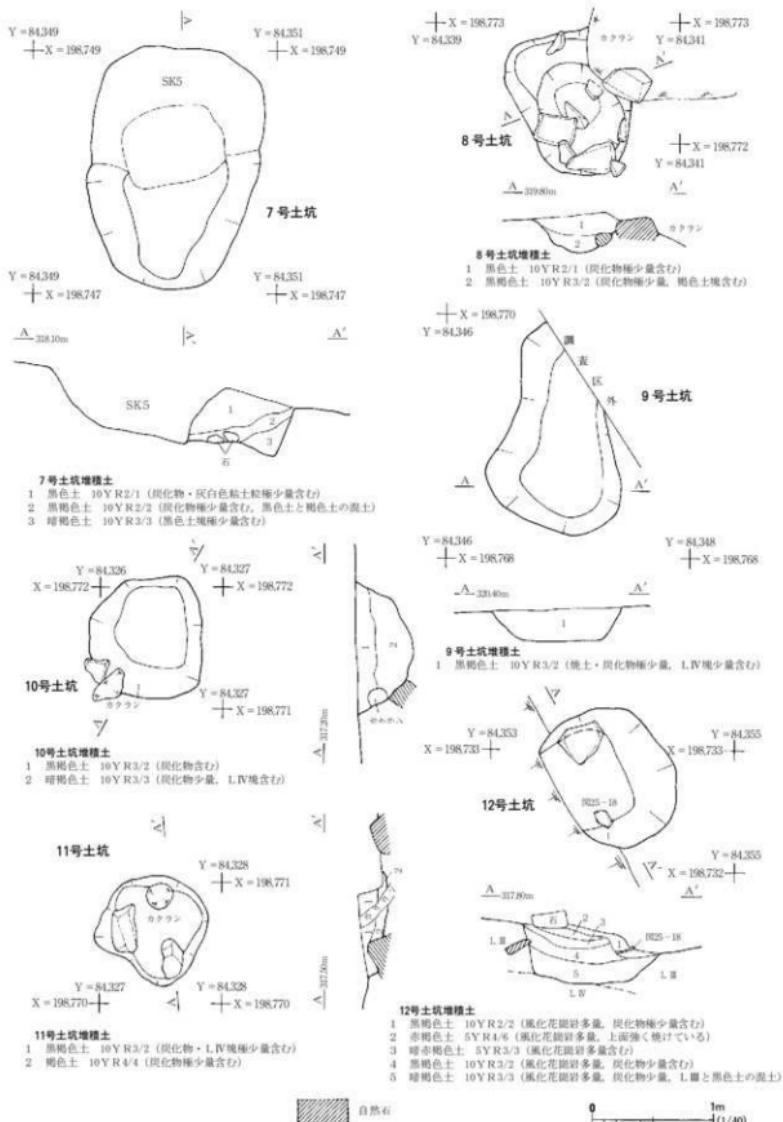


図24 7～12号土坑



図25 土坑出土遺物

第4節 遺構外出土遺物

今回の1次調査では、遺構外出土遺物として縄文土器4,322点、石器100点、土師器258点、須恵器4点が出土した（表3）。遺物の出土位置は、表4で示すとおり調査区北半部に集中する。遺物の年代は、縄文時代早期中葉から縄文時代晩期までの縄文土器や石器、その他に平安時代の遺物が見られる。

以下時期ごとに、遺物の分布傾向や出土状況などをまとめる。

表3 出土遺物点数表

遺物名	総計	堅穴住居跡	土坑	遺構外
縄文土器	5,127 (89.6%)	684	111	4,322
石 器	142 (2.5%)	32	10	100
土師器	443 (7.8%)	181	4	258
須恵器	8 (0.1%)	4	0	4

1 縄文時代早期中葉～前期初頭の土器（図26、写真32）

縄文時代早期中葉から前期初頭の土器は、その出土量は極めて少なく50点程度である。出土位置はB2-E9グリッドに集中して分布する傾向が見られるが、その多くの破片は同一の土器である。

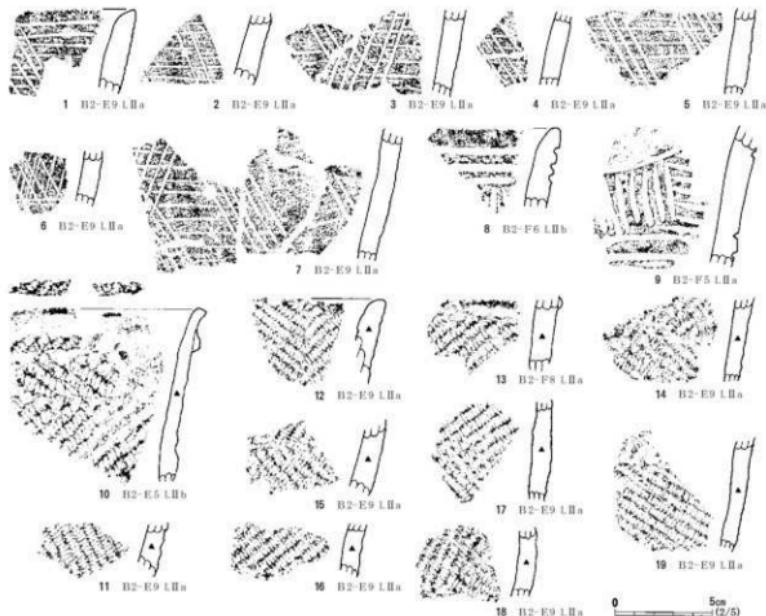


図26 遺構外出土遺物（1）縄文早期中葉・前期初頭

その他B2-E5・F5-F8グリッドなど調査区東側から数点出土している。全体的には数個体分の遺物量と推定される。出土層位はE9グリッドがLIIa層、調査区東側ではLIIb層が多い。

図26-1~7は同一土器の破片資料で、尖底となる深鉢であろう。胎土には纖維を含まず、やや砂っぽい印象がある。1は内削ぎになる口縁部である。外面は横位に平行沈線を描いた後に斜行する沈線が施された格子状の文様となる。内面は平滑に磨かれる。縄文時代早期中葉頃の三戸式期に属すると考えている。8・9はやや彫りの深い沈線文が描かれる。胎土に砂粒が多い特徴がある。8は口縁部破片で、口縁直下に平行沈線が巡る。9は体部上半の破片であろう。沈線で区画された内部を横位または縱位の短沈線が充填される。縄文時代早期後葉頃に属するのであろう。

10~19は胎土に纖維混和痕が認められる。全体的な器形が分かる資料はないが、10・13では口縁部直下に横位隆帯が巡る。12は

口縁部に斜行する単節縄文を重ね縱位の羽状縄文を施す。13~19は体部破片で、結節のない単節羽状縄文が施される。縄文時代早期末葉から前期初頭頃に属する。

2 縄文時代前期前葉の土器

(図27・28、写真33・34)

縄文時代前期前葉の土器の出土量は調査区全体で約2割である。その出土位置は尾根頂部から南向き斜面部に分布している。

図27-1~12は、縄文時代前期前葉頃の大木1式期に属する土器群である。B2-G9グリッド周辺で、LIIb層から約50点が出土した。狭い範囲にまとまって出土し、数個体分の破片であろう。土器の全体的な器形が分かるものはないが、1は口縁部に山形の突起が付き、波状口縁となる深鉢形土器である。外傾して開く器形と推定される。土器

表4 グリッド別出土遺物点数表

	A	B	C	D	E	F	G	H
1	B2-A1							
2				調門 石1				
3		調263 石6 土11	調559 石15 土98 須1	調134 石2 土1				
4		調103 石1 土14	調314 石8 土32 須1	調194 石4 土2				
5		調342 石6 土43 須1	調407 石8 土55	調464 石14	調109 石2			
6		調16 土2	調38	調677 石10	調51 石2			
7			調19	調108 石1	調69 石2	調8		
8			調3	調12 石1	調227 石5	調68 石4		
9				調38	調17	調59 石6	調4	
10				調4	調8 石1	調3		
1	B3-A1							
2						調1		
3				石1				

*調：縄文土器 石：石器 土：土師器 須：須恵器

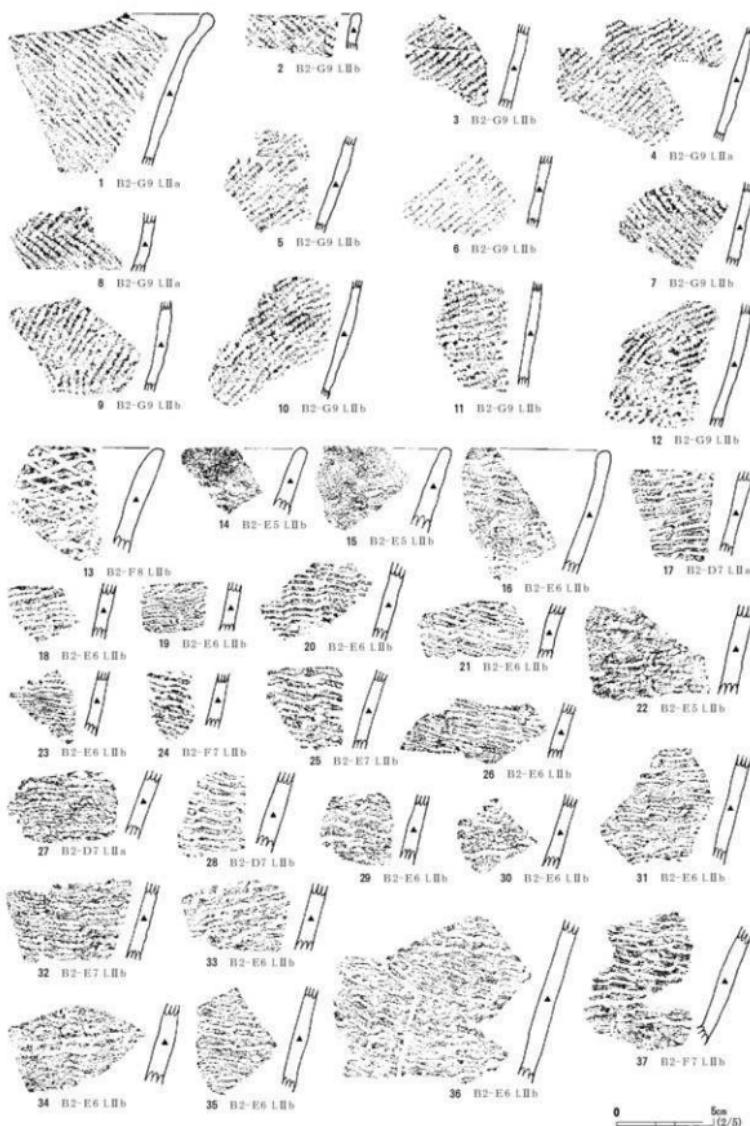


図27 遺構外出土遺物（2）縄文前期前葉

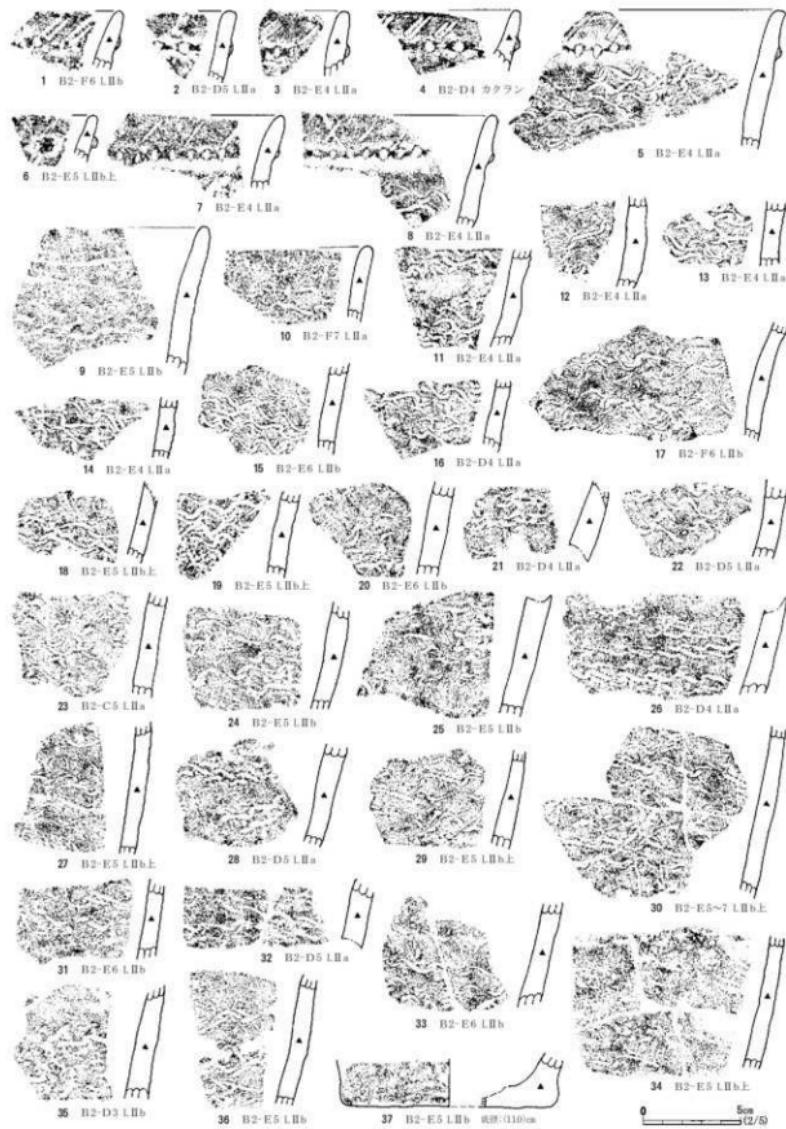


図28 遺構外出土遺物（3）縄文前期前葉

の器厚が薄く、胎土に纖維混和痕が明瞭に観察できる。外面の文様は0段の斜行縄文が地文として施される。

13~37は大木2a式期の土器群である。出土位置は調査区中央部から南向き斜面部に散在している。B2~E6グリッド周辺が最も多く、D7~F7グリッドまで分布している。出土量は200点程度である。LIIa層・LIIb層から出土しているが、両層に混在した状態で出土している。深鉢形土器であるが、ほとんどが小破片となって出土したもので、全体的な器形が分かることは少ない。胎土には纖維混和痕が認められる。13は口縁が外傾して開く。外面は粗い網目状より糸文が施される。14・15は口縁部直下が無文となる。16は口縁部がわずかに内湾する。外面はやや粗い葺瓦状より糸文が施される。17~37は体部の破片である。外面に葺瓦状より糸文が施される。また36は葺瓦状より糸文がやや粗くほつれているため、「S」字状になるものもある。

図28は大木2b式期に比定される土器を示した。縄文時代前期前葉の遺物の中で大半を占める。尾根頂部に集中する傾向が見られる。これら土器群の特徴は、胎土中に纖維混和痕が見られる。赤褐色を呈し、砂粒を含む軟質な土器である。全体の器形を復元できるものは出土していないが、口縁部が外傾して開く深鉢形土器であろう。図28-1~8は口縁部破片である。口縁部直下に指頭によるキザミを施した横位隆帯がめぐる。隆帯上部には半裁竹管状の二本同時施文具を用いて斜位の短沈線が施される。隆帶より下部は、ややはづれた「S」字状より糸文が施される。4は横位隆帯の上下に刺突が加えられる。9・10は口縁部直下に横位隆帯がなく、直線的に外傾して開く器形であろう。摩滅して不鮮明であるが、口縁部直下から「S」字状より糸文が施される。11~36は体部破片である。外面には「S」字状より糸文が施される。内面は摩滅して不鮮明であるが、17・18などは器面を平滑に磨いているものも見られる。37は平底となる深鉢形土器の底部小破片である。外面の文様は不鮮明であるが、胎土の観察などから本群に分類した。

3 縄文時代前期中葉の土器 (図29・30、写真35・36)

縄文時代前期中葉の土器については、大木3式期~大木4式期に比定される土器群に分けた。遺物の出土量は1次調査区で出土した遺物の約1割を占める。これらの土器は調査区全域で散在しているが、大木3式期の土器は尾根頂部付近に集中し、大木4式期の土器は、南向き斜面の下位側B2~G8グリッドに集中する傾向が見られる。出土層位は頂部付近がLIIa層、斜面部がLIIa層・LIIb層から混在して出土している。

図29-1~16は半裁竹管状の施文具を用いて、連続刺突や押し引き文を多用するものである。全体的な器形は不明であるが、深鉢形になるのである。胎土には纖維混和痕が認められる。1~5は口縁部から体部上半の破片である。文様は、無文地となる口縁部に菱形の隆帯をめぐらし、隆帶上部には半裁竹管状施文具を用いた刺突を施す。9~11は口縁部の菱形隆帯から垂下する「8」字状の隆帯が貼り付けられる。口縁部文様帶の下部は、半裁竹管状施文具の押し引き文による平行線が5~6条めぐり、この平行線間に、平行線と同じ施文具を用いた波状線が描かれる。体部下半



図29 遺構外出土遺物（4）縄文前期中葉

の文様は斜行する単節縄文が施される。

図29-18~25は沈線文と円形竹管状の施文具による刺突で構成される文様である。全体的な器形を復元できるものではなく、その文様構成が分かるものも少ない。18~21は波状口縁となる。口縁部文様帶に沈線文で区画された内部に円形竹管による刺突が充填される。

図30は大木4式期の遺物を示した。その中でB2-G8グリッドとした土器は、木根などの搅乱内からまとめて出土したものである。本書第2章第1節で述べたように、図6に示したA層の分布範囲に集中している。A層の堆積状況やA層下部で焼土面が観察できたことを評価すれば、本群

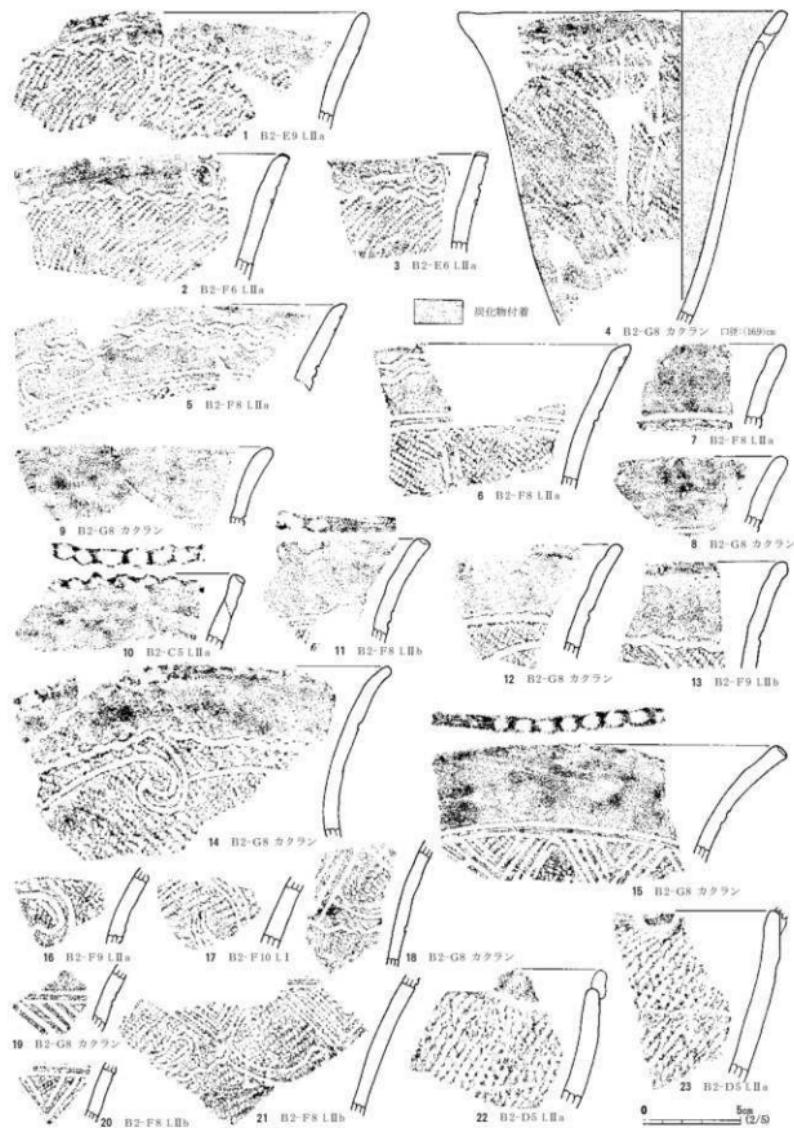


図30 遺構外出土遺物（5）縄文前期中葉

の土器を主体とする堅穴住居跡が存在していた可能性を指摘しておく。

図30-1～4は口縁部が外反して開く器形で、幅の狭い無文の口縁部が波状沈線によって区画される。1・4には無文の口縁部を区画する波状沈線から縦位に垂下する2本の沈線が見られ、4は体部下半まで延びる。2・3には無文となる口縁部に円形の沈線文が描かれる。5～15は無文の口縁部の幅が広いものである。5・6は口縁部の無文帯が平行沈線で区画され、無文帯に二重の波状沈線がめぐる。7～11は口縁部の無文帯が横位沈線で区画されるもので、無文帯に沈線文が施されない。10・11は口唇部にキザミが見られる。12～21は口縁部の無文帯を区画する平行沈線や波状沈線の下側に沈線文が描かれる。三角形や波状文、「J」の字状の沈線文で構成される。22・23は粗製の深鉢形土器である。口縁部に拇指大の粘土を貼り付けた突起が認められる。外面には横位に回転する縄文が施される。

4 縄文時代中期初頭の土器 (図31～35、写真37～44)

縄文時代中期初頭の土器は、1次調査で出土した縄文土器の約5割を占める。出土位置は調査区全城に散在しているが、特に調査区北部に集中する傾向が見られる。尾根頂部の平坦地では3～5号堅穴住居跡の周辺やB2-C4・D4・D5グリッド、南向き斜面上端部では1号堅穴住居跡が位置するB2-E5・E6グリッドの周辺である。出土層位は、尾根頂部ではLIIa層、斜面部ではLIIa・LIIb層である。いずれの土層も時期を異にする遺物が混在する出土状況であり、LIIb層からの出土は比較的少ない。本土器群は、概ね大木7a・7b式期に属すると考えられるが、詳細な分類が困難なものも多く、ここでは土器の特徴ごとに説明する。

図31-1～26は口縁部の文様帶に「ハ」の字状や矢羽状の短沈線を多用して文様を表すものを一括した。器形はいずれも深鉢形土器であるが、口縁部文様帶の下端に段を持ち、口縁部が内済して受口状に開くもの、体部から口縁部にかけて直線的に立ち上がるものがある。口縁部の形態は、平縁、波状口縁になるもの、山形の突起が付くものも見られる。1～3は口縁部の山形突起からキザミが施された隆帶が垂下する。口縁部は肥大した複合口縁となり、縦位の短沈線やキザミが施される。1は直線的な縦位隆帶で口縁部文様帶を区画し、内部に「ハ」字状の短沈線が充填される。2・3は複合口縁部に沿って幅の狭い楕円形を呈する沈線文を描き、その内部に刺突が充填される。口縁部文様帶は「V」・「Y」字の隆帶で区画され、1段の「ハ」字状短沈線が施される。文様帶の下端はキザミが施された横位隆帶がめぐり体部を区画している。4・5・7は口縁部直下から「ハ」字状短沈線が施される。7は横位隆帶の下端に刺突による三角形の陰刻が見られる。14は山形突起から垂下する隆帶に指頭によるキザミが施される。23～25は口縁部の文様帶に沈線文を多用するもので、斜行沈線の内部に短沈線が充填される。25は斜行沈線の間に刺突による三角形の陰刻を施す。21・26は口縁部文様帶と体部の境にあたる部分の内面にかえりが付く。体部は無文地で縦位の結節回転文が施される。

図31-27～38は爪形文と交互刺突文を多用して文様を表している。爪形文は半裁竹管状施文具を

用いた連続刺突で、平行沈線の内部に充填される特徴がある。27~32は頸部が「く」字状にくびれ、口縁部が内湾して受け口状に開く。口縁部文様は、上半部にやや長いキザミを密に施し、下半部は爪形文を充填した平行沈線が2条めぐる。屈曲する頸部に半裁竹管状施文具や指頭によるキザミを施す横位隆帯がめぐる。33~38は頸部から体部にかけての破片で、横位の交互刺突文と爪形文が充填された平行沈線が数条めぐる。また34~36・38は、頸部隆帯から垂下する短い隆帯が貼り付けられ、隆帯下部に半裁竹管状施文具による沈線文が描かれる。

図31~39~44、図32-1~7は、隆帯や平行沈線に沿って交互刺突文が施される土器である。交互刺突文は円形竹管を用いて上下から互い違いに刺突されている。図31~41は小型深鉢の口縁部破片で、肥大する口縁部の直下に交互刺突が施される。同図44は山形突起から垂下する沈線に沿って、縦位に交互刺突が施される。図32-1・2は口縁部直下に交互刺突文が施された。交互刺突はやや疎らに施される。図32-3~6は平行沈線の内部に連続して細かい交互刺突を施すもので、立体的に整った波状線を表している。3は口縁部に渦巻き状の沈線を施す突起が付き、口唇部には細かいキザミが加えられる。5・6は交互刺突文と平行する沈線に沿って連続刺突が加えられる。図32-7は体部下半の破片で、縦位の沈線に沿って交互刺突が施される。また交互刺突文が施された土器は、無文地のものが多い特徴がある。

図32-8~11は連続刺突を施すものである。口縁部直下に横位沈線をめぐらし、それに沿って連続刺突を施している。12~14は範状施文具を用いた浅いキザミによって文様を表すものである。13・14は口縁部文様帶に斜沈線に沿ってキザミが加えられ、刺突による三角形の陰刻が施される。15・16・26はやや幅広の複合口縁となる。口縁部に縦長のキザミが密に施される。26は平行沈線間に連続刺突が加えられる。17~23は口縁部に平行沈線が数条めぐり、横位隆帯が貼り付けられるものもある。24~28・31は平行沈線間に連続刺突が施される。これらの土器も無文地となるものが多い特徴がある。図32-32~35は口縁部背面が肥大し、波状口縁となる。地文として彫りの浅い縄文が施され、頸部に数条の横位沈線がめぐる。

図33-1~13は口縁部に装飾性の高い突起が付く土器である。1は鶏冠状の突起を持つ波状口縁となる土器である。肥大した口縁部に沿って沈線文が描かれる。2~4はボタン状の粘土粒を貼り付け、中央部を押圧してリング状をなす。6は突起の上端部にボタン状の粘土粒が付けられる。8は内面部にリング状の粘土紐を貼り付けている。9・12は口縁部の突起に粘土紐を貼り付けて、立体的な渦巻き文を施している。11・13は口縁部に細い粘土紐が貼り付けられる。

14は頸部に乳房状の突起が2ヶ所貼り付けられる。15・16は口縁部直下から縦位の結節回転文が施される。18~22は隆帯に沿って縄压痕文が施される。20・22は断面が三角形をなす低い隆帯で、隆帯の上部に沿って縄压痕文が施される。地文は縦走する縄文である。

図34-1~26は口縁部に文様が施されないものである。1~11は直線的に立ち上がる口縁部で、平線と波状口縁となるものがある。12~20は口唇部にキザミが充填される。21~29は複合口縁となる深鉢形土器である。27~29は地文として斜行縄文が施される。30~40は隆帯が貼り付けられた土

器である。30・34・36・40は楕円形または長方形をなす隆帯が付くのであろう。31・32・38は屈曲する頸部に、指頭によるキザミを施した短い隆帯が貼り付けられる。35・37は横位隆帯の下部に結節回転文が見られる。

図35-1・2は補修孔のある破片である。1は口縁部に横位の多条沈線がめぐり、口唇部にキザミを施す。補修孔は口縁部直下に穿たれている。補修孔の断面形は、外面部から漏斗状になることから、外面部から穿たれていることがわかる。2は頸部付近の破片で、刺突を施した横位隆帯がめぐる。口縁部はやや彫りの浅い縄文が施される。補修孔は口縁下端部に位置し、外面部から穿たれている。3~23は無文地となる体部に、縦位の結節回転文が施される。結節回転文による縦位の縄文帯の間隔と幅に違いが認められ、4~10は縄文帯が狭い特徴がある。

5 縄文時代後期～晩期の土器（図35）

縄文時代後期～晩期の土器は、その出土量は極めて少なく十数点程度である。2号土坑の周辺B2-D3グリッドに集中する。また表面で採集した遺物として、遺跡北東端で調査区分となるB2-G2グリッドに集中し、この範囲に縄文時代後期～晩期の集落跡が分布している可能性が高い。24は体部破片で、地文となる縄文を施した後に沈線文を描いている。縄文時代後期初頭頃に属する。

25~28は半裁竹管状の二本同時施文具を用いて連弧文を描く。2号土坑の出土遺物（図25-4）に類似し、縄文時代後期後葉頃に属する。29~32は縄文時代晩期の土器である。いずれも粗製土器の小破片であるため、詳細な時期までは不明である。29は複合口縁となる壺形土器で、口縁部と体部により糸文が施される。30は口縁部下端に鋭い段を持って開く壺形土器である。口唇部にはキザミが施される。31は外面に粗い網目状より糸文が見られる。32はハケメ状の調整痕が残る。

6 平安時代の土器（図35）

平安時代の遺物として土師器と須恵器が出土している。表3に示すとおり、縄文土器に比べると遺物量は極めて少ない。それらの分布は、2号竪穴住居跡周辺のB2-C3グリッド、B2-D3～D5グリッド周辺と大きく2つの集中地点が見られる。出土層位は表土直下のLIIa層である。

図35-33・34は土師器の杯である。いずれもロクロを用いて成形され、内面は黒色処理が施される。体部下端と底面にはケズリ調整が観察できる。33は静止糸切りによる底部の切り離し痕跡を残している。35・36は土師器の甕で、いずれも成形にロクロを用いている。35は内外面とも体部調整に縦位の指ナデ痕が見られる。36は底部破片で、内面にロクロの回転を利用したカキメ痕が残る。

7 縄文土器底部資料（図36）

図36には縄文土器の底部資料を一括した。全体的な器形を把握できるものや文様が遺存していないものが多いため、詳細な分類が困難である。ここでは土器の胎土に観察できる纖維混和痕などの特徴から、大まかに縄文時代前期前葉～中葉頃、中期初頭頃の2つに分類した。

図36-1～13は縄文時代前期前葉～中葉頃の底部資料である。1は小型深鉢形土器であろう。底部から直線的に立ち上がる器形である。外面には斜行する縄文が施される。1～9の底面は、土器製作時に敷物として使用した網代の痕跡が認められる。網代の種類は数種あり、その多くは3～5に見られる、経が2本越え、1本潜りで、緯が2本越え、2本潜りである。10～13は敷物の痕跡が見られない底部である。

図36-14～24は縄文時代中期初頭の底部資料である。土器の胎土に纖維混和痕がなく、やや砂粒が多い軟質の土器である。器形は大ぶりな深鉢形土器が大半を占めるが、14のような小型土器も含まれる。14～16は底部から直線的に立ち上がるもの、17・18は大きく外傾して立ち上がる器形が見られる。底面の網代痕跡については、小破片が多く詳細は不明である。縄文時代前期の土器と同様に、敷物の痕跡が見られないものが大半を占め、木葉根を残すものも見られない特徴がある。

8 石器・石製品（図37～39、写真45・46）

石器の出土位置は、基本的には縄文土器と同様な分布を示している。尾根頂部から斜面上位にかけての範囲に集中する。また花崗岩が密集してきた。わずかな隙間から石匙（図37-10・11）が出土する。明確な遺構としての痕跡はないが、意図的な石器埋納行為の可能性も考えられる。

図37-1～4は石鎚である。1～3は無茎石鎚で、身幅の狭い長三角形を呈する。1・2は浅い抉りを持つ基部である。4は身幅が広い有茎石鎚であろう。側縁部に細かい調整剥離を施した刃部を形成し、中央部は素材剥片を採取した際に生じた剥離面を残す。5～11は石匙である。5は正三角形を基調とする刃部で、頂部に小さなつまみが造られる。側縁には両面からの細かい調整剥離が加えて刃部を造る。裏面は刃部の調整剥離が少なく、中央には素材剥片に採取による主要剥離面を大きく残す。6は長方形を基調とする横長の石匙である。側縁には表裏面からの調整剥離を施している。7～11は綫長の石匙である。8・9は素材剥片の打瘤が刃部側に見られ、つまみ部の幅が広い。10・11は刃部が長い石匙で、側縁に細かい調整剥離を連続して施している。12は基部と先端部を欠損する。石匙または石槍であろうか。表裏面とも刃部の調整剥離が密に施される。13・14はつまみ部や刃部を欠損しているが石匙であろう。裏面からの刃部調整剥離が少ない。15は石錐であろうか。先端部に調整剥離を施し、鋭い尖頭部を造る。

図38-1は三角形をなす形状から、石鎚の未成品であろう。2・3は搔器であろうか、2は三角形、3は台形を基調とする。4～14は二次加工のある剥片とした。剥片の側縁部に調整剥離は見られるが、定形的な石器の形状をしていないものを一括した。10は丸みを帯びた三角形をなす。側縁に剥離が連続するが、一部自然面を残す。同図2・3と同じく搔器であろうか。12は扇形をなす剥片で、裏面の打瘤を取り除いている。石匙の素材剥片であろうか。13・14は頁岩の剥片である。

図39-1～8は凹石・磨石である。円形または梢円形を呈する櫻を利用している。表面は使用により平滑になる。表裏面の中央や側面に敲打痕が残る。9は玄武岩を用いた薄い石製品で、装飾品であろうか。表裏両面ともに研磨痕が残る。块状を呈する切り込みの上端に補修孔が穿たれる。



図31 遺構外出土遺物（6）縦文中期初頭



図32 遺構外出土遺物（7）縄文中期初頭



図33 遺構外出土遺物（8）縄文中期初頭



図34 遺構外出土遺物（9）縦文中期初頭

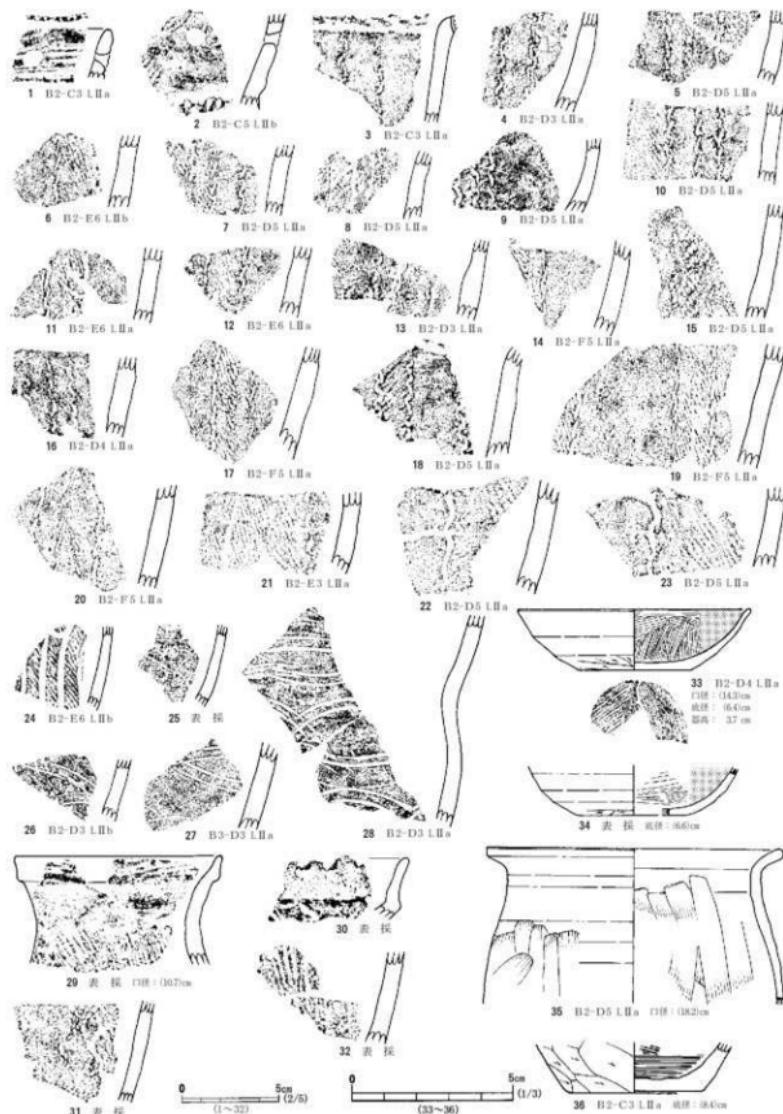


図35 遺構外出土遺物（10）縄文中期初頭・後期～晩期、土師器

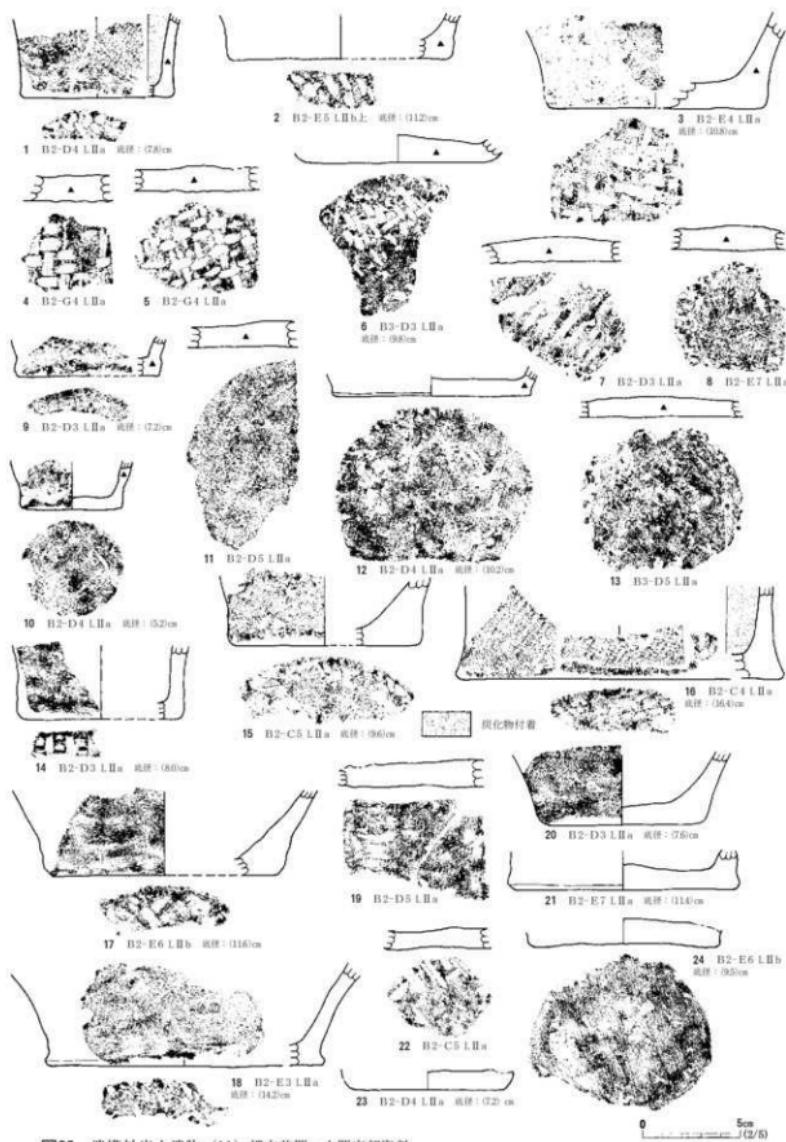


図36 遺構外出土遺物（11）縄文前期～中期底部資料

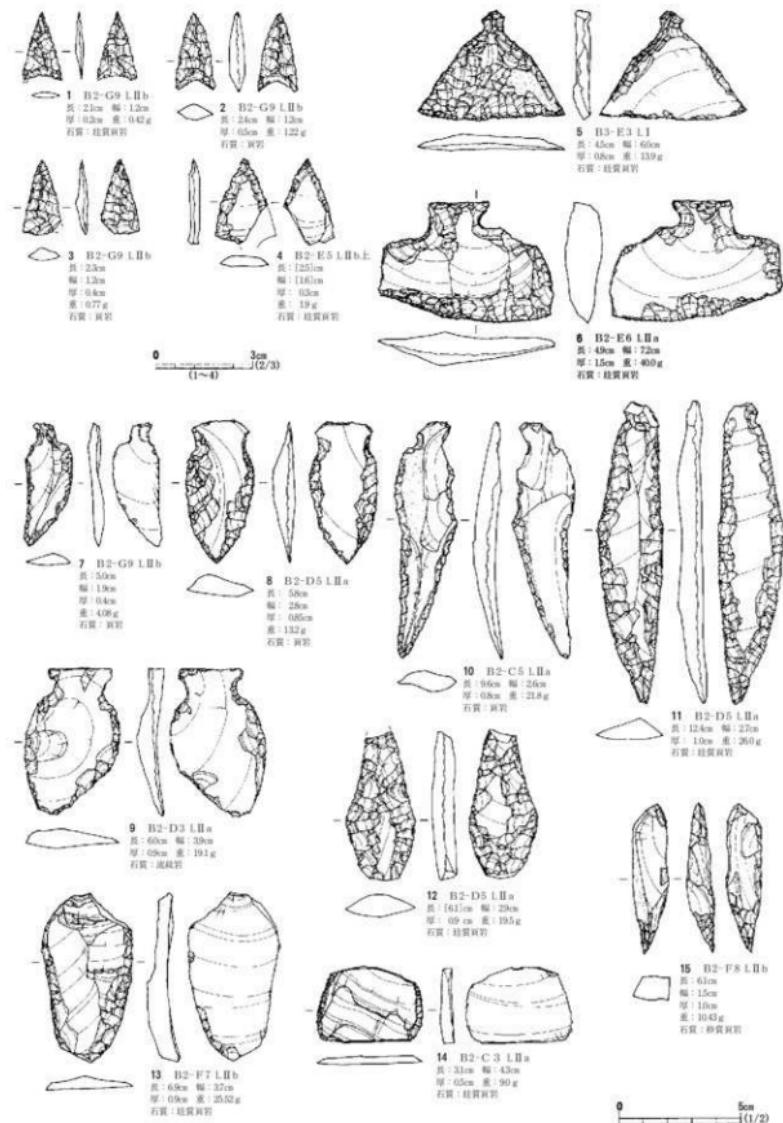


図37 遺構外出土遺物 (12) 石器 (1)

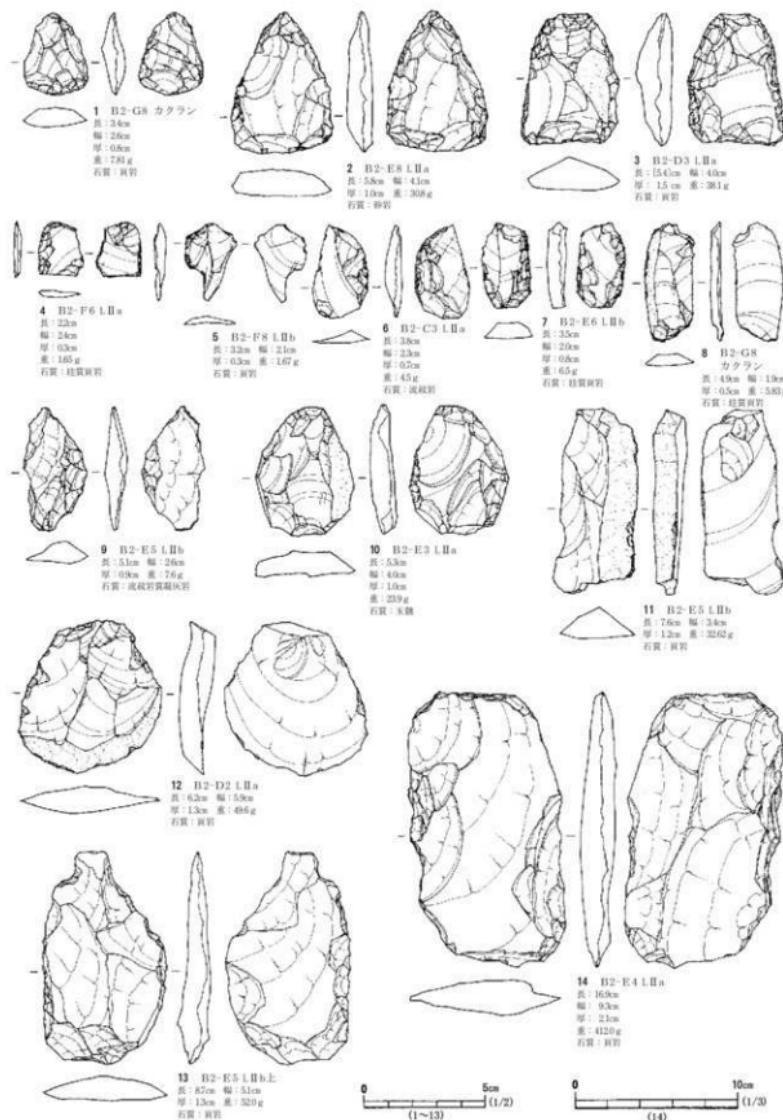


図38 遺構外出土遺物 (13) 石器 (2)

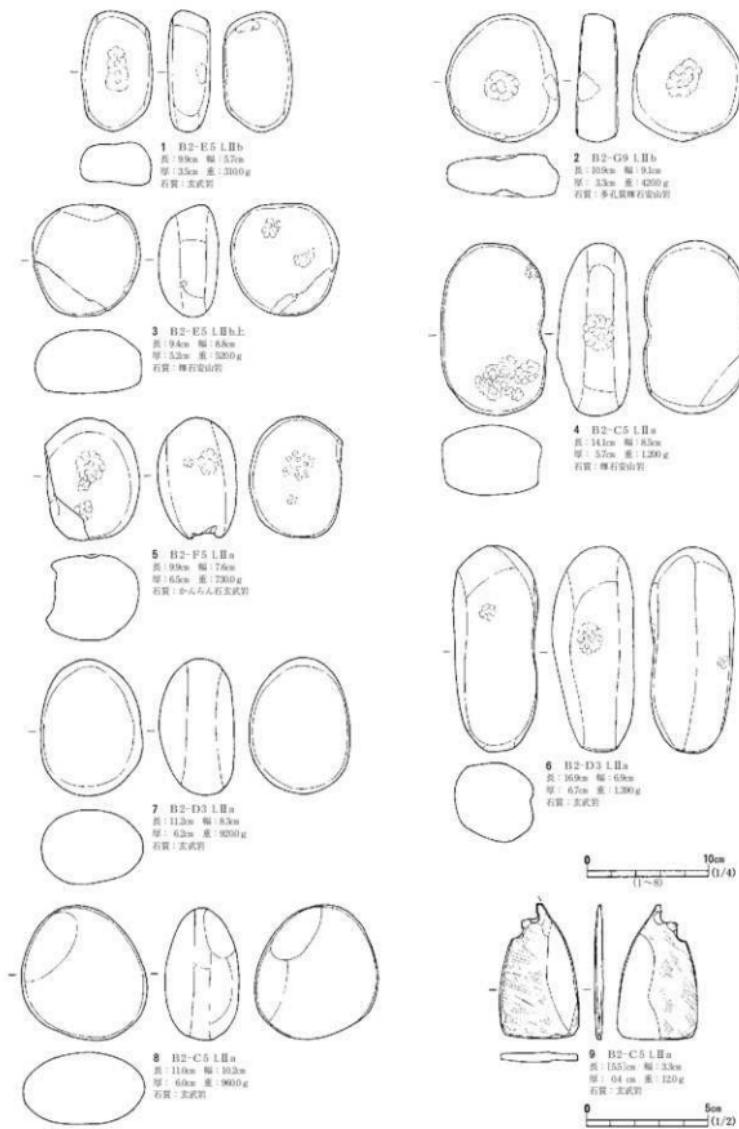


図39 遺構外出土遺物 (14) 石器 (3)・石製品

第3章 まとめ

今回の1次調査では、竪穴住居跡11軒、土坑12基を確認した。遺物は縄文時代早期中葉から晩期までの縄文土器や石器、平安時代の土師器・須恵器が出土した。本章では1次調査で確認された竪穴住居跡を中心として、縄文時代と平安時代の調査成果をまとめる。

1 縄文時代の竪穴住居跡について

1次調査で確認した縄文時代の竪穴住居跡は9軒で、縄文時代前期前葉～中葉と中期初頭の時期に大別できる。第2章で報告したように、竪穴住居跡の多くは、花崗岩を避けて同所に重複して構築される。6・8～11号住居跡は縄文時代前期前葉～中葉に属し、1・3・4・5号住居跡は縄文時代中期初頭に属する。竪穴住居跡は各時期とも重複することから、1～2軒程度の竪穴住居で構成された小規模な集落と推定される。

竪穴住居跡の分布 本遺跡1次調査範囲は、宇多川に向かって東西方向に延びる尾根の頂部から南向き斜面にあたる。縄文時代に属する竪穴住居跡の分布位置は大きく4地点見られる。①尾根頂部の平坦面に3・4・5・6・9号住居跡、②南向き斜面の上位に1号住居跡、③南向き斜面の下位に11号住居跡、④北向き斜面上位に8・10号住居跡が分布する。④に分布する11号住居跡を除き、尾根頂部の平坦面と斜面へ続く肩部に立地する傾向が見られ、竪穴住居跡の占地は、所属時期を異にしても明確な違いは認められない。このことは図6に示すように、基盤土に含まれる花崗岩の密度に影響すると推察され、複数の竪穴住居跡が重複する要因と考えられる。11号住居跡についても、花崗岩が比較的少ない緩斜面に分布している。

縄文時代前期の竪穴住居跡 縄文時代前期の大木2b～3式期に属する竪穴住居跡は、削平などで部分的に遺存する程度であるが、その平面形は長方形（8・10号住居跡）または楕円形（6・9・11号住居跡）を基調とする。全体的な規模が分かるものはないが、長軸が約3.0～3.5m、短軸が約2.5～2.8mと比較的小型の竪穴住居跡である。炉跡は11号住居跡でのみ確認した。床面のほぼ中央部に位置する。炉跡の構造は掘形を伴い、掘形内に土を充填して浅いくぼみを火床面としている。その他に床面上の施設として、9号住居跡P1、11号住居跡P5に見られる浅いくぼみを検出したが、それらの機能を特定できるだけの所見はない。住居内の貯蔵施設であろうか。

柱穴の配置は、基本的には床面の形状に沿って周壁際に配される。住居跡の平面形が長方形になる8・10号住居跡の柱穴は周壁間に配される。平面形が楕円形をなす竪穴住居跡では、11号住居跡が比較的整った4本の主柱穴となるが、その他の住居跡は周壁際に不規則な配置の柱穴である。

縄文時代中期初頭の竪穴住居跡 縄文時代中期初頭頃の竪穴住居跡の構造は、縄文時代前期のものと比べ、構造上の明瞭な違いは認められない。平面形は長方形（1・4号住居跡）、楕円形（3・5号住居跡）を基調とする。4号住居跡の規模は長軸が4.8m、短軸が3.3mと縄文時代前期の竪穴

住居跡よりは大きい。炉跡は3号住居跡でのみ確認できた。炉跡は床面中央から西に偏った位置にあり、その構造は11号住居跡と同様に掘形を持つ浅いくぼみを火床面とする。柱穴の配置は、平面形が長方形をなす4号住居跡では、周壁に沿って規則的に並ぶ。平面形が楕円形をなす3号住居跡の柱穴は、床面中央と周壁際に配されるが、その間隔は不規則になる。

周辺遺跡との比較 次に本遺跡と同じく阿武隈山地東縁部に分布する下南山遺跡、真野ダム関連遺跡群を対象として竪穴住居跡の分布と構造を比較する。

本遺跡で主体となる大木2 b～3式期の竪穴住居跡について、真野ダム関連遺跡群の中では縄文前期前葉でもやや古い関山式～大木2 a式期は比較的多いが、それらに後続する時期の例は、大木3式期の上ノ台C遺跡2号住居跡があるだけで極めて少ない。真野ダム関連遺跡群の調査成果からすれば、縄文時代前期前葉に属する竪穴住居跡は、平面形が長方形と円形を基調とするものが混在し、住居内に地床炉を持つものと持たないものがあるとし、円形基調をとる住居跡が新しい傾向があると指摘している。また大木2 b～3式期の住居跡が確認されている宮城県利府町六田遺跡では、方形・長方形を基調とする住居跡を主体とし、それに円形基調のものが少数確認できる。住居内に炉はないものがほとんどである。住居跡の平面形に限っていえば、真野ダム関連遺跡群で指摘する方形から円形への変遷だけではないことが分かる。

縄文時代中期初頭の竪穴住居跡について、下南山遺跡など該期の縄文土器は出土する遺跡は散見できるが、竪穴住居跡のまとまった確認例は極めて少ない。近年発掘調査が実施された、南相馬市原B遺跡では、大木7 b式期を主体とする竪穴住居跡が確認されている。それによれば竪穴住居跡の平面形では円形と長方形を基調とするものが混在し、上屋を支える柱穴の配置も不規則である。さらに住居内の地床炉の有無も明確でない。本遺跡の竪穴住居跡も同様な点が指摘できるが、花崗岩が多数露頭する基盤土の立地条件に起因する可能性も考えられる。本遺跡の事例との比較には、今後の検討課題が残る。

2 平安時代の竪穴住居跡について

1次調査で確認した平安時代に属する遺構は、2号・7号竪穴住居跡だけである。ここでは遺存状態が良好であった2号竪穴住居跡をまとめ、近年の発掘調査において類例が増加してきた山間部に営まれた古代の小規模集落について若干の検討を加える。

萩平遺跡2号竪穴住居跡 2号竪穴住居跡は斜面上位側を開削し、その残土を斜面下位側に押し出して床面を確保する構造である。住居跡の平面形は長方形を呈し、その長辺の向きが斜面の等高線に平行する。その特徴として、①沢に面する北向き斜面に構築された竪穴住居跡、②石造りのカマドを伴い、カマド以外に柱穴などの施設がない、③遺物は少ないが、その内容は一般的な集落の竪穴住居跡から出土するものと大差ない。④住居跡の年代は、出土遺物から9世紀中葉頃である。2号住居跡は住居跡の向きについて、2号住居跡は沢に面する北向き斜面に造られる。一般的には北向き斜面は日当たりが悪く生活に不便であるように思えるが、生活用水を常時確保するには適し

ている。一方、調査区内の南向き緩斜面は、日当たり良好な場所となり、一見堅穴住居を造るには適した場所である。ここで着目すべき点は、2号住居跡の構造と花崗岩を含む基盤土の地質であろう。1次調査区内の基盤土(LIV)には、数多くの花崗岩巨石が折り重なるように混入し、特に南向き斜面における花崗岩の密度はきわめて高い。花崗岩が多数露出する地点において、床面の広さ分を掘り下げることは困難で、平坦な床面も造りづらいことは想像に難くない。本住居跡の貼床に見られるように、斜面上位側だけを掘削することで、花崗岩に当たる部分を少なくし、その掘削土を利用して露出した花崗岩を埋めて平坦な床面を確保する構造となるのであろう。

カマドは斜面上位側の壁面中央に位置する。カマドの構造は、一辺が30cm程で、厚さ5~10cm程の板石を芯材として袖部が造られ、燃焼部の天井は同様な板石を数枚乗せている。壺等をかける口の部分は長さ50cm、幅10cm、厚さ5cmの棒状の石を3本乗せている。燃焼部の外面は、粘土で覆われて火が漏れないようにしている。煙道部は基盤土に石が多いため、住居壁面から開放状態で掘りこまれ、煙道の天井は石で蓋がされている可能性が高い。カマドの他に明確な機能が推定できる施設はない。さらに柱穴も認められないため、上屋構造は不明である。

2号堅穴住居跡の出土遺物は、図11に示すとおり極めて少なく、土師器は杯や壺が各数個体で、それに須恵器壺と筒形土器が伴う程度である。これら遺物の性格としては、杯や壺等は日常的な生活品で、各器種の数量に違いはあるが、基本的には一般的な集落の堅穴住居跡から出土するものと何ら変わることはない。また墨書き土器については、文字が判読不明であり、その内容を留保する必要があるが、単に墨書き土器の出土からすれば、本住居跡の特殊性を示す遺物でもない。その他本住居に居住する人物の職能を特定できる遺物は出土していない。

荻平遺跡の平安時代集落 近年の発掘調査において山間部に営まれた小規模集落が発見され、このような集落の性格について、「離れ国分」、「非平地小規模集落」、「山棲み集落」とする研究・論考が数多く知られている。これらの研究によれば、集落の周囲に水田や畠地など農耕地の存否、遺跡内の遺構・遺物に基づき集落構成員の生業を特定する分析方法により、集落の性格について、A鍛冶を生業とする工人集落、B運送業などの商業的集落、C宗教関連の集落、DとしてA~C以外の畑作農耕集落に分類している。

荻平遺跡は地理的に阿武隈高地東縁の山間部に位置していることは間違いない。平安時代において宇多郡の中心地の一つとされる黒木田遺跡から直線距離で約11km内陸にあり、その標高差は約300mである。遺跡の立地では、宇多川上流域の比較的広い河岸段丘上に位置しているが、水田稲作には不向きな狹隘な谷と細尾根が複雑に入り組む地形となる。農耕地の確保の観点からすれば、畑作に依拠すると推定される。

本県における山間部集落の調査事例から、浜通り地方の真野ダム関連遺跡群から飯館村松ヶ平A遺跡37号住居跡など、中通り地方の玉川村平ヶ谷地A遺跡1号住居跡、会津地方の下郷町南倉沢遺跡1号住居跡の3例を取り上げて集落の性格を検討する。

真野ダム関連遺跡群の中でも平安時代の遺構・遺物が少数ながら確認されている。各遺跡の報告

第3章 まとめ

によると、真野川に面する細尾根状に散在する堅穴住居跡の分布状況から、水田経営に依拠しない「離れ国分」と指摘し、9～11世紀にかけて集落が營まれ、概ね2家族で1組の集団と推定している。そのうち松ヶ平A遺跡37号住居跡、1号製鉄遺構が確認されていることから、生業の一部に鍛冶を中心とした鉄製品の生産があったと指摘している。それらの鍛冶遺構は、恒常に鉄製品の生産を行うには、やや貧弱な施設で、生産された鉄製品も鉄釘が少量と評価している。平野部に存在する一般的な集落内でも鍛冶遺構が確認されることが多く、それらと大きな違いを見出すことができない。集落の性格としては、上記のAとする鍛冶に特化した工人集団の集落とするよりは、集落を構成する一つの職能で、集落内で使用する鉄製品の生産・修繕などに携わるものと理解できる。平ヶ谷地A遺跡と南倉沢遺跡の事例は、カマドを伴う堅穴住居跡が数軒確認されているだけの小規模集落跡である。集落の性格を特定できるだけの出土遺物に恵まれていないが、南倉沢遺跡から出土した鉄釘を積極的に評価すれば、これら集落はDに相当し、畑作農耕を生業の中心とし、それに加えて狩猟・木地師などに携わる集落としている。

荻平遺跡2号住居跡との比較では、松ヶ平A遺跡に見られる鉄製品の生産に関連する遺物など集落構成員の生業を特定できる所見はないため、平ヶ谷地A遺跡や南倉沢遺跡と同様に、D畑作農耕に依拠する山間部集落に分類できよう。

以上のことから山間部集落の特徴をまとめると、集落の分布域が山間部であるが、集落内の堅穴住居跡の構造やその出土遺物は、あえて山間部に集落が營まれたことを示す所見がない。次に古墳時代から奈良時代など從来まで集落が營されることはない山間部に小数の堅穴住居で構成された集落が造られはじめ、その出現期は、本県各地においても9世紀前半代には確認できる点である。山間部集落の出現に関する背景を考えるならば、律令制度に基づく国家的な社会基盤の整備・拡充があり、地域社会が山間部を開発できるまでに成長したのであろう。こうした山間部開発の担い手として、平野部の水田農耕だけでは得られない、木材・獸皮など多岐にわたる品々の獲得に従事した人々と考えられる。さらに山間部開発は、一般的な農民層が個々に従事したとは考えにくく、地域の有勢者および富裕層の存在が欠かせない。上記の分類でいうB・Cとする他地域の搬入品や仏教系遺物の出土が散見できる要因の一つとして現れている可能性を指摘しておきたい。

3 まとめ

今回の1次調査は、荻平遺跡の調査対象面積の10%程の部分的な調査である。縄文時代早期中葉から縄文時代晩期及び平安時代までの比較的長期にわたる人々の生活痕跡が確認された。しかし各時期における集落の規模やその構造など、まだまだ解明されていない事象が多いことも確かである。

荻平遺跡は、平成20年度以降継続して発掘調査を実施する予定である。平成18年度から実施された試掘調査の成果においても、遺跡南部にあたる宇多川の河段丘上に集落跡が分布することが示唆されている。これらの調査成果を待って、荻平遺跡を含めた相馬市西部の山間部に營まれた縄文時代から平安時代の集落跡のあり方について改めて検討したい。

写 真 図 版



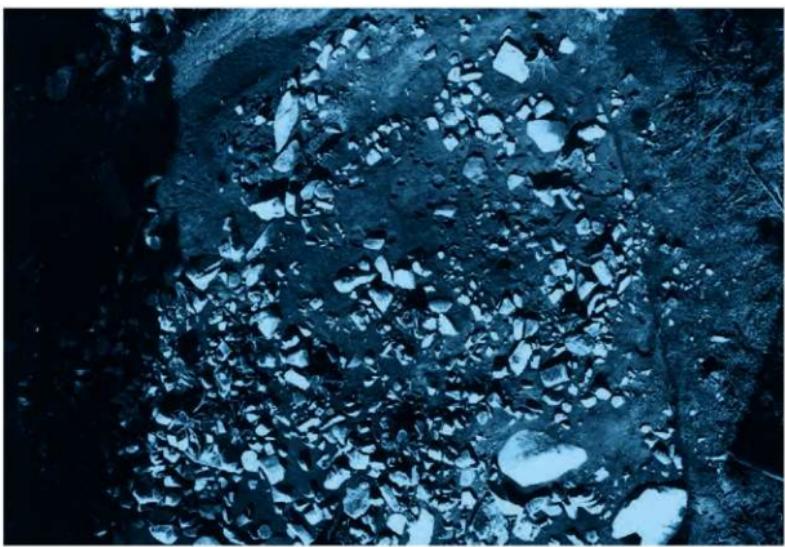
1 萩平遺跡遠景(南東から)



2 第1次調査区全景(上空から)



3 第1次調査区遠景(北西から)



4 調査区北端部全景(上空から)



5 基本土層

a B 3-B 2 グリッド断面(南から) b B 2-E 5 グリッド断面(南西から)

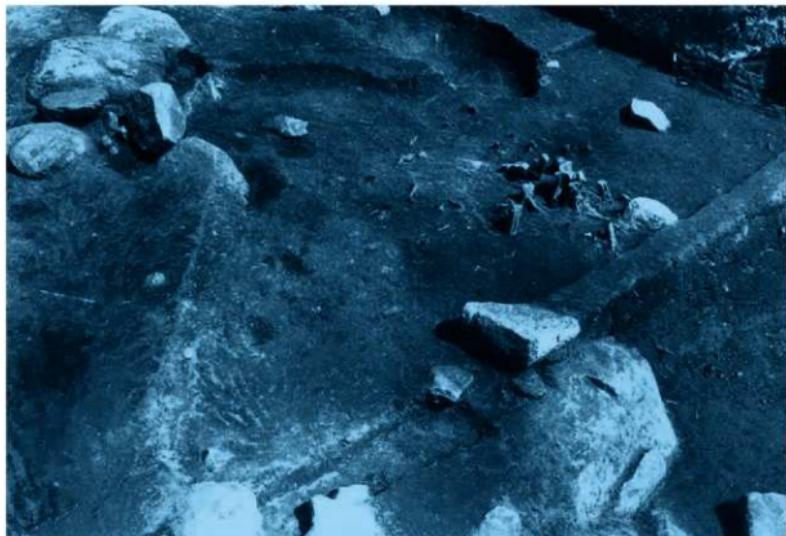
c B 2-G 8 グリッド断面(南西から) d B 2-G 8 グリッド断面(南東から)



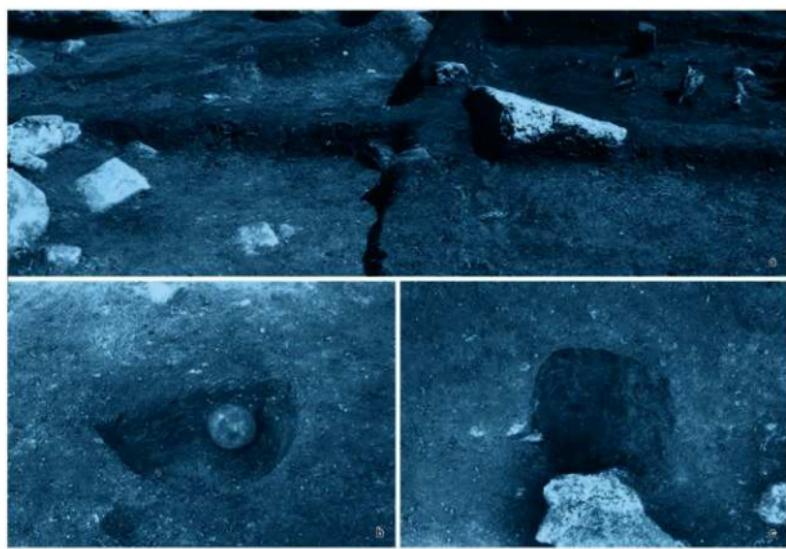
6 調査区近景・作業風景

a 作業風景(南から) b 作業風景(北から)

c 調査区近景(南から) d 作業風景(南から)



7 1号竪穴住居跡全景(南西から)

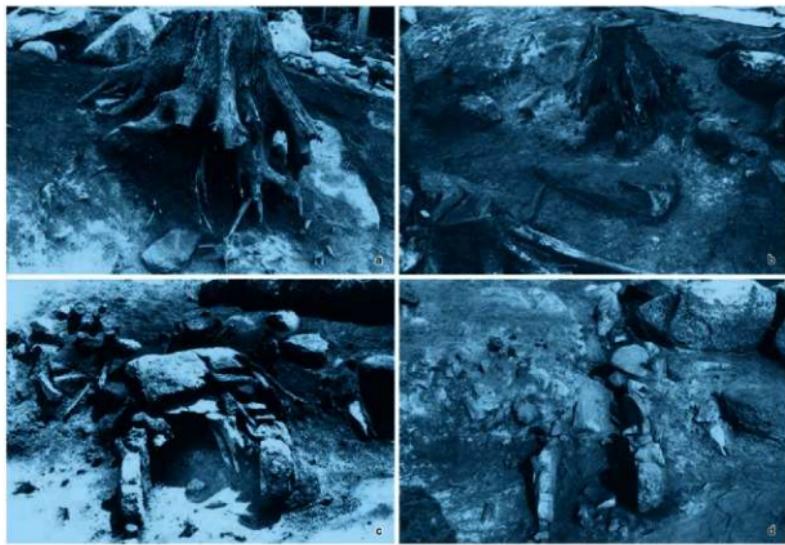


8 1号竪穴住居跡細部

a 土層表面(東から)
b P1土層断面(南西から) c P2全景(南西から)



9 2号竪穴住居跡全景(西から)

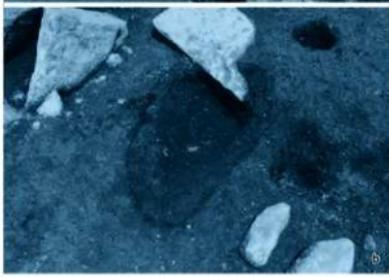


10 2号竪穴住居跡細部

a 土壁断面(北から)
b 床面確認状況(西から)
c カマド全貌(北から)
d カマド天井石除去後状態(北から)



11 3号竖穴住居跡全景(南から)

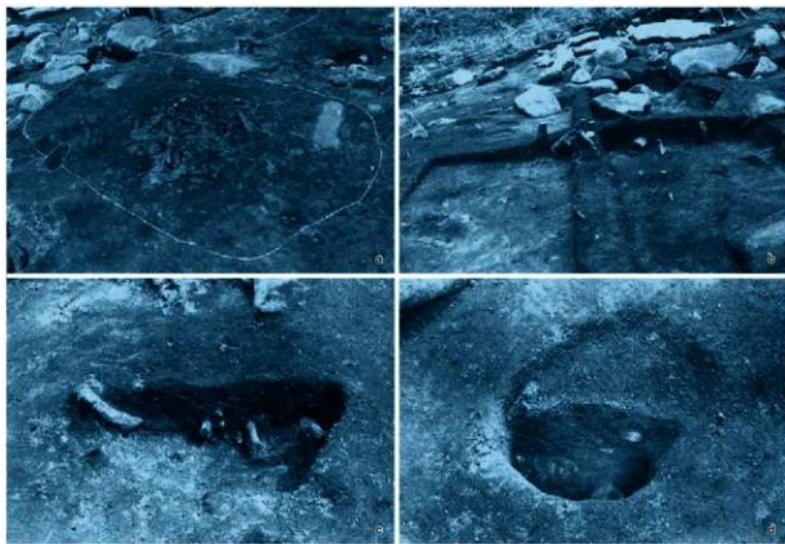


12 3号竖穴住居跡細部

a 土層断面(西から)
b 壁面確認(南西から) c 壁面ホリカタ完掘(南西から)



13 4号竪穴住居跡全景(南西から)



14 4号竪穴住居跡細部

a 挖出状況(西から)
b 土層断面(南から)
c P1 土層断面(南から)
d P8 土層断面(西から)



15 5号竪穴住居跡全景(南から)



16 6号竪穴住居跡全景(南から)



17 7号竪穴住居跡全景(北西から)



18 8号竪穴住居跡全景(北西から)



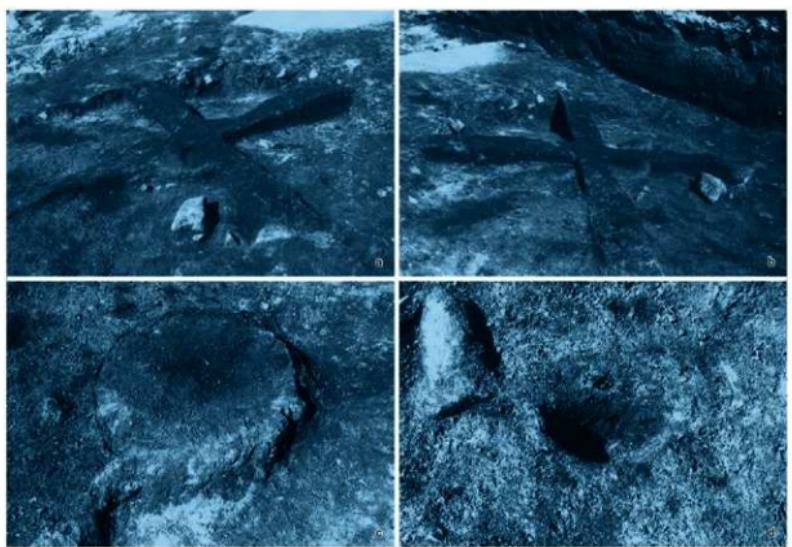
19 9号竪穴住居跡全景(南西から)



20 10号竪穴住居跡全景(北西から)

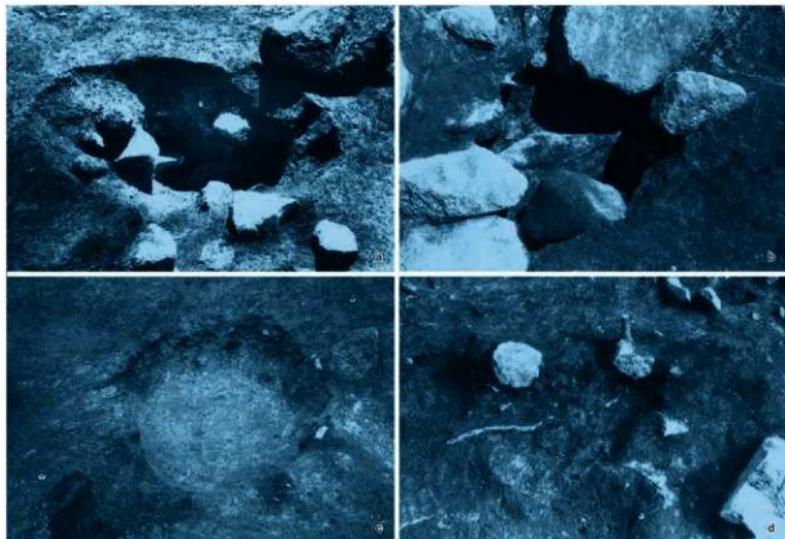


21 11号竪穴住居跡全景(南東から)



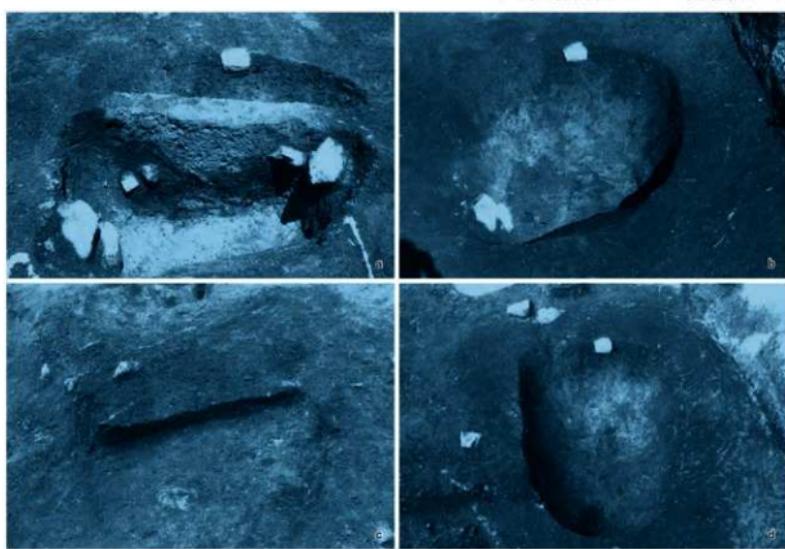
22 11号竪穴住居跡細部

a 土層断面(南東から)
b 土層断面(南西から)
c 伊勢磧(南東から)
d P I 土層断面(南東から)



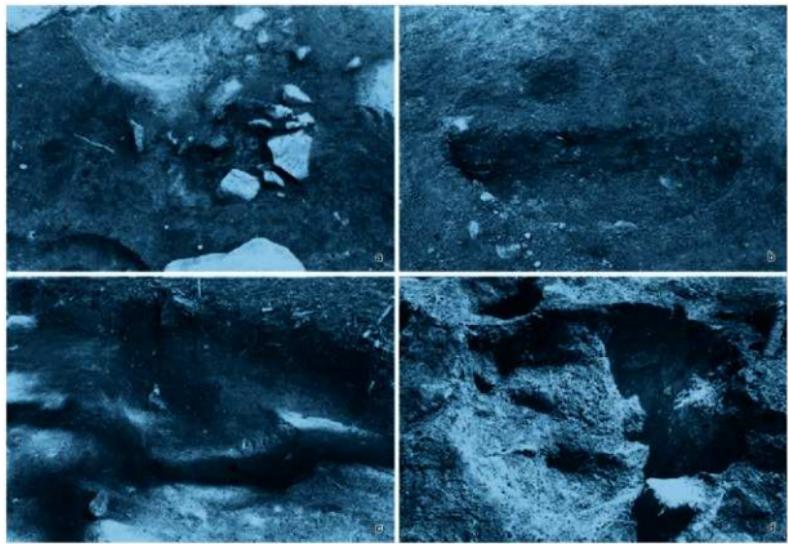
23 1～4号土坑

a 1号土坑全貌(西から) b 2号土坑全貌(西から)
c 3号土坑全貌(南西から) d 4号土坑全貌(北から)



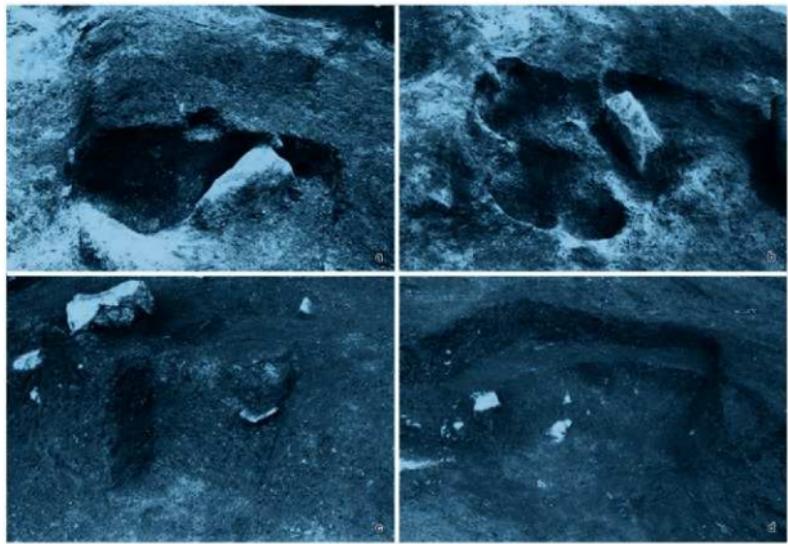
24 5～7号土坑

a 5号土坑土層断面(南から) b 5号土坑全貌(南から)
c 6号土坑土層断面(北東から) d 7号土坑全貌(南から)



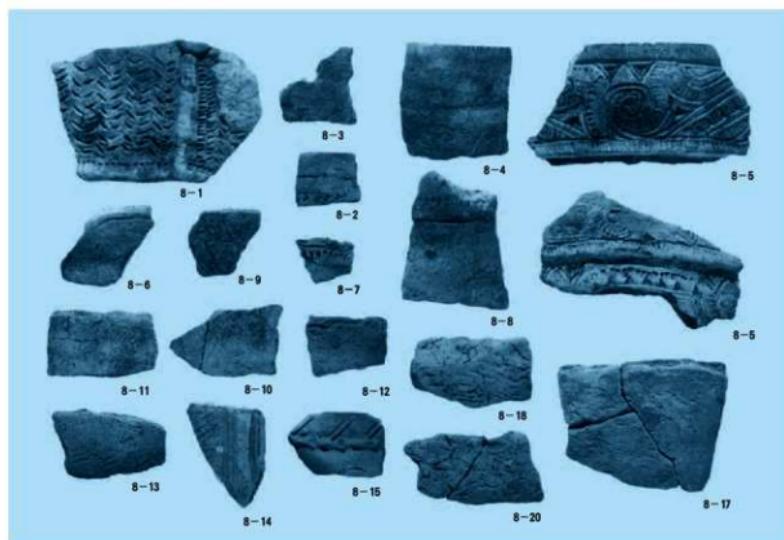
25 8～10号土坑

a 8号土坑全景(西から) b 9号土坑土層断面(南から)
c 9号土坑全景(南から) d 10号土坑全景(北西から)

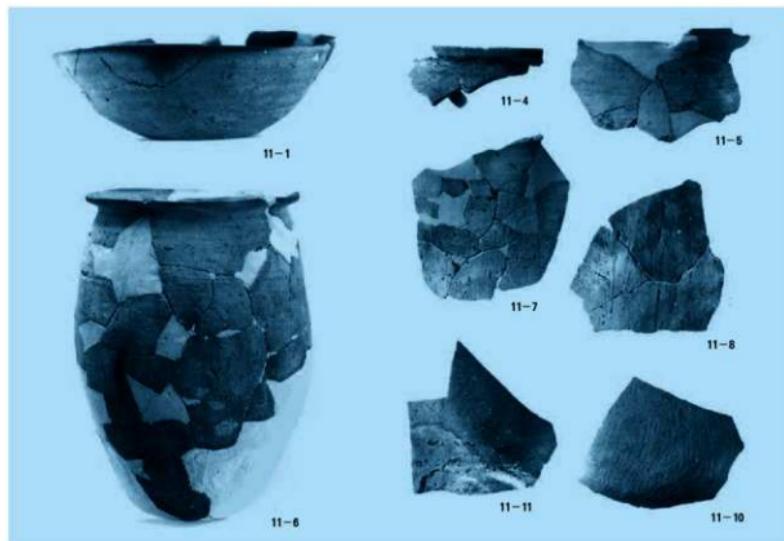


26 11・12号土坑

a 11号土坑土層断面(西から) b 11号土坑全景(東から)
c 12号土坑土層断面(南西から) d 12号土坑全景(南から)



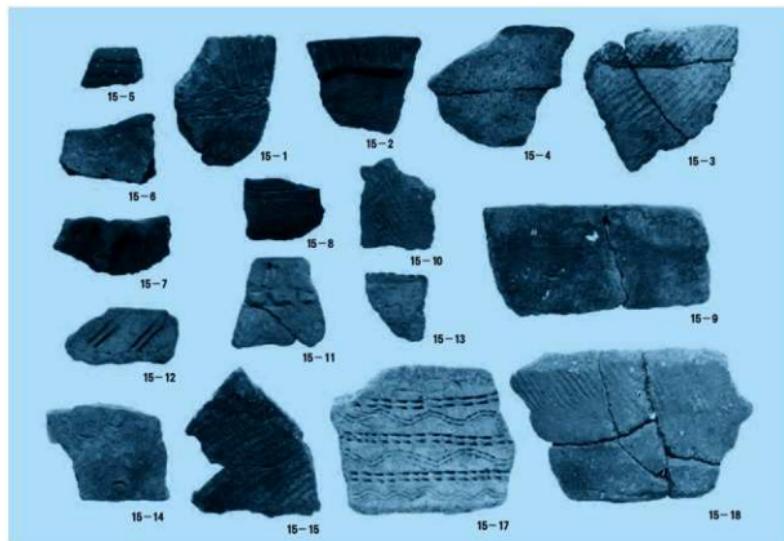
27 1号竖穴住居跡出土遺物



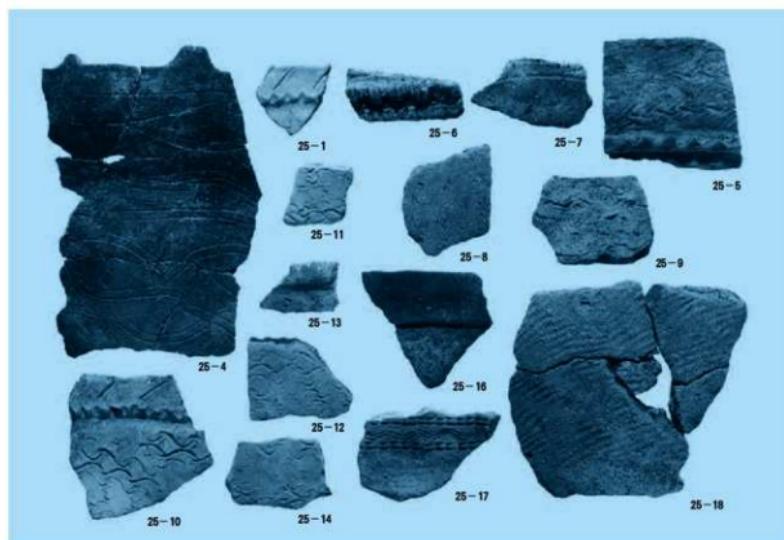
28 2号竖穴住居跡出土遺物



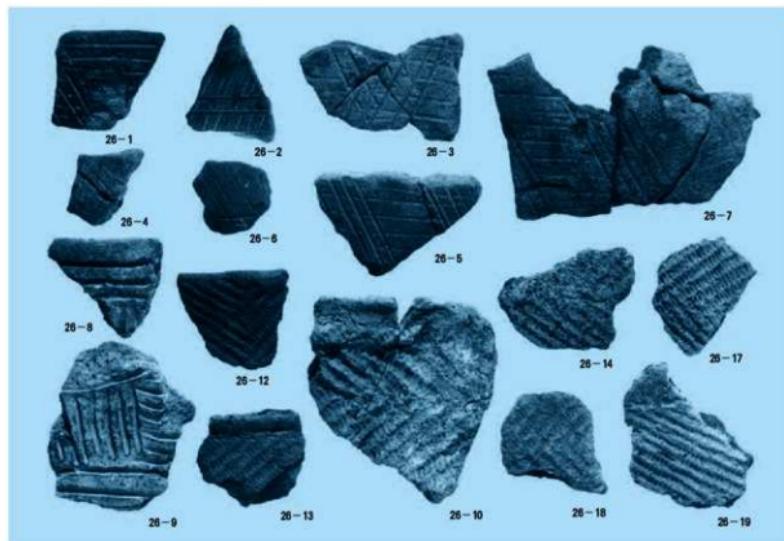
29 3·5·11号竖穴住居跡出土遺物



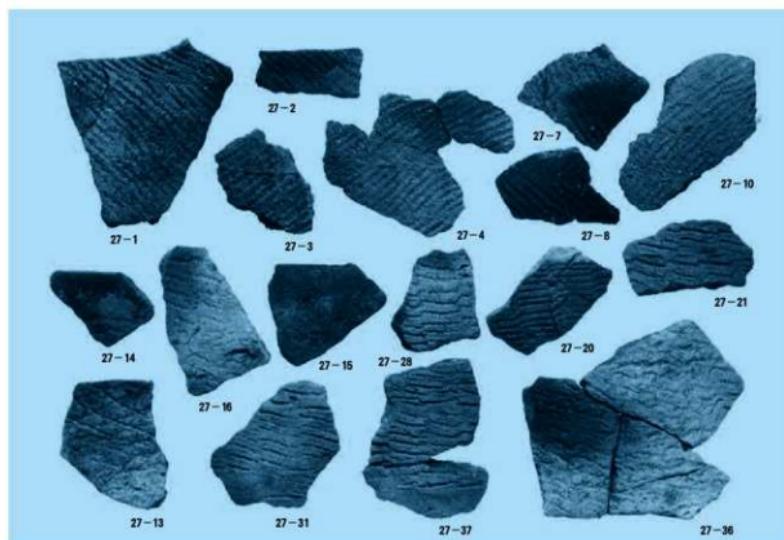
30 4号竖穴住居跡出土遺物



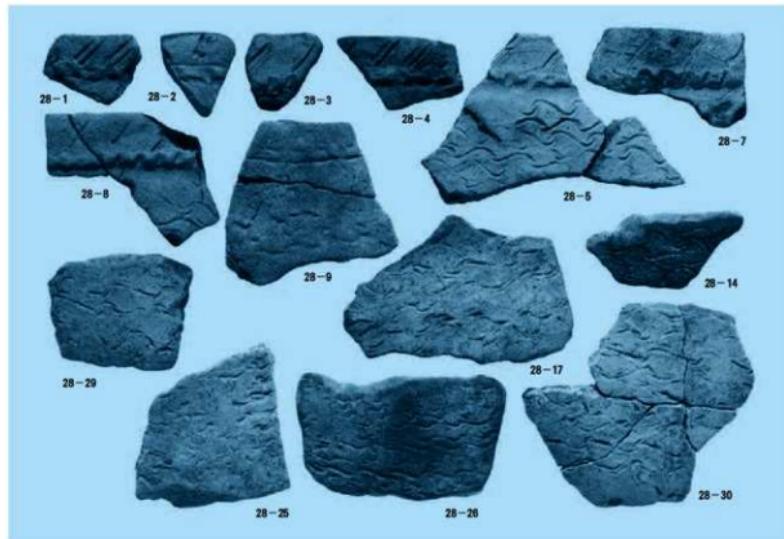
31 土坑出土遗物



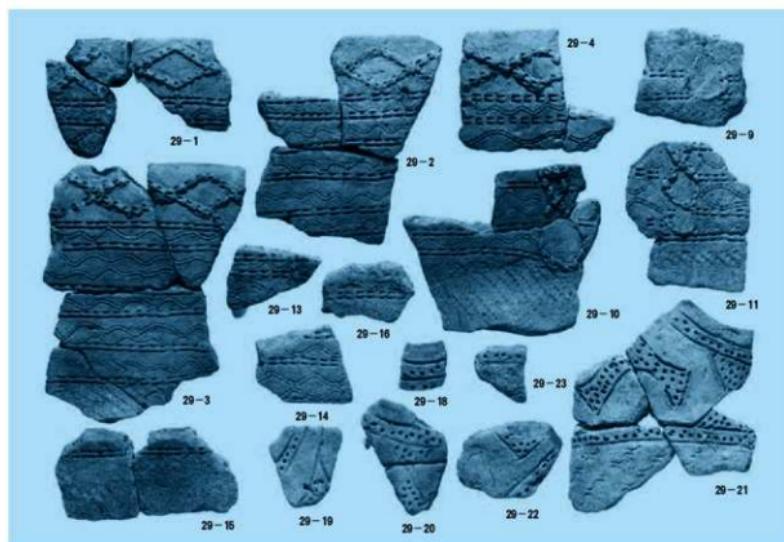
32 遗構外出土遗物(1)



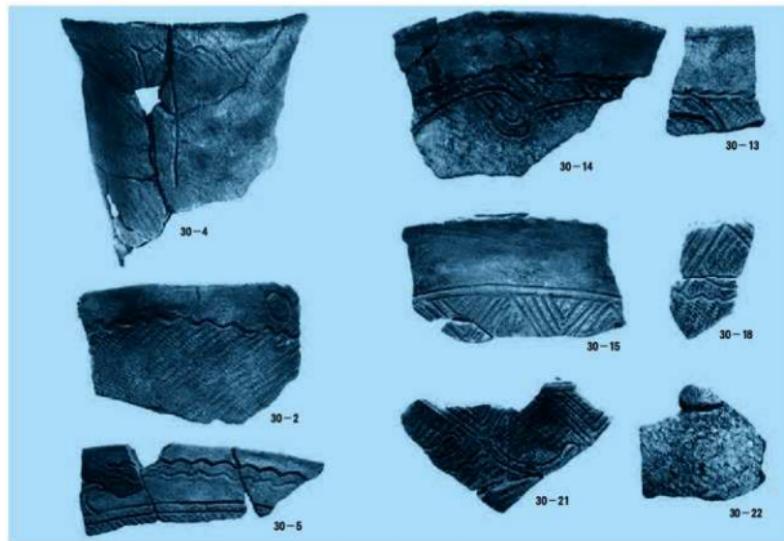
33 遺構外出土遺物(2)



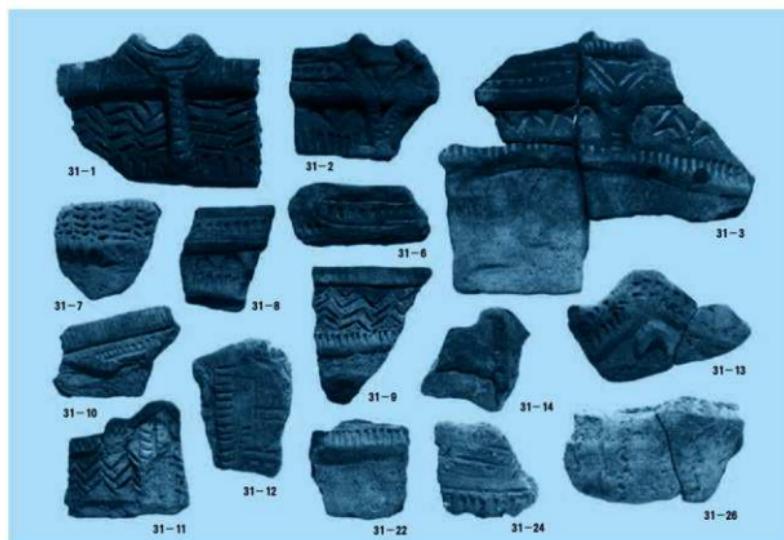
34 遺構外出土遺物(3)



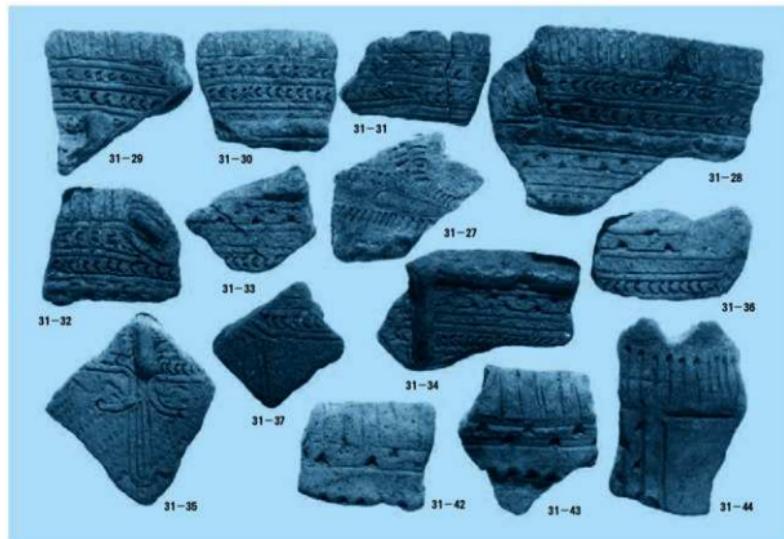
35 遺構外出土遺物(4)



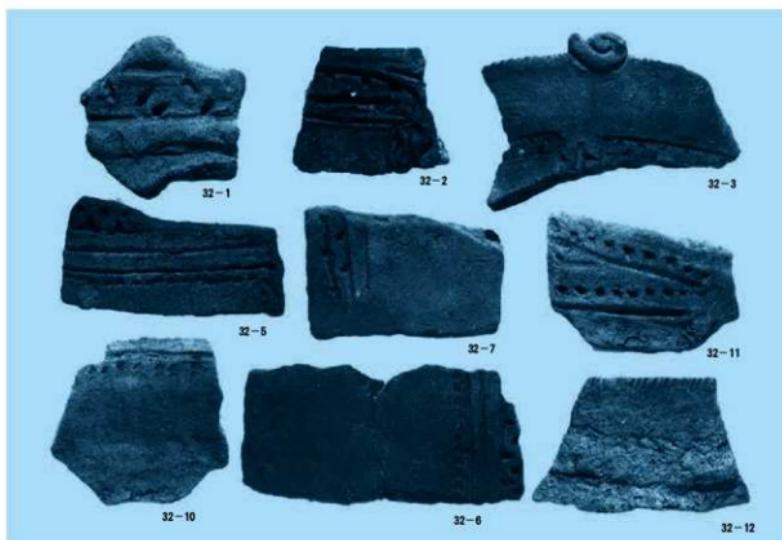
36 遺構外出土遺物(5)



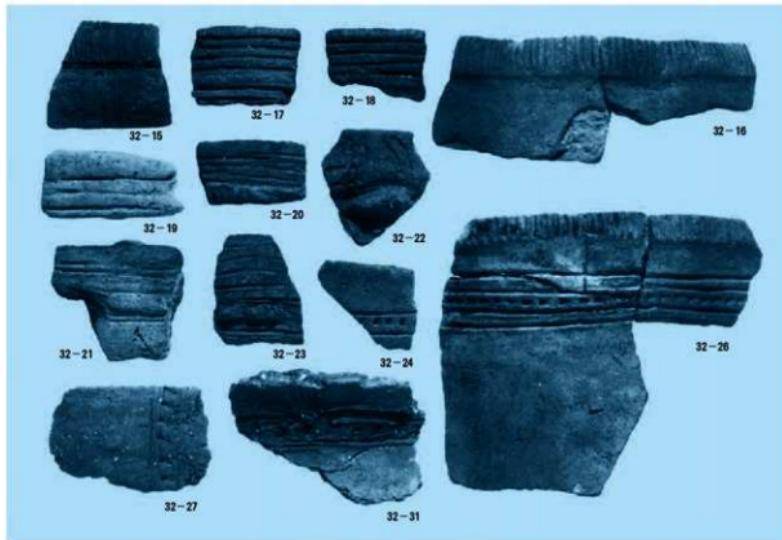
37 遺構外出土遺物(6)



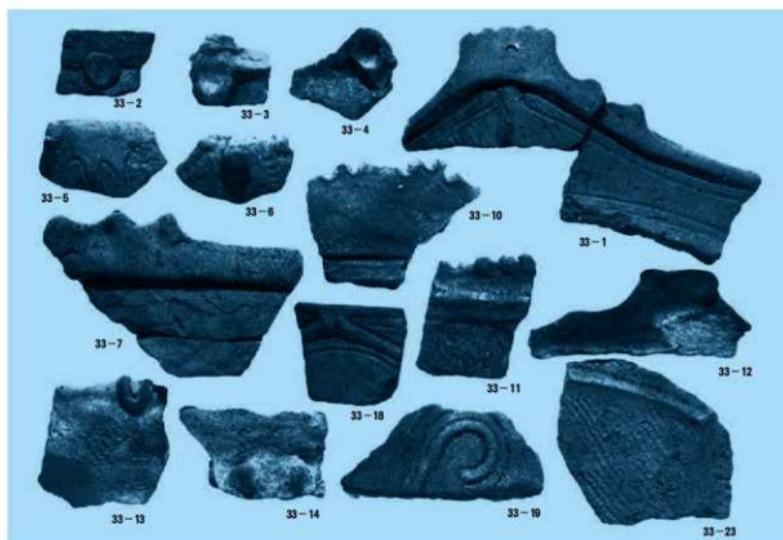
38 遺構外出土遺物(7)



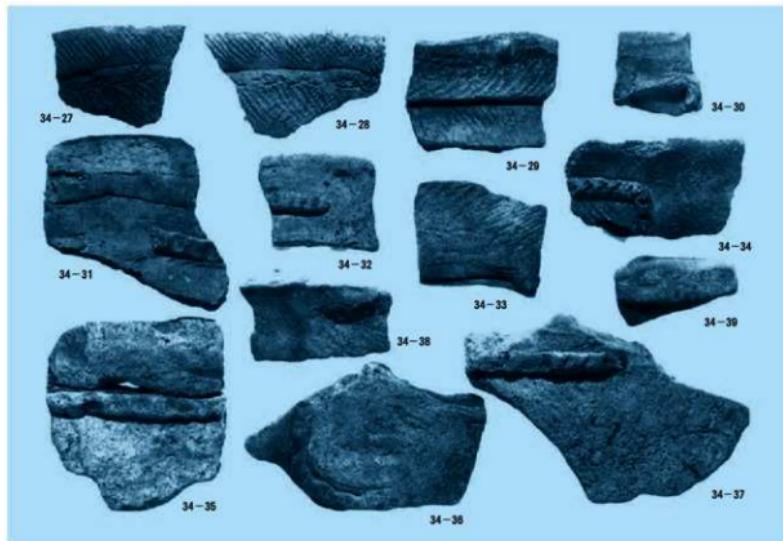
39 造構外出土遺物 (8)



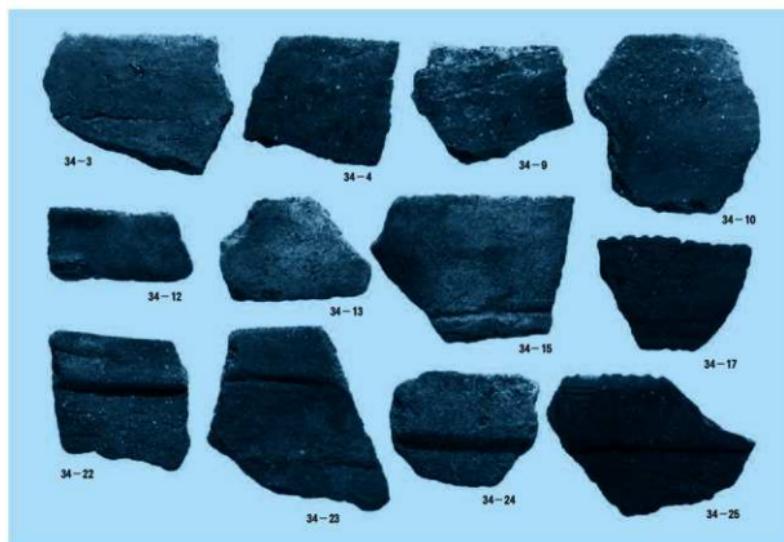
40 造構外出土遺物 (9)



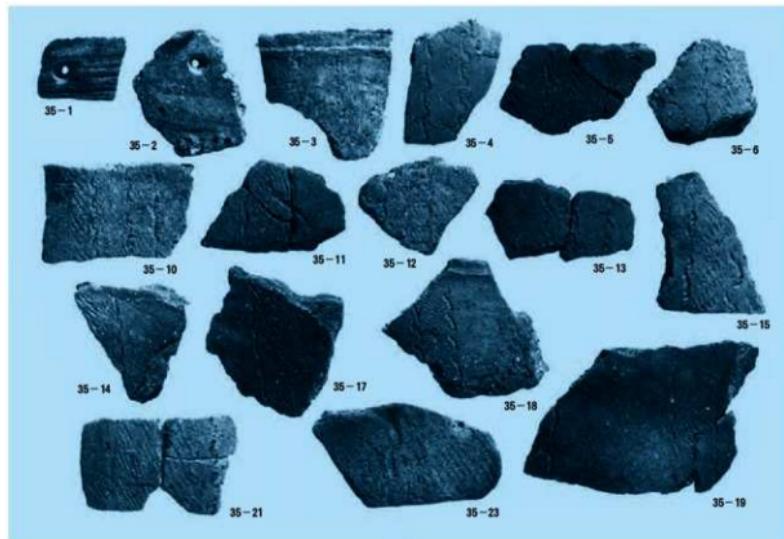
41 遺構外出土遺物 (10)



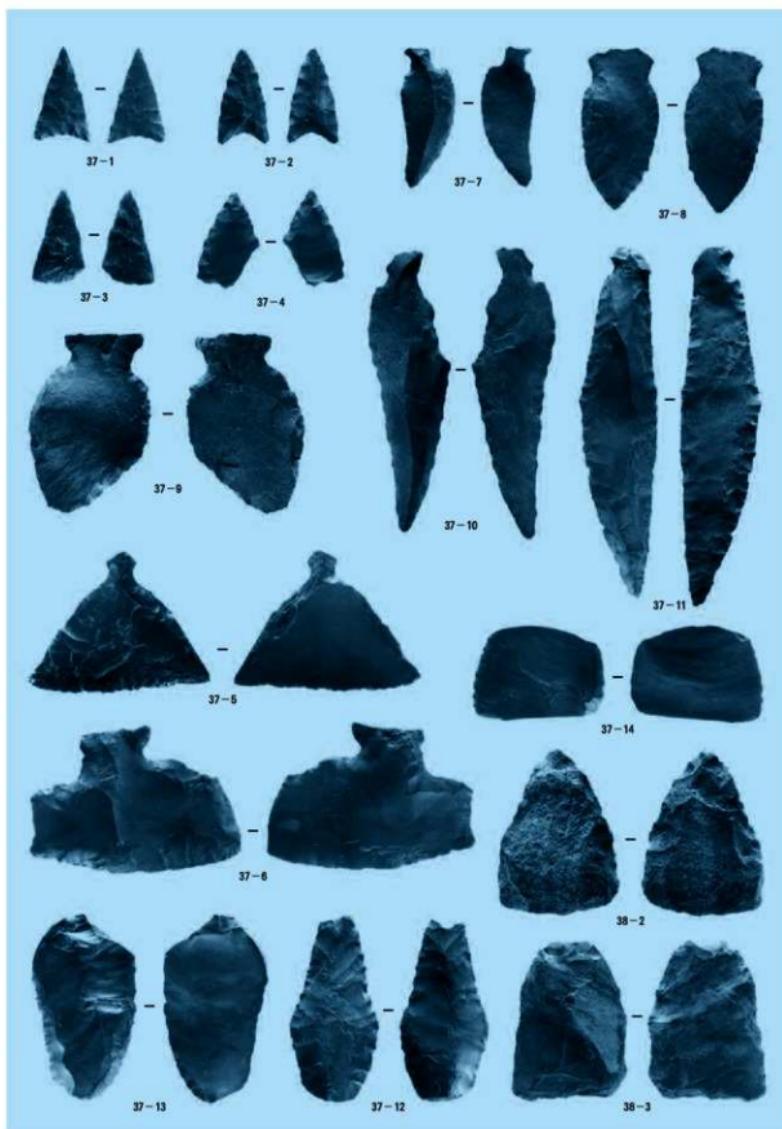
42 遺構外出土遺物 (11)



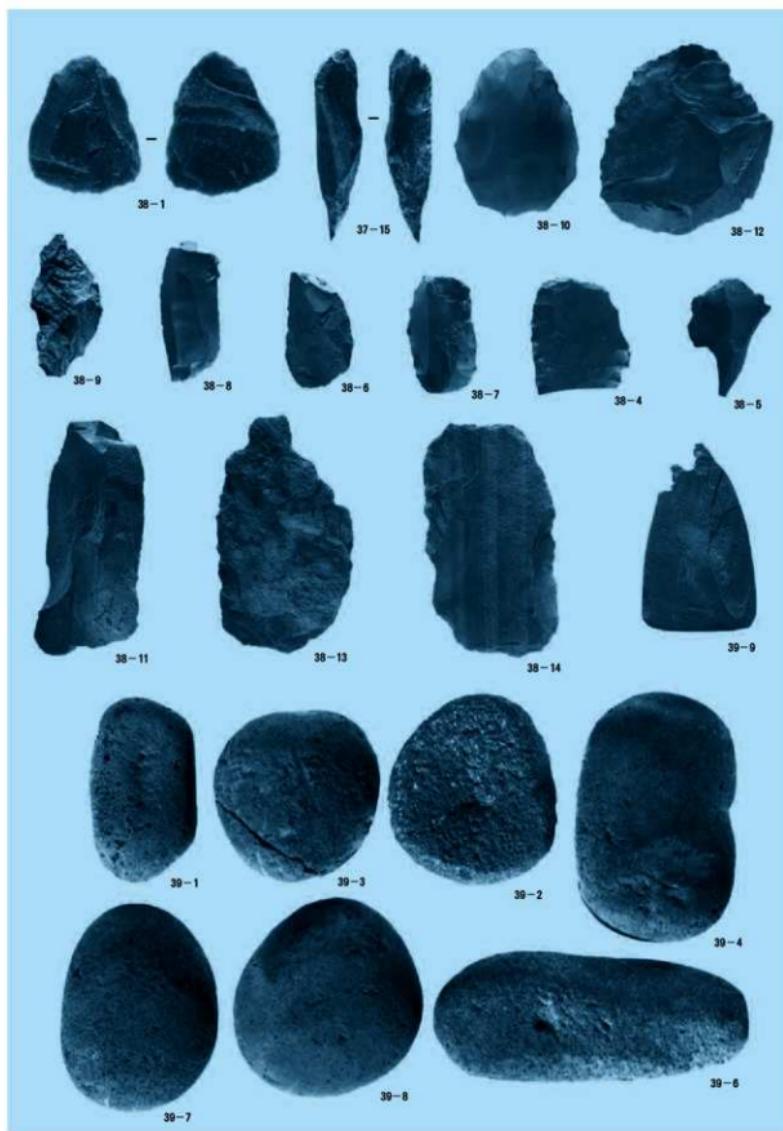
43 遺構外出土遺物 (12)



44 遺構外出土遺物 (13)



45 遺構外出土遺物 (14)



46 遺構外出土遺物 (15)

報告書抄録

ふりがな 書名	あぶくまひがしどうろいせきはっくつちょうさほうこく1 阿武隈東道路遺跡発掘調査報告1							
シリーズ名	福島県文化財調査報告書							
シリーズ番号	第455集							
編著者名	福田秀生							
編集機関	財団法人福島県文化振興事業団 遺跡調査部 遺跡調査グループ 〒960-8115 福島県福島市山下町1-25 TEL 024-534-2733							
発行機関	福島県教育委員会 〒960-8688 福島県福島市杉妻町2-16 TEL 024-521-1111							
発行年月日	2008年12月1日							
所収遺跡名	所在地	コード		北緯	東経	調査期間	調査面積	調査原因
	市町村	遺跡番号						
おぎだいら 萩平 (1次調査)	福島県相馬市 山上字萩平	209	00202	37°47'13"	140°47'31"	2007年5月21日 ~ 2007年11月22日	3,300m ²	道路(阿武隈東 道路)建設に伴 う事前調査
所収遺跡名	種類	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項			
おぎだいら 萩平 (1次調査)	集落跡	縄文時代 平安時代	堅穴住居跡(11) 土坑(12)	縄文土器 石器 土師器 須恵器	堅穴住居跡の年代は、縄文時代前期前業から中業、中期初頭。平安時代に属する。遺物は縄文土器が大半を占め、縄文時代早期中業から晩期まで、各時期とともに少量ながら遺物が確認される。			
要約	萩平遺跡は相馬市西部の山間部に所在し、宇多川上流域の河岸段丘上に位置する遺跡である。今回の1次調査では、萩平遺跡の最北端部、3,300m ² の調査範囲である。調査の結果、縄文時代と平安時代にかけての複合遺跡であることが確認された。縄文時代では、縄文時代早期中業から晩期まで、各時期とも堅穴住居跡を2軒確認した。各時期とも堅穴住居跡が数軒からなる小規模集落と推定されるが、山間部集落のあり方の解明に一助となる貴重な事例である。							

* 緯度数値は世界測地系による

福島県文化財調査報告書第455集

阿武隈東道路遺跡発掘調査報告1

萩平遺跡(1次調査)

平成20年12月1日発行

編集	財団法人福島県文化振興事業団	遺跡調査部	遺跡調査グループ
発行	福島県教育委員会	(〒960-8688) 福島市杉妻町2-16	
	財団法人福島県文化振興事業団	(〒960-8116) 福島市春日町5-54	
	国土交通省東北地方整備局福島河川国道事務所	(〒960-8584) 福島市黒岩字復平36	
印刷	八幡印刷株式会社	(〒970-8026) いわき市平田町82-13	